

三國干涉

近松秋江

25

20

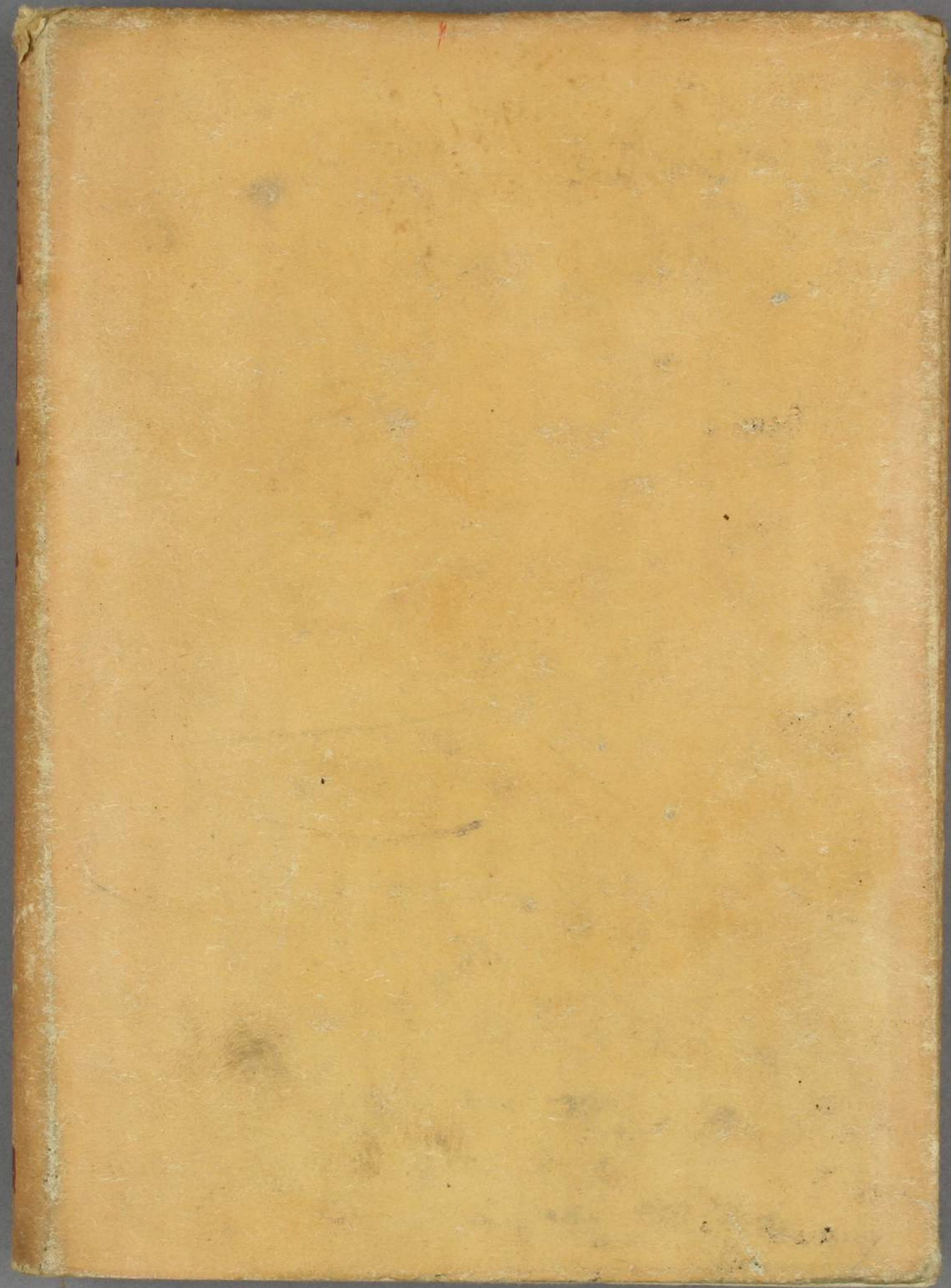
15

10

歷史  
小說  
三國干涉

近松秋江

櫻井版

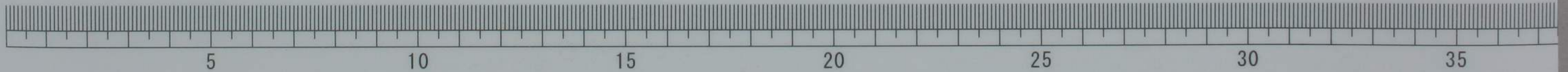


歷史  
小說  
三國干涉

近松秋江  
櫻井版

三國干涉

近松秋江



三國干涉

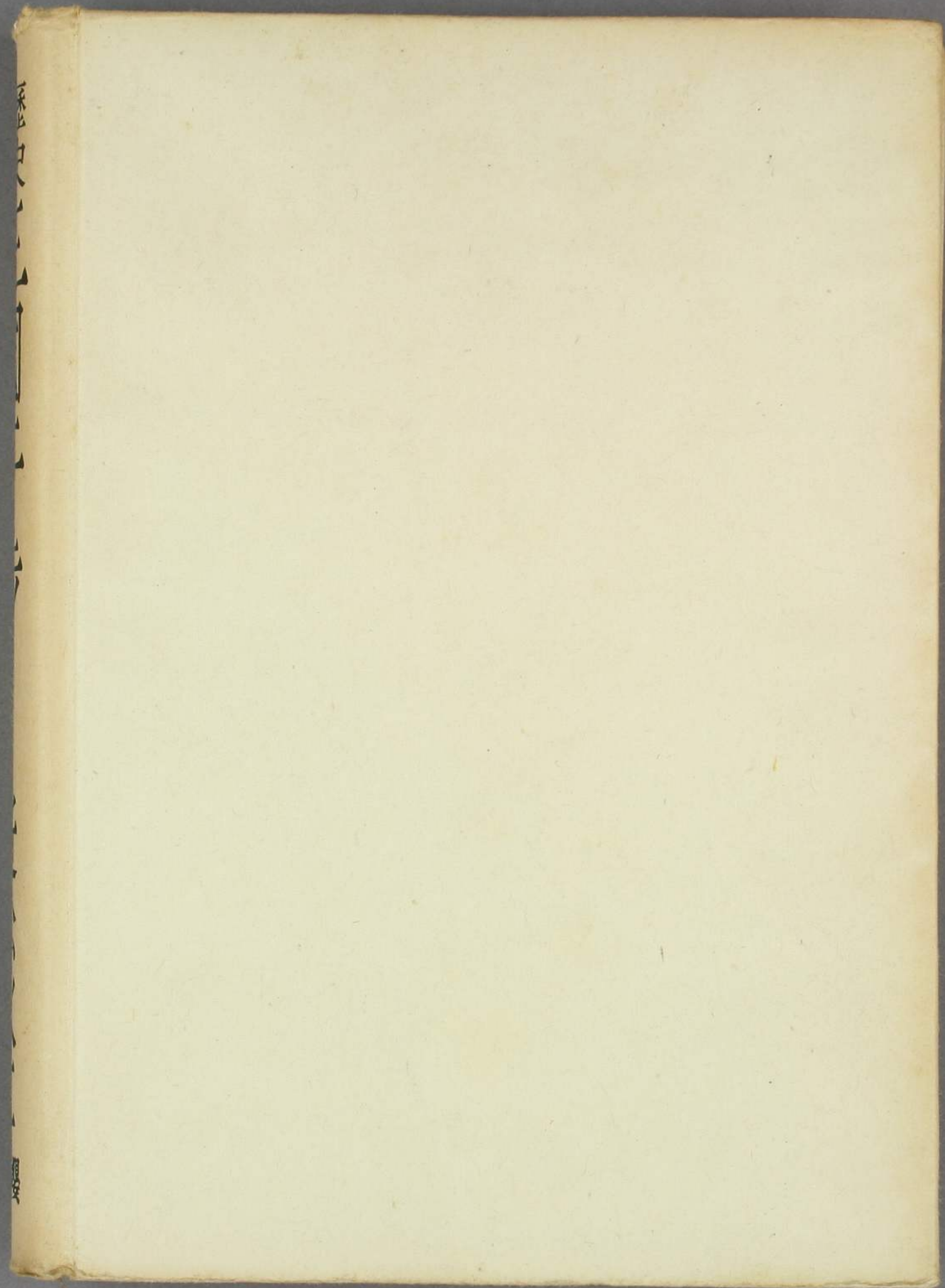
近松秋江

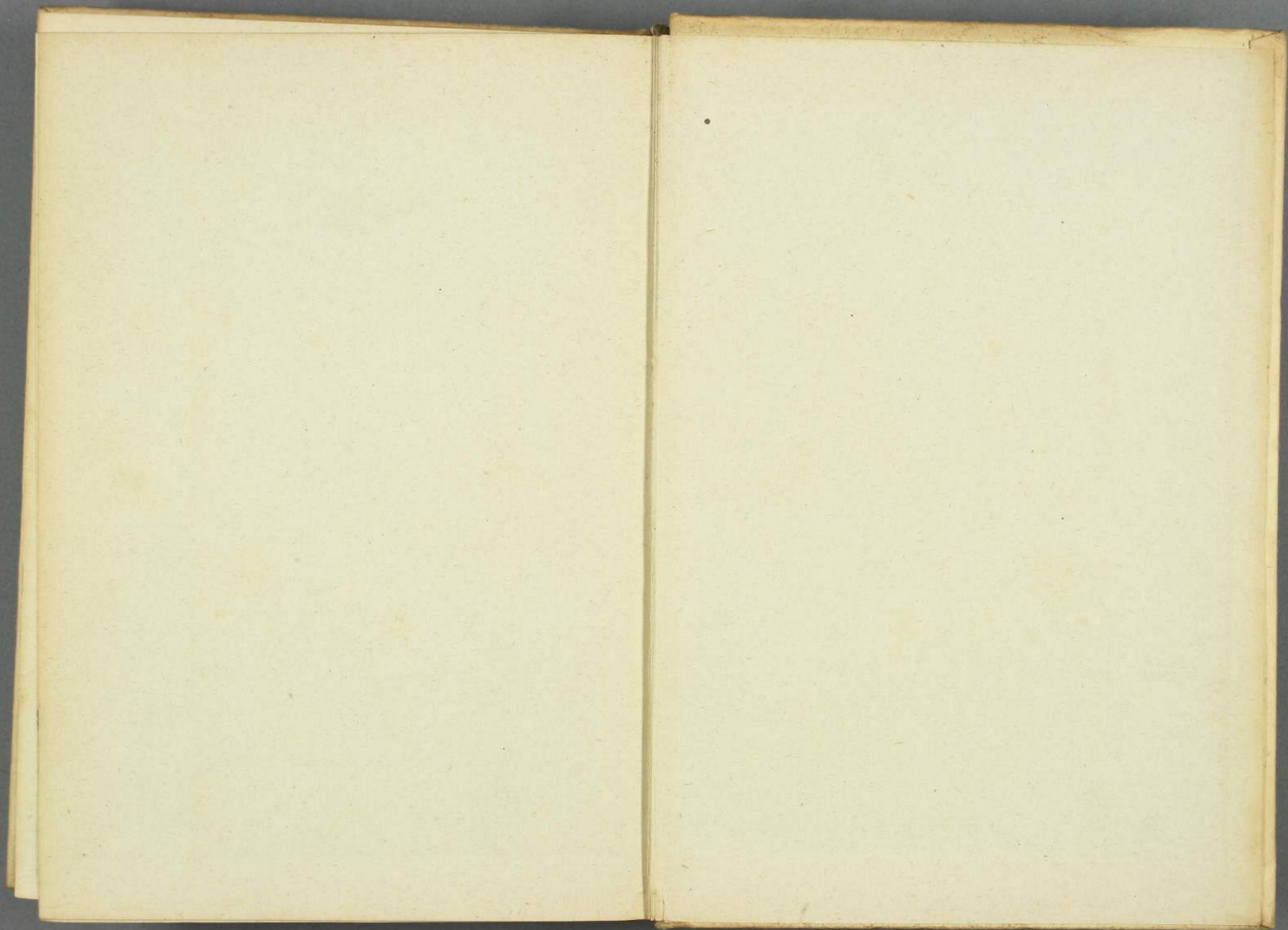
小説三國干涉  
近松秋江  
版

歷史  
小說  
三國干涉

近松秋江

櫻井版







三國干涉

近松秋江

櫻井書店版

### 「三國干涉」の巻首に題す

近松秋江君が失明して以來、相見ざること已に茲に三年、數日前「三國干涉」の原稿を送り來て、余の序文を求めらるるに會ふ。その書翰は纖巧なる女性の代筆であるが、余はそれが多分令嬢の手に成つたものであらうと推察し、老文豪の近情を想像して、暫時黯然たるものがあつた。

秋江君は人情の機微を寫し、男女の思怨を描くに於て、天縱の才あるのみならず、また善く時勢を論じ、政治を評したが、文士にして政治を解するなご君が如きは絶無とは云はざるも、稀有と云ふべきものがあつた。天は君に於て此の如く多分の才能を賦與したるに係らず、福分を與ふるに於て、甚だ

吝なるものは何故であるか。命か、數か。そもくゝまた人か。

秋江君は故陸奥伯の門下生たる岡崎邦輔翁や、中田敬義翁などと親交があり、陸奥外交を中心とする政治に就て研究する所少からず此「三國干涉」の如きは、近世外交の真相を描くに於て、殆んど遺憾なしと云ふべきほどの名篇である。余は世人が此書に於て、花月雲烟の他、秋江君が政治評論家としての一面を看取せんことを望むものである。

昭和十六年七月二十六日

竹越與三郎

## 序

一國の外交は、國家が把持する國策の遂行を以て其方針となし、之を推進しゆくべきは固より言ふを待たず、而して之が局に當る者の才能手腕の如何に因り、操縦折衝に自ら巧拙の差あるは當然の事なれども、之を要するに其時々に於ける實在の國力と四圍の情勢に因り、自ら之が弛張寬嚴を計慮せざるを得ざるは、亦是非もなき事なり。日清戰爭の終局に於ける露獨佛三國干涉に處せし措置の如きは、即ち是れなり。而して今は其事ありしより四十餘年を経過し、此間に於ける帝國の國力駸々として伸張し、威勢赫々として振揚し、優に世界列強と對峙競逐するに足るに至りたれば、斷えず變轉定り

なき國際情勢の然らしむる所、往時睚眦相視たりし獨國は今は親善同盟の關係に在り、又露國の如きも中間發生せし種々の事は別とし、今は蘇聯とし不可侵の締約を見るに至れる等、當時三國干涉事件に多少たりとも携はりし余としては、往時を回顧し皇國國運の益々隆盛なるを欣喜すると同時に、感慨無量なるものあり、聊か一言以て篇首に辯す。

中田敬義

## 序

此度櫻井書店から私の歴史短篇小説を出版してもらうことになったのは、大變に嬉しい。これ迄に出版した何れもの單行本に比べて、此の集程自分にとつての悦びはない。歴史小説といふのは少しくおこがましいが、私がそも／＼讀書の趣味を解し且つ年少文筆に志を抱いた當時から、史筆を以つて立つことが希望であつた。然るにジャーナリズム文壇四圍の情勢は私の素志を果たさしむるに妨げが多かつた。それは一つは私自身の意志が鐵の如く堅くなかつたからでもあつたが、又リアリズムの文學に徹底的に興味を持つてゐたので、それを棄てることも出来なかつた。然し自分は二兎を追ふことを遺憾としない。歴史上の武將や政治家を観ること恰も明治大正時代の政黨政治家と同様に觀察せんと企てた。

私の頭の中には、年少史書を愛讀した時代から依然として今日の老境に至

る迄英雄崇拜の感情は存続してゐる。然し、こゝに英雄と言ふのは單に武將のみを言ふのではない。カーライルの所謂藝術の英雄も宗教の英雄も悉く私にとつては崇拜の的でないものはない。

殊に況んや歴史を読むことは、國家生活の正しき進路に通曉する常識の基礎を涵養する大切なことである。以つて序となす。

尙當時外務大臣秘書官たりし中田敬義翁の序文と、陸奥外務大臣と親交のあつた現樞密顧問官竹越三又先生の序文とを戴いたことを作者は光榮として此所に感謝する次第である。

昭和十六年七月二十六日記す

著者

## 目次

序	竹越與三郎	一〇八
序	中田敬義	一〇九
序	著者	一一〇
三國干涉		一一一
岡崎邦輔翁に訊く		一一八
政界回顧		一二九

英雄涙あり……………一三一

太閤歿後の風雲……………一六一

明恵上人と泰時……………二四三

その前夜……………二一三

柳營夜話……………二八九

頼朝と女性……………三一一

自註……………三三七

三國干涉

明治二十八年の四月半ば。

關門海峽には春の押寄せて來るのも早かつたが、玄海灘を渡つてシベリヤ大陸の方から吹いて來る寒波は、動もすれば、すでに開きかけた櫻や李の花を縮ませた。

下關の大吉旅館の二階十二疊と十疊の二室つゞき。ゐながらにして春の海を往來する風帆も眺められた。一衣帯水の九州路の山々も淡い霞を隔て、指呼の間に見えてゐる。

それにもかゝはらず、春の海から吹いて來る風を厭うてか、長い縁側の障子はいつも閉め切つたまゝである。

外務大臣陸奥宗光は、五六日前から宿痼の胸の病が再發して、今は三十九度から四十度の高熱に悩まされてゐた。

去年——二十七年の初夏日清の關係が悪化して、國交斷絶。この極東の平安の爲には、唇齒輔車の仲である兩國は不幸にして遂に銃劍と砲火の間に相見えなければならぬことゝなつたが、戦争は常に日本にとつて連戦連勝。そして今は此の戦争を一日も早く終結して、再び元のとほり兩國を平和な國交に恢復せんがために、もう一ヶ月前から、此の下關の地に於て兩國全權大臣によつて媾和談判が進められてゐるのであつた。

陸奥は、總理大臣の伊藤博文とともに、その全權辦理大臣であつた。戦争は日本にとつて幸に大勝利であつたが、この戦勝の結果を空しくせぬやう有終の成果を納める責任は、一に掛つて媾和兩全權の双肩に負はなければならなかつた。氣性豪邁の陸奥は、その自から任ずる所も高かつたが、身を以て一國の外交の重責に當つてゐる以上、いかにして、この前古未曾有の戦勝の効果を空しからざらしめんかといふことについては、夜も安らかに眠らず、肺肝を碎くこと一と通りではなかつたのだ。

陸奥は、又頻りに咽喉に絡んで來る痰に、苦しい息づかひをしてゐたが、側に附添つてゐる看護婦が取つて差出した痰壺に、少しく頭を擡げて、漸つこのことで、それを吐いた。一人の看護婦は、反對の側から、その背後を靜かに撫でてゐる。

この二人の看護婦は、廣島の大本營に在します、天皇陛下の畏い思召に依つて、廣島の赤十字社病院から、陸奥が重態といふので特に差遣はされてゐるのであつた。

「いくらからお樂におなり遊ばしましたか」

看護婦は靜かに訊いたが、陸奥は頭を枕の上に載せたまゝ唯黙つて溜息を吐いてゐるだけであつた。

「ついでにお體温を計つてみませう」

も一人の看護婦がさういつて、檢温器を腋に挟むのを、陸奥は仰臥したまゝ、彼女等の爲すにまかせてゐた。



熱は依然として三十九度を越してゐる。看護婦達は黙つて互に顔を見合はしたが、病人には、それを告げなかつた。陸奥も黙つたまゝ、訊かうもしなかつた。

次の室には、東京の本邸から呼寄せた女中が二人。火鉢の傍に行儀よく坐つてゐた。屬官も時々そこまで出入りしてゐた。

そこへ階下から靜かに階段を踏んで上つて來たのが、陸奥の長子で外務書記官の廣吉と、秘書官の中田敬義であつた。

「今お眠みですか？」中田が低聲で女中に訊くと、

「いえ、一寸お苦しみのやうでございます」

「又?！」

憂はしげに廣吉がいひつゝ、音せぬやうに、一人の女中が膝をついて靜かに押開く襖から病室に入つていつた。中田もつゞいた。

「また、お苦しみですつて?」

中田が小聲で看護婦に訊うた。

病人は、神氣は覺めてゐるのだが、じつと兩眼を瞑つてゐる。

中田は靜かにその枕邊に近く進み寄つて洋服の膝で坐り、

「閣下！」

と言葉を掛けた。

その理智の鋭いので、剃刀大臣と仇名に呼ばれてゐる如く、容貌まで剃刀のやうに細つた顔は、この頃の病苦のために一層尖つて血の氣の失せた兩頬の間に鼻ばかりが峻しく高くなつてゐる。

今まで双眼を閉ぢてゐた陸奥は、中田の、この聲を耳にすると、忽ち刮と、兩眼を見開いた。それは爛々たる光を放つ特色ある眼であつた。そして少時してから、

「何だ?」

と訊き返した。

平常から、伴の廣吉にも秘書官の中田にも嚴命して、自分がいかに病氣に苦しんでゐる時でも、職責上重大なる用件がある場合には、構はず知らせよといつて居るのであつた。

それでも中田は遠慮がちの態度で、

「只今又本省から、かういふ電報がまゐりました。西公使からの情報でございませう。書記官と二人でこゝに清書いたしました」

といつて、美濃紙に淨書した電文を示した。それは、つい二日前四月の十一日露西亞駐在公使西徳次郎から東京の本省に居る林外務次官に宛て、打電して來た露國政府筋の、極東の事局に對する情報であつた。

西駐露公使からの電報と聽いたゞけで、病苦に窶れた陸奥の眼は更に炯々たる光を放つた。

「ナニ西からの情報!?!……讀んで聽かせ」

中田は靜かに電文の翻譯を朗讀した。

「露國外務大臣は、今回日清の談判を以て永續の平和を一旦締結するも、其條件を履行し能はざるが爲め、再び平和破裂するに至る如きことなきを望むと言ふに、より、本使は我國より要求する條件過重なりと思はるゝにやと問ひたり。同大臣は、之に答へて、清國公使は、大陸に於ける割地は清國の最も難澁する所、又償金の額は餘りに過大なりといひ居れり。然れども露國政府は未だ其事情を詳かにせざるを以て何等の意見を述べざる能はずといへり。本月九日、本使が露國駐劄の英國大使と面談の節、同大使云ふ、目下東洋の事件に關し、露國外務大臣は稍當惑し居るものゝ如し。日本國の要求は固より至當なり。多分英國政府は之に對して何等の抗議を爲さざるべしと。」

又本使が近頃傳聞する所にては、此程露國陸海軍協同委員會に於て、若し必要の場合に際し、露國陸海軍を以て、日本軍の北京に進入することを防止し得るやとの疑問起りたり、該委員會は之を陸上に防止する能はざるも、露佛兩國の艦隊を聯合すれば、之を海上に於て防止するを得べしと決議したる趣なり。本使は露國

が兵力干渉を企つることは、多分是れなかるべしと思へども、之を豫防するため十分盡力して怠らざるべし。尤も萬一の場合の爲め、我海軍に於て必要の準備を立て置かれんこと最も肝要ならん」

中田が息をも吐かず讀み了るまで、固唾を呑んで、凝乎と聽き澄ましてゐた陸奥は、眼を瞑つたまゝ、やゝ暫くの間、黙りつゞけてゐた。書記官も秘書官もそれにつれて同じく黙つたまゝ、病人の顔色をじつと見詰めてゐた。  
(何を考へてゐるのか?)

と思つてゐると、今まで蠟細工の如く蒼白であつた陸奥の兩頬は少しく紅を潮して昂奮の色を示して來た。それとともに、大きな二重瞼の、漆のやうな艶のある眞黒い瞳をガラリと輝かした。

「廣吉、貴様それを持つてすぐ梅の坊に行つて、總理大臣にさういへ。談判は一日も早く調印まで進行せなければなりません。……油斷のならぬ露西亞だ。どんなことを企んで居るか分らん」

陸奥は、語尾を、かう獨言のやうにいつて、つぶやいた。

二

總理大臣の伊藤博文は、陸奥外務大臣とともに、此度下關に於ける日清講和談判の全權辦理大臣の任に當つてゐたが、恰ど此日、清國側の全權大臣李經方を、旅館に招いて會談してゐた。

李經方は李鴻章の子であつた。初めは父の李鴻章だけが、欽差全權大臣として日本に派遣され、子の經方は唯參議として隨行して來たのであつたが、先月の二十四日父の李鴻章は、談判公署春帆樓から、その日の會談を了つて旅館の引接寺に歸つて來る途中、兇漢小山六之助の爲にピストルを以て狙撃された。この突發的の兇變は、清國側と李氏とにとつて不幸であつたよりも日本にとつて、より以上不幸であつた。

その爲に廣島の大本營におはします大元帥陛下の御宸襟を惱まし奉つたばかり

でなく、此の異變の爲に媾和談判の成果を、日本にとつて不利に導きはしないかと氣遣はれた。

殊に責任の地位に在る伊藤と陸奥の憂慮は非常なものであつた。

李全權大使の頬に受けた負傷は、彈丸が肉の中に留まつてゐるだけで、経過は幸にして良好であつたが、それ以來春帆樓の會談は暫く取り止めとなり、兇變後約一週間を経た四月に入つてから、殆ど文書の交換によつて談判が行はれてゐたのである。

そこへ、又此方では陸奥が、どつと病床に就いた。そして經方は、父の遭難の報が本國政府に傳はるとともに、今度新に全權大臣に電命せられたのであつた。

四月一日まだ病に臥さぬ陸奥は、李經方と春帆樓に會見して、日本側の媾和條件を全部提出し、四日間を期して、逐條的にか又は全體をか清國の諾否を明答せんことを要求した。もし又修正意見があれば、その改訂を申出るやう確約した。それにも係らず、李鴻章は病床より長文の覺書を送つて、日本より提出せる媾和

條件に對して事實的に諾否を答ふことをせず、徒らに支那流の美辭空言を連らね、縷々連綿として國內の事情を披瀝して哀訴するばかり、一向日本の提案に對しては要領を得た應答となつてゐない。

伊藤も陸奥も斷じてそんな泣き言を聽いてゐなかつた。清國國內の事情が、假にどうであらうとも、戰勝國と戰敗國とが媾和を議するに當つて、それは今語るべき限りでなく、又聽くべき限りでない。當面の問題は戦争の結果として、要求する所のものを要求するのである。普通の場合の外交上の折衝と同日の談でない。

かうして徒らに時日を遷延してゐる間に、敵方は、いかなる外交的工作を施さないとも限らない。以夷征夷いよくていせいすが古來清國政治家の六韜三略となつてゐる。

四日間を期して、唯諾否如何を明答してもらふと確約した。その四日の期限も空しく経過して、今日はもう四月十一日となつた。

それで伊藤は李經方を招いて諾否の返答を督促してゐるのである。

伊藤は通辯を介していつた。

「媾和の條件を貴方に提示して既に十日を經過してゐる。五日受取つた清國全權大臣の覺書を以て、日本は、提案に對する答として見ることは出来ませぬ。休戦期限は僅々残す所十日しかありませんぞ」

伊藤は顔色を和げながら言辭は嚴として寸分の隙も見せなかつた。

經方は、まだ四十そこ〜であつたが、清國第一流の政治家である鴻章の子として、流石にその對應振りといひ、風采といひ瀟洒溫容、對者あひてを外せらさぬ教養があつた。彼は懇懃なる調子で通辯をとほしていつた。

「日本全權閣下の仰せ至極御尤でございますが、目下私共父子の立場が極めて苦境に在ることを、ひとへに御高察願ひます。閣下御提示の條項中大半は承諾を茲に御確答申上げることが得ます。それは父の命により文書にして携帯して居ります。しかし、第二條の盛京省（後の奉天省）の南部（遼東半島）と臺灣及び澎湖列島を割地すること、第四條の軍費賠償金として庫平銀三億兩サイリを支拂ふこ

とは極めて重大な問題でございますから、單に文書を以て直ちに御約諾申上げることには困難でございます。父鴻章の容態は貴國醫博士の意見に聽きましても、まだ外氣に當ることを厭はねばならぬさうでございますから、或は私共の旅館に御出張を願ひまして、尙ほ此の二問題については慎重に熟議を重ねたいと存じます」

五日に受取つた李鴻章の覺書にも、この領土割讓と賠償金の事は縷々陳辯してあつた。

數千年來の歴史ある自國の領土を、一朝今次の戰敗の結果割地することは清國の非常に苦痛とする所であるばかりでなく、盛京省の地はそも〜三百年前清朝の高祖發祥の地である。又賠償金三億兩といふ巨額の金は、清國今日の財政事情を以てしては、到底負擔に堪へない過重な要求であるといふのである。

伊藤はやゝ顔色を勵まして、それを反駁した。

「その事は既に再三承はつた。今日に及んで、再び繰返へす要を見ない。初め陸

與全權の、貴方の需めに應じて、提案の全部を披露した際の約束は、條項全部を諾否するか、又は毎條逐一に意見を述べられるか、何方かの筈ではなかつたか。提案中の一部分は確答し、他の一部分は、更に面談を待つて答へるといふ御答案には、日本全權としては、承諾出来ないことであります」

李經方は當惑の色を面にして、

「閣下の仰せは、十分承知して居ります。でございますが、割地と賠償金額については、父李鴻章の一存には計らひかねまするので、本國政府の訓電を仰ぐの他はございません」

「それは、いはれずともその事です。しかし欽差全權大臣として責任に當つて居らるゝ以上諾<sup>イエス・オウ・ノー</sup>又否の明答が出来ぬ筈はござるまい。只今も申すところ、休戦期間には剩す所十日しかない。徒らに時日を空費して再び干戈を交へることは兩國相互に好まぬことではありませんか」

經方は、それを聽いて、唯はいくゝといつてゐるばかりである。眞實をいふ

と、李父子は、去る四月一日陸奥全權から、始めて、日本の要求條件を提示されて以來、本國政府と數次の通電を交換して、一日遅れに時日を延ばし、其間に乘じ、以夷征夷の常套手段を用ひ露佛あたりの干渉を誘導し、日本側の戦争の結果を、彼一流の老獪なる外交工作によつて水泡に歸せしめんを企てゝゐるのであつた。

伊藤も陸奥もそのくらゐの事は夙に察してゐた。

「先日の文書にもいはれた、割地は遼東か臺灣の中、いづれか一方のみにしてもらひたいこの事。これは斷じて承引出來ぬことです。又賠償金も多少の輕減は出來るか知れんが、三億兩を一億兩に減額するなど以ての外であります」

「はい」

「後日の誤解を避くるため、更めて言明して置きます。割地は遼東、臺灣共に割讓する要求を絶対に讓歩することは出来ません。旅館に歸られたら、伊藤がさういつたと、父君にお傳へ下さい。貴方は現在日清兩國の形勢如何を更によく考慮

せられたい。日本は戦勝者である。清國は戦敗者である。今回媾和談判開始の事も、もと／＼貴國の請ひに依つて、我方でこれを承諾したのである。然るに今回の談判もし不幸にして成立せざる饒には、一令の下に我が七十艘の運送船は増遣軍を満載して出動する手筈になつて居る。萬一左様のことになれば、北京の安危は爰に説明するまでもござらん。いや、そればかりでない。談判不成立となれば、貴殿等御父子一旦日本の地を退去せられた後、再び北京城門を無事に通過し得らるゝや否やも測り難い。荏苒として時日を消費してゐる場合にはありません。たゞ諾否の確答をなされぬ以上、最早面談無益ですッ」

伊藤は終に勵聲一番した。

それを聽いて、李經方も、さつと色を青くした。そして心に思つた。(これでは、領土割讓拒否と償金減額との二條件を、父との面談に譲り、確答を遷延しようと思つたことも無効であるか)

さればとて、この最も重要な條項を、今經方の一存で即答するわけにはいか

ない。彼はつとめて辭を卑くしていつた。

「閣下の御言葉悉く拜承いたしました。一應歸館の上、尙ほ乃父と協議いたしました上兎も角も御返答を申し上げます。しかし、その答案が萬一閣下の御意に満たず、その爲に御怒りを招き、談判不調ともなりますれば、折角相互の盡力も九俣の功を一簣に虧くことになりましますゆゑ、左様なことのなきやう、日本全權大臣に於て萬事御寛裕の御配慮を願ひまする」

かういひ置いて、李經方は悄然として辭し去つた。

朝鮮海峽を渡つて黄海の方から吹いて來る風が、冷く經芳の顔に當つた。

先程から別室にゐて待つてゐた陸奥廣吉は、李經方の歸つたのと入れちがひに伊藤に會つて、父宗光の言葉を傳へることもに携へて來た西駐露公使からの電文の淨書を示した。

伊藤はそれを受取つて、すら／＼と默讀してゐたが、讀み了ると、

「うん、これだ。……煮ても焼いても食へない、あの狸爺の李鴻章の奴、裏面で

どんな工作をしてゐるか分らん」

傍にゐた井上外務書記官が、

「以夷征夷が慣用手段だからどうも始末が悪い。先月の初、獨乙公使が林外務次官の前で讀んだ口上書にもいつてゐましたとほり向ふが列強の干渉を請求すれば、その干渉の代價が高價なるほど従つて此方の得る所は少くなるわけですから」

「獨乙は日本が大陸に領土割譲を要求すれば、必ず露佛の干渉を招くに疑ひないといふのだが、朝鮮の獨立を全うするには、どうしても遼東半島は取らんければならん。單にそればかりではない。日本人の鮮血を以て割取した土地を領有することが出来ぬとあつては、日本國民は決して黙つてゐない」

伊藤は昂然としていつた。そして陸奥書記官を顧みて、

「どうだね、病氣は？」

「三十九度を下りませんので」

「やつぱり。……そいつはいかんね。……」

暫く沈黙をつゞけてゐた後、

「歸つたらさういつてくれ、伊藤も全力を擧げて急いでゐるから、そちらはあんまり精神を過勞せんやうになさいと」

「有難うございます」

### 三

李經方は旅館の引接寺に戻つて來た。

長椅子に横たはつてゐた父の鴻章はそれを見て靜かに起き直つた。

伊藤全權よりは二十年近くも年長の七十五の老體である。右頬に受けた彈痕も漸く癒えて縋帶も除き、わづかに銅貨ほどの膏藥が貼られてゐるだけであつた。

戰敗國の全權大使としての立場の苦しいと同様にその形容も傷々しかつた。

經方は傍の椅子に腰を下ろしつゝ、

「伊藤は極めて驕傲であります」



「どう驕傲か？」

「割地と賠償金の重要提案は、頑として譲歩する気色も見えません」

「面談の餘裕をも與へぬといふか」

「そのとほりであります。……但し賠償金額三億兩を二億兩に輕減することは、譲歩すると申して居ります」

李鴻章は、微かに面を綻ばせて、「償金を三分の一輕減するなら、割地も多少譲歩の望みはある。……露西亞政府の意志は未だか？ いづれに向つても發動せぬかな」

萬一の僥倖を期するものゝ如く口に洩らしてあとは沈思してゐた。

その頃北京政府とペテルスブルグ政府との間では種々の交渉が行はれてゐた。北京の要路では、その成り行きを鶴首して待つてゐるのであつた。李全權もそのとほりであつた。

それから一日間を置いて、四月十三日李鴻章は、病牀を扶けて、伊藤全權と、

春帆樓上に會談した。

媾和條約協商の前提として、先づ休戰條約を協議すること三回目の當日に遭難したので、使命の眼目である媾和談判で相見えるのは、これが初めであつた。

李全權は、携帶した自分の方の再度改修案を提出した。が、伊藤は、

「先日御令息に向つても申しましたとほり、すでに我方の最後の譲歩をいたした以上、もはや諾否の御決答を承はる外はありません」

と儼としていひ放つた。

しかし、李鴻章は落着いたもので、

「それは何故に。諾否の決答をいたす前に暫らく相互の辯論を何故にお許し下されませぬ？」

かう反詰した。

伊藤は温顔ながら、言辭は飽まで冷然として、

「幾度貴説を承はるも、當方の決定を寸毫も翻へすわけにはまゐりません。既に

辯論の時期ではありません」

李鴻章は、それにも屈せず、執拗に賠償金額をもつと軽減して欲しい。

又盛京省の割譲地域から營口を除いてもらひたい。營口は税収入の多い港市であるから、それを日本に取られては、倍々清國の財政は困難する。従つて賠償金を支拂ふに差支へる。

臺灣は、日本軍が、いまだ完全に之を攻略してゐない。略取しない土地を割譲せよといふは日本の非理ではないか。

三段に分つて陳辯した。

伊藤は一々それを反駁した後、

「遼東の地域は、最初の日本案に較べて更に縮少してあります。此の上削減の致し様はありません。臺灣は、日本がまだ攻略せぬといはれるが、割地の要求は、攻略と否とには關はりません。唯戦勝者の便宜如何によるのみである。その一例を申すならば、山東省の一部は、日本軍が現在既に占領してゐる。然るにその地

を割譲せられよとは申して居らぬ」

伊藤に、きつぱりといはれて、李鴻章も微かに面を動かした。伊藤は、語をつゞけた。

「いや、そのみではない。清國は、先年吉林黒龍江の一地方を露西亞に割譲せられたではないか。あれは露國が攻略した土地ではありませんまい。日本が臺灣を要求するのは戦勝國として當然の要求であります」

李鴻章はそれには黙つて答へなかつた。

「幾度繰返へすも同じことである。三日以内に唯諾否の御決答を待つばかりです」その三日間に、清國側は、本國政府と頻に電文を交換してゐたが、決答の如何によつては日本軍の北京進撃は正に間髪を容れぬ形勢となつてゐるのである。

清國全權はその後尙ほ二三回の會談を重ねた後終に萬策盡きて、日本のいふままに全部日本の要求を應諾する外はなかつた。



國民歡呼の凱歌は津々浦々にまで響き渡つた。

今、世界の注意の焦點となつてゐる下關の地には、政府の要人はいふまでもない。在朝在野の有志政治家舉つて今次談判の成行如何と此處に殺到してゐるのであつた。それ等の要人、政治家は媾和遂に成るの報を聞くと、寸刻を争うて忽ち伊藤の梅の坊の旅館に驅付けた。

春帆樓から意氣揚々として引揚げて來た伊藤は先づ給仕に命じシャンペンを抜かしめ、祝杯を舉げてゐた。側近には書記官長の伊東巳代治、愛婚の末松謙澄、義姪の井上勝之助などがゐた。

毎時議會で、藩閥政府の中心人物、獨裁政治の親玉として伊藤を攻撃してゐた在野黨の代議士河野廣中、林有造、中島信行、竹内綱なども後から後から集つて來た。

公式の調印は明後十七日であるが、漸く月餘の重荷をおろした伊藤は、今日は今までと打つて變つて大變な上機嫌である。

不斷は、殆ど傍にも近づけなかつた其等の在野政治家をも、木戸御免といった形で開放的に座に通した。

そして下院の議長である中島信行に向つて先づ言葉を掛けた。

「おう、中島君。諸君の援助に依つて漸く談判も成果を收めたぞ。安心してくれ」  
伊藤は、機嫌の好い時、好んで青年時代の昔を忘れず老書生の口吻を屢用ひた。中島は會釋して、

「大變な御成功です」

「うむ！」

竹内綱が、

「對手が對手ですから、一層のお骨折りでした」

「うむ、何とか斯とか文句を附けて、返事を曖昧にしようとする」

今度は林有造の方に眼を向けて、

「林、東京に歸つて板垣に會つたら、さういつてくれ。もう餘り議會で伊藤を虐

めぬやうにしてくれ。はッはッ」

それを聞いて一同はどつと爆笑した。

竹内綱が重ねてかういつた。

「露西亞はよく黙つてゐますね？」

綱は夙に板垣の懐刀として智略に富んだ人物であつた。

伊藤は酒杯を手にしたまゝ、

「うむ、……露清の間で何か策謀してゐるらしい。それで陸奥も吾が輩も締結を急いだのだ」

愛婿の末松謙澄は、茫乎とした調子でいつた。

「兎に角歴史的の成功です」

「さうです。太閤さへ成し遂げなかつた偉業です」

始終沈黙してゐた河野廣中が莊重なる口調で、始めて口を開いた。しかしその語調には少しの諛辭うぶじも響かなかつた。

伊藤はそれを聞いて、やゝ暫く黙つてゐたが、やがて、ぐつと一息に酒盃を傾け盡して、斯ういつた。

「うむ、太閤は君、古來日本の産んだ第一の英雄となつてゐるが、彼奴も好漢には違ひない。だが無學だ。彼奴にもつと學問があつたら、或は伊藤に企及するかも知れん。或は俺を凌駕したかも知れん」

さういつた時伊藤の面色は極めて眞面目であつた。

×

×

×

伊藤は、自分が青年時代に夢想して作つた詩が、今、まぎくと實現したこと  
を、不思議に思つてゐるのもあつた。

豪氣堂々横大空 日東誰使帝國隆

高樓傾盡三杯酒 天下英雄在眼中

## 五

病床に在る陸奥には、なるべく神経を昂奮させまいとする心づかひから、伊藤對李鴻章の膝詰め談判に入つてからは、イエス・オワ・ノウの唯一言を聴くまでは、委しいことは、あまり耳に入れなかつた。

四月十五日の午後、李が到頭我を折つて、此方の最後の提案に悉く承服して、實質上の談判はつひに成立した。そして公式の調印は明後十七日と決定した。

中田秘書官と陸奥書記官は、足の運びも軽く陸奥の旅館に急いで歸つて來た。病床では、いつもさうであるどほりに、今日の談判の進行如何とばかり待つてゐた。

二人は病床の近くに進み、

「只今、漸く調印を承諾いたしました」

中田が面を和げて報告すると、陸奥は黒い大きな眼を輝かして、そちらを、じろりと見て、

「最後の讓歩のどほり承服したか」

「左様でございます」

「さうか。……總理も御苦勞だったな」

陸奥書記官が側から、微笑しながら、

「對手が對手ですから。何しろ、一分を争へば一分の利益ありといふ主義で向うは値切らうとしてゐるのです」

「うゝ、まるで此方を夜店の商人扱ひにしてゐる」

陸奥もめづらしく病顔に微かな笑みを浮べた。そして語を次ぎ、

「明後日の調印には是非自分も出席したいと思ふが、もし出られなかつたら中田、君に代つて署名を記してもらはう」

さういつてゐたが、その晩から三十九度の熱も少しづつ下つて、十七日には殆ど平熱に復したので、陸奥全權も病を押して春帆樓の公會場に出席した。

公式の調印は、單に、それ／＼署名捺印して相互の文書を交換するだけであつたから午前中、短時間にして、さしにも揉みにもんだ日清媾和條約案も結成せら

れることになつた。

その條約案の眼目とする所は、左のとほりである。

- 一、朝鮮の獨立を確認すること。
  - 二、遼東半島及臺灣、澎湖列島を割讓すること。
  - 三、軍費として銀二億兩を賠償すること。
  - 四、通商上の權利を進張することを承認すること。
  - 五、割讓地住民の國籍離脱の自由及不動産に關すること。
  - 六、償金支拂の擔保として奉天、威海衛の一時占領の事。
  - 七、俘虜交換のこと。
- その媾和條約文の末條には、次の如くある。

第十一條

本約は大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下に於て批准せらるべく、而して右批准は芝罘チイフーに於て明治二十八年五月八日即光緒二十一年四月十四日に交換せらる可

し。

右證據として兩帝國全權大臣は、茲に記名調印するものなり。明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日下關に於て二通を作る。

大日本帝國全權辦理大臣

内閣總理大臣 伊藤博文

大日本帝國全權辦理大臣

外務大臣 陸奥宗光

大清帝國欽差頭等全權大臣

太子太傅文華殿大學士 李鴻章

北洋大臣直隸總督一等 毅伯

大清帝國欽差全權大臣 李經芳

二品頂戴前出使大臣

條約文は日本文と漢文とのほかに英譯文を作製して、後日條約文の解釋を異にしたる時は、英譯文に依て裁決することとした。

一日も早く歸國を急いでゐた李父子一行は、その日の午後直ちに下關を出帆して歸還の途に就いた。

我が方では、七十五歳の老軀を提して國難の爲に遠く使ひした、此の老政治家の苦境には深く同情するとともに、一旦和議を結んだ以上は、恩讐の念も解消したので、どこまでも紳士的禮遇により日本郵船會社の商船讚岐丸を以て天津まで送らすことにした。

伊藤全權は伊東書記官長、鮫島秘書官などを従へて、波止場まで、これを見送り、互に堅い握手を交換した。海峽の春の波は穩かに讚岐丸を浮べて霞の中へ去つた。

## 六

その翌日十八日、伊藤、陸奥の兩全權が下關を引揚げて大本營の所在地廣島に歸るといふので海岸通りはいふまでもなく市街の賑ひは大變であつた。

家々の軒には國旗が掲げられ、それと同じ日の丸の提燈がつるされ、到る處、街の要所々々には緑門アイトナが飾られて、その額には、國運伸張とか、送兩全權とか、國威輝四海といった文字が、早くも其地方産出の柑橘の果物などによつて美しく黄金色に綴られてゐた。

人々は、春光の暖かさとともに、家の内に靜としてゐる者はなかつた。

そして顔さへ見れば、知ると知らぬを問はず歡喜の昂奮で言葉を掛け合ひ、萬歳を唱へ、島國日本が一躍して大陸に領土を有する大國に發展したことを祝した。

「豊太閤さへ失敗したことを、三百年の後、たうとうやり遂げましたな」

「いや、これから日本は、まだくやりますよ」

さういつて語る人々の眼には、感極つて涙があつた。

「遼東半島と臺灣の島一つくらゐ。全權もあんまり遠慮が過ぎますよ。北京まで乗取らなくつては」

「さうですとも。旅順では、我が軍の主力がそれを待ち構へてゐるんでせう」



「まあ、しかし、さう一度にやらなくても。これから先は長い。ぼつ／＼東洋に  
樂土を築くんですなあ。はッは／＼／＼／＼」

「は／＼／＼／＼」

一同は、どつと爆笑した。

海岸通り阿彌陀寺の波止場には、國旗を交叉した大緑門イナの周圍に、禮装を調べた町の人々で一杯であつた。

兩全權は、此處から乗船して宇品に向ふのだ。

關門海峡は春霞を罩めて遠く煙り、長閑な波の上には、これから全權一行の乗らうとする八重山艦が、靜かに煙を吐いて待つてゐる。

伊藤全權は護衛の警部等に取巻かれ、知事、警察部長、町長の案内で、眞先に棧橋を進んでいった。

「伊藤全權萬歲!!」

「日本帝國萬歲!!」

どいふ聲が海の上に響き渡つた。

後に従ふ者には伊東書記官長、鮫島秘書官、女婿の末松謙澄など。

少しおくれて陸奥全權は、病軀を看護婦に扶けられながら、側には陸奥外務書記官、同井上勝之助、中田秘書官が従つてゐる。

その後から自由黨の代議士河野廣中、中島信行、林有造、岡崎邦輔、三崎龜之助なども便乗して行くことになつてゐる。

耳を聳するばかりの萬歳の聲々に送られて、陸奥全權が徐ろに棧橋を踏んで短艇の乗り口まで進んでゆくと、突然それが急傾斜をして、病餘の陸奥は、すぶりと腰から下を海に墜落した。

棧橋といつても、小舟を並べて、その上に一間半四方ばかりの板を載せて急造した浮棧橋であつたところへ、あまりに一度に多勢が乗つたものだから、小舟が揺ぐよついたのである。

人々は吃驚した。

すぐ側に附いてゐた松下護衛警部が、今少しで水の中に倒れようとするところを、陸奥全權の瘦軀を肩先を捉んで扶け揚げた。

それと同時に、屬官が二人で携へてゐた、媾和條約に關係する大事な文書の入つてゐる柳行李を、急傾斜の弾みをくつて、水の上に取り落してしまつた。

幸に波が穏かであつたので、短艇の水兵などが手傳つて、行李は無事に拾ひ上げたが、もう、すっかり濡れてしまつてゐた。

大騒ぎである。

皆で抱き上げるやうにして、陸奥全權を、ともかく急いで短艇に乗込ませた。

中田秘書官と陸奥書記官は屬官を指圖して水浸しになつた柳行李の繩を解き、蓋を取つてみると、中にある重要文書が大部分濡れてゐる。

困つたことは、此方から向うに交附した文書の紙質は強靱なる上等の美濃紙であるに反し、向うから受取つた文書の紙質は上等の品であつても、紙質が脆いので、少し手荒く觸ると、すぐ破れさうである。

その場で乾かすことも、どうすることも出来ぬので、たゞ静つと水を切つたまゝ艦に持込んだ。

短艇は、それ等の騒ぎを載せたまま本艦に向つて波を蹴つた。

八重山艦の上甲板には、暖い春光が一杯漲つてゐた。その一室に陸奥全權を抱へ込んだ。ズボンは全部水に濡れてゐる。

一面豪放なやうで、その實細心な伊藤全權は此の珍事に、ひどく心配して、早速側に寄つて来て、

「洋服の着替へはあるか」

と側にゐる者に訊ねた。

・伴の廣吉が、

「それは一着用意があります」

「さうか、早く着更へさせるがいい」

といつて、伊藤全權は、自分も一所に側の者に手を貸して、着替へさせた。

「靴が濡れたらう」

伊藤全權は次いで訊ねた。

恰どそこに來た中田秘書官が、

「左様、靴は此方には御用意なかつたやうですね？」

陸奥書記官と侍女の方を見ながら答へた。

「さうか、我が輩のの一つある。誰れかいつて持つて來るんだ……靴下を早く脱がせない」と

伊藤全權は、側で唯見てゐられなかつた。自分で、腰をこゝめて陸奥の濡れた靴下を脱がさうとした。

「あッ恐れ入ります御前さま」

侍女と看護婦とが同時にいつて、いそいで伊藤全權のその手をさうつと押し退けるやうにした。

陸奥全權は、看護婦に新しい靴下を穿かしてもらひながら、伊藤全權に、

「いや、有難う。もういゝゝ〜」  
と禮をいひ、

「それより書類を濡らしたのは、どうしてゐるか」

「あちらで皆で陽に乾かしてゐる」

重要文書は、べつとり濡れてゐた。それを向うの甲板の上で、總掛りで殆ど一枚づつ繰り披いて陽に干してゐた。

海の上は静かなやうでも風があるので、うっかり手を放されなかつた。

艦は春霞を穿つて、静かな海上を滑るやうに進んだ。

人々は、満一ヶ月を費して折衝した双肩の重荷を、ほつとした氣持で、水浸しになつた文書を乾かす手を休めて内海の春色を眺望した。

壇浦に行く時は、日清の戦から、遠い七百年の昔に話に移つていつたりした。

と思ふと、伊藤全權を取巻いて、下關の外國軍艦砲撃の事に變つたりした。

巖島を左舷に眺めて、艦が宇品に着いたのは、長い春の日が西の方の島山の上

に傾きかける時分であつた。

そこから、宮内省から差向けられた馬車で廣島に入り、兩全權は一旦旅館に歸つて、着衣を更めた上直ちに行在所に參内して、連日の媾和談判の次第と條約調印の結果を具さに言上した。

皇上は深く御満足に思召され、兩全權に對して優渥なる勅語を賜はつた。

そして仲一日を置いて、四月二十日媾和條約及び別約は 天皇陛下の御批准を経た。

## 七

東京では、八重櫻が満開してゐた。

廣島の行在所に於て、媾和條約に御批准を了らせられた丁度その日であつた。東京駐劄の獨逸公使が午後我が外務省を訪問して、留守を預る林(董)外務次官に面會を求めた。

次官は會見室に通して面會すると、同公使は、

「今日、本國政府から、極めて重要な訓電を受取りましたので、御面談をねがつたのでありますが、その事について、明日某々二國の公使と同道、重ねて來訪いたします。外務大臣か又は總理大臣に御面談いたしたいと存じます」

林次官は、心の中で、(さては)と思つたが、

「いかなる御用件かは存じませんが、兩大臣とも目下東京には居りません。ことに本省の大臣は、病氣のことですから、御用件は私代つて承つて置きませう」

「さうですか。それでは明日、他の公使と同道來訪いたします」

林次官は、他の二人の公使とは何國の公使であるかと思當がついてゐたので、黙つて置かうとも思つたが、それを明かにせぬところに、既に我方を侮辱してゐるところがあるので、軽く訊うてみた。

「他の二國の公使とは何方の？」

すると獨逸公使は、一寸いひ濼んで、

「それは只今都合があつて申されません」

「あゝさうですか」

次官は、それ以上強ひて聽かうとしなかつた。

その翌日、獨逸公使は、事務官を使ひに寄越して、今日來訪するお約束をして置きましたが、一寸支障があつてまゐりかねます。明日はお訪ねいたしますと、傳へて來た。

向うが勝手に來るのだ。どうでもよいと放つて置くと、その翌日になつても來なかつた。そして二日置いて二十三日の午後たうとう露西亞と佛蘭西の公使を帶同してやつて來た。

林次官は、心の中で、(さては愈やつて來たな)と思つた。黙つて向うのいひ出すことを待つてゐると、露國公使ヒトロプオーは、最初に口を切り、巧みな外交的辭令を以て、

「本國政府からの訓令でございますが、今度日本と清國との媾和條約を見まする

に、中に、遼東半島割讓の一條がございます。それについて露國政府は、貴國政府に向つて御忠告を申し上げたいと存じます……」

口頭でかういつて、内隱ポツトから次のとほりの覺書を取り出して、林次官に手交した。それには、

「露國皇帝陛下の政府は、日本國より清國に向つて要求したる媾和條件を査閱するに、遼東半島を日本にて領有することは、啻に清國首府を危うするの恐あるのみならず、是と同時に朝鮮國の獨立を有名無實と爲すものにして、右は將來極東永久の平和に對し障害を與ふるものと認む。因て露國政府は、日本皇帝陛下の政府に向ひて、重ねて其の誠實なる友誼を表せんが爲め、茲に日本國政府に勸告するに、遼東半島を確然領有することを放棄すべきことを以てすと、佛文で書いてあつた。」

次いで佛蘭西公使と獨逸公使も、大體同様のことを口頭でいつて、覺書を手交した。

林次官は、かねて、こんなことがあるべしと豫期してゐたことなので、いとも落着いた態度で、彼等のいふことを一と通り聽きをはり、覺書を受取り、さて、「貴國各政府の御忠告は、有難く承はりました。ついでには御返事は、いづれ後日改めて當方より申し上げます」

三國公使は間もなく辭し去つた。

次官は、早速翻譯官をして、邦文に譯さしめ、それを直ちに、廣島に居る伊藤總理大臣と、播州舞子に養痾中の陸奥外務大臣とに打電して、何分の指揮を請うた。

これより先、天皇陛下は、四月二十日媾和條約の御批准が了ると、近日京都に行幸あるべき旨仰出され、廣島に滞在してゐた閣僚中には、御先發として罷に入洛してゐる者もあつた。

陸奥は舞子に休養してゐながらも、心に懸るのは、今度の媾和條約によつて、

日本が清國から大陸の一部を割讓せしめたことについて、歐洲の列強——露、獨あたりから、何か異存をいつて來るに相違ないと思つてゐた。

ことに先月あたりから、頻々として、駐露西公使と駐獨青木（周藏）公使からの情報電報に依ると、露國は、日本が大陸に寸土尺壤たりとも、これを領有することを絶対に喜ばないことは、十日ばかり前の同公使の電文によつても明かである。

今日までは、日本の清國に對する要求が何の程度のものであるか、實質的に分つてゐなかつたから、彼等の方でも、何と故障を言ひ出す根據もなかつた。しかし要求條件が公然世界周知の事となつた今は、彼等は、茲に始めて故障を言ひ出す機會を得た。

特に露西亞は、昨年（二十七年）日本陸軍が、平壤と黃海の戰爭で大捷を博して以來、開戦當初の豫期に反し、日本軍の連戦連勝と見るや、極東の事態容易ならざるを察し、彼は、其以來續々軍艦を東洋に集合し、今や強大なる海軍力を日

本、支那の沿海に游弋せしめて、日本を威嚇してゐるのである。

流言蜚語は縦横に飛んだ。露西亞はウラヂオストックその他黄海沿岸に碇泊してゐる艦隊に對して、發令後二十四時間以内に何時にても出動し得べき準備を命じた。

四月十一日の露都發電の西公使の情報によるも、同國陸海軍協同委員會では、もし必要の場合、日本軍が北京に進撃するを防ぐには、これを陸上に防止することは、困難であるが、佛國艦隊と聯合すれば、海上に防ぐことを得るといつたところである。

露西亞が極東沿岸に、不凍港を得んと欲してゐることは多年の望みである。

いや、それに止まらない。露國の眞意は、行々滿洲の東北部から南方遼東灣沿岸までも、その勢力圏内に收めんとする野望は、口にこそ明言しないが、夙に言外に看取されてゐることである。

陸奥は、まだ媾和期に入らぬ前、外務省で露國公使ヒトロプオーと面談した時、

「露國は、太平洋沿岸に不凍港を得たいと思つてゐます」

とうつかり口を滑らした。太平洋沿岸とは、察するに朝鮮沿岸のいづれかの一地點であるに相違ない。

(露西亞に、朝鮮沿岸にまで猿臂を伸ばされては堪るものではない)

と、その時陸奥は思つた。

日本の要求條件は、今や世界に隠れない事實となつた。歐洲列強は、これを知つて決して黙つてゐないであらう。必ず強壓的な干渉が來るに相違ない。

その場合になつて、日本は如何に對處すべきか。……日本は自から是なりと信じて、行はんと欲する所を行つたのだ。

日本は最早騎虎の勢、如何なる危険を冒すも、今日の位置を確保し、一步も譲らざる決心を示すの外他策あるべからず。總理大臣の御意見は如何。腹藏なく示し置かれたいといふ旨の電報を廣島に向つて發した。するとその日すぐ後、林次

官の請電が来た。

中田秘書官が讀み了るのを疑乎と聽いてゐた陸奥は、黙つてたゞ肯づいた。稍暫くして、

「覺悟の上の事だ。……それでも談判進行中に、苦情を持ち込まなかつたのが、此方の仕合せだ」

陸奥は、中田はじめ皆なの者を退けて、唯一人腕を組んで沈思をつゞけてゐた。

翌二十四日伊藤總理から電報が来た。

三國干涉の件につき本日御前會議が開かるゝ。貴大臣の意見詳細承はりたしといふ意味のものである。

陸奥は、それに對して直ちに前電と同じ意味の返電を打つた。

## 八

英國の皇太子（後のエドワード七世）と、獨逸のウキルヘルム二世（今の廢帝）と、露西亞の新帝ニコラスとは、互に従兄弟であつたり、叔父と甥との血續關係があつた。

それであるが爲に却つてさうなのか、相互に國運の隆替について、甚だしく嫉妬深かつた。

日本では日清戰爭正にたけなは關なる明治二十八年の二月であつた。露帝アレキサンダー第三世が崩御したので、世界の各國から元首又はその代理が葬儀に參列した。中にも英國皇室では露國皇室との親密を重んじて、ビクトリア女皇陛下の代理として、皇太子親しく參列した。

この皇太子は、賭事が殊にお道樂なところから、平常種々な噂もあつたが、なか／＼外交家であつた。

皇太子といつても、既に六十以上の高齢であつた。それは、御母君のビクトリア女皇陛下が稀れに長壽を保たれて、従つてその御治世は六十年の長きに渡つた



から、皇太子は、お孫さん（後のエドワード八世）がお生まれになつても、まだ御部屋住みの御境遇でゐらせられたのだ。

殿下は、御親戚の御間柄でもあり、露皇室の國賓として、ペテルブルグには、殊のほか長く御逗留になり、其間には、露の新帝ニコラス陛下とは屢々御懇話を交換された。

此の兩帝國の間に、前年來長く親密な國交上に妨げとなつてゐたことがあつた。それには印度の北方露英國境に在るバミール高原の問題であつた。

それを、英國皇太子殿下は露京滞在中ニコラス新帝と談笑の間に圓滿に解決して、條約を締結した。

獨逸のウキルヘム二世陛下は、年齢は丁度英露兩國の從兄弟達の中間處であつた。これは、後に歐洲大戰の立役者であつたから、非常な野心家であつたことは、いふまでもなく、又非常な國際的嫉妬家であつた。

多年印度の國境で争つてゐた英國と露國とが、先帝の崩御を一轉機として、親

睦を新にしたのは、不愉快で堪らない。

ウキルヘルムは思案した。

（エドワードとニコラスとを、どうしたら、彼等の仲を冷たくすることが出来るだらう？）

そればかりでない。露は佛と非常に仲が好い。これに反して自分の國と佛蘭西とは昔から不倶戴天の仇敵である。ニコラスはわが仇敵の佛蘭西共和國と常に親密に手を握り合つて、攻守同盟を結んでゐる上に、今又ビクトリア叔母の英國とも仲を好くし居つた。

（朕の獨逸はどうすればいゝのか）

憎い仇敵の佛蘭西を、どうしたら露西亞との情交を割いて孤立の地位に陥れることが出来るだらう。

いつそ自分もニコラスと握手して、佛蘭西を袖にしてやりたい。

ウキルヘルムは、いろ／＼と考へてみた。そして、最後に、

「あ、さうだった」

と、ばたりと膝を叩いた。自分ながら、好い處に思ひついたものだど、獨りで微笑を洩らした。

露西亞は今、日本が、朝鮮の獨立を、支那に對して要求しながら、却つて自分でそれを危うしてゐるのみならず、大陸に領土を所有せんとしてゐることを、甚だしく氣に疾んでゐる。露國が朝鮮、滿洲を領有せんとする野心は睽もよく知つてゐる。

今でさへ廣大な領土を有するニコラスが、これよりまだ大きくなるのは、心憎いが、佛蘭西と常に親密であることは、一層不快である。それで佛蘭西とニコラスの仲を割くには今此際ニコラスを扶けて、日本の欲望を抑へるに如はない。したら、ニコラスも佛蘭西とばかり仲好くはしないだらう。

待て、それについても、種々工作が必要だ。迂濶にニコラスを支援して、彼奴が、餘り強大になり過ぎては策の得たものではない。

總身狡智に長けたウキルヘルムは、先づ別方面から手を廻はした。

露佛同盟に對立して歐羅巴を二分してゐる三國同盟の奧太利と伊太利、この二人の仲間を獨帝は誘うてみた。

羅馬駐在のビユウロウに命じて伊太利の外務大臣に向ひ、

「どうです。三國同盟の好み、一所に露西亞を支援して、思ふまゝに、今日日本の擡げかけてゐる頭をうんと抑へてやつては？」

伊太利の外務大臣は答へた。

「それは、折角の御相談ですが、三國同盟は、歐羅巴だけのこと。我が伊太利の如き微力の身では極東にまで御助力致す餘裕はございません。自國のことだけ守るのが精々ですから、どうぞ悪しからず」

それを聽いて、ビユウロウは、押して、ぜひ、さうしようとはいはなかつた。

そればかりではない。ビユウロウは、そこで、一寸聲を低くし、伊太利の外務大臣に向ひ、

「實はね、貴下もさう仰有るだらうと思つてゐました。それで宜しい。私の國で今、ニコラス陛下の後押しをして、極東の處置を存分におさせ申しても、餘りに増長なさつてもいけませんですからね。はッはッ」

ビュウロウは、かう囁いて、意味ありげに笑つた。

伊太利の外務大臣は、それを聽いて、心の中で、何處まで油斷のならぬウキルヘルムであらうと、悚然とした。

そして、ニコラス新帝が、これを聞いたら、何と思はれるであらうと思つた。

獨逸皇帝の心には、かうして、露國と堅い握手をして、日本を抑へる助力を與へ、佛蘭西ばかりと情交せず、獨逸をも頼母しいと思はしめて置きながらも、も一つその心の底の底では、伊太利が自分の方の誘引を謝絶して、却つて、出来ることなら、英と米と伊と三國が聯合して日本を援け、露西亞と、自分と、佛蘭西との極東干渉に對抗して露國の飽くなき欲望を掣肘してくれ、ばい、と思つた。何故といふに、ウキルヘルムは、露と佛との歐羅巴での情交を割きたいために

握手を與へたが、ニコラスの國が極東で餘りに勢威ほしさまを縦たまにして強大になることは不快で堪らないのであつたから。

×  
今まで心の知れなかつたウキルヘルムが、熱い握手を差伸べて、

「ニコラス君よ。歐洲の事は氣づかひない。君をして後顧の憂ひは、斷じて喉がさせない。君は安んじて極東に手を伸ばし、日本を抑へ、朝鮮でも南滿洲へでも勝手に進出するがいののだ」

かう深切にいつてくれた。

自分の方で占有したいと思つてゐる朝鮮半島や遼東半島を、小國の癖に生意氣な日本が自分より一と足先に勝手にしようとしてゐる。今までそれを氣を揉みながらも、歐洲だけの同盟國に過ぎない佛蘭西一人を頼りには心細いので、決斷のつかなくつたところへ、ウキルヘルムが頼母しくいつてくれるので、茲にいよいよ最後の決心をして日本干渉に立ち上つた。

それでもまだぐづぐづしてゐるのを見て、ウキルヘルムの在東京の公使は先きに立つて、日本の外務省へ押掛けて来て、意味深長なことをいひ置いて去つたのであつた。

それが四月二十日のことであつたのは、前にいつたとほりである。

## 九

伊藤總理大臣は、舞子の陸奥から、歐洲列強の干渉が来た場合に處する此方の態度を確然決定して置かなければならぬといふ警電を受取つて間もなく、東京の留守を預る林外務次官から、果して三國から異議を申込んだといふ電報を受取つた。

伊藤も陸奥も考へてゐたことは大體同じであつた。

「さては、いよ／＼やつて来たな！」

頭の中は、複雑な智慮が梭の如く往來した。

先づ傍にあつたマニラの葉巻を取つて、新しく火を點じた。高い薫が紫の煙とともに座敷の中に漾うた。

葉巻が口邊を離れると、黄金色を湛へたブランデーのカップがそれに代つた。

大型の緞子の座蒲團の上に、どつかり大跣坐をかいて、暫く沈思してゐるかと思ふと、次には立ち上つて、日本室に洋風を裝備した安樂椅子に寄つて深々と腰を下ろした。

座邊には鮫島秘書官もゐない。誰も居ない。たゞブランデーの瓶とマニラの函があるだけである。

淡紫の煙は高貴な香とともに顔から頭のまはりに渦を巻いてゐるのである。かうして伊藤は一時間ばかりの間獨りである。

やがて、微かにうなづいて、紫檀の卓の上に載せてあつた硯箱から筆を取り、大きな巻紙を片手に、反古にするのが惜しいやうな繪畫的の達筆で、すら／＼と覺書きをした。

時々筆を休めて考へながら四五尺の長さに一通り書きをはると、又初からそれを慎重に訂正していった。

それが済むと、小刀で巻紙を切り、三度目にもう一遍読み直して、それから紙を巻いた。

それからベルを鳴らして鮫島秘書官を呼んで、

「すぐ行在所に参内するから、馬車を」

伊藤総理は、それから馬車を驅つて、舊城内の淺野藩邸の一部を以て充てられた行在所に伺候し、皇上に拜謁して、審に三國干渉の事を言上し、併せてそれに對處すべき私案を上聞に入れた。

日本の歴史で天智天皇と藤原鎌足との關係以外に類例を見ない、此の君臣水魚の交りの間に、如何なる言葉が交換されたか、それは永久の秘密である。

伊藤は、二時間に垂んとする長時間御前にゐて、退下した。

翌日御前會議が開かれた。

御前會議といつても、廣島に留つてゐるのは、總理大臣の他に山縣陸軍大臣と西郷海軍大臣とだけであつた。

伊藤總理大臣からその席上提出した議案の要領は、

第一策 假令新に敵國増加の不幸に遭遇するも、此際斷然露、獨、佛の勸告を拒絶する乎。

第二策 茲に列國會議を招請し遼東半島の問題を該議會に於て處理する乎。

第三策 此際寧ろ第三國の勸告は、全く之を聽容し、清國に向つては、遼東半島を恩惠的に還附する乎。

此三策について、慎重に議が練られた。

第一策については、閣臣の意見は、遺憾ながら一致せざるを得なかつた。今、我が征清軍は、全國の精銳を盡して遼東半島に駐屯してゐるのである。艦隊の全部は南の海——澎湖島方面に派出して内國の陸海軍は殆ど空虚になつてゐる。

昨年來長日月の間戦闘を繼續してゐるので、船艦は固より兵員も軍需も共に既に疲勞と缺乏を告げてゐる。この上尙ほ三國聯合の海軍を敵に廻はして戦ふことの無謀であるばかりでなく、露國一國の艦隊と戦ふさへ勝利は覺束ない。此際暫く怨を呑んでも、三國との和親は保たねばならぬ。

第三策は、いかにも温順寛大であるが、餘りに意氣地がない。

最後に第二策、列國會議を開いて、問題を處理する。種々評議の末御前會議は、この第二策を採るに略々決定し、伊藤總理は、その夜直に廣島を立つて、二十五日の早曉舞子に陸奥を訪うた。

陸奥は、これに對して何と答へたか。

## +

障子の硝子を透して、朝風ぎの明石の浦をゆく白帆が見えてゐる。

陸奥は、十八日に下關から廣島に歸つて、媾和談判の結果を、伊藤總理と、も

に、御前に伏奏した上で、優渥なる恩命を賜はり、二十二日に此處に來着して靜養してゐるのであつた。

伊藤總理は、連日の繁忙と憂慮と、そして長時間の夜行列車の疲れも見せず、鮫島秘書官と二人の屬官を随へただけで、陸奥の處に到着した。

そして、直ちに陸奥の病床の脇に通じ、

「どうだ、身體の方は？」

「ありがたう。此方の身體は相變らずだが到頭やつて來たな」

「豫期してゐたことだ。別に驚きもせん。昨日御前會議の半ばに、丁度此方からの電報も見た」

「自分の考は、大體あのとほりだ。廣島の結論は、どういふことに定つた？」

「それについて、尙よく議を練りたいと思つて。京都の連中は、來るだらうな」

「廣島からの電報もいつてゐるし、此方からも知らしてあるから、もう、やつて

来るだらう」

さういつてゐる所へ、京都から松方大藏大臣と野村内務大臣とが來着した。

近日、陛下が京都まで御還幸になる。その御先發として、この二閣僚は既に京都に來てゐたのであつた。

伊藤總理大臣は、四大臣が揃つたところで、陸奥の病床を繞つて、昨日夕刻に至るまで協議を凝らした、廣島に於ける御前會議の結果を一通り話した。

陸奥の考へてゐる所は、御前會議の結論とは少しく異つてゐた。

陸奥は、此の間下關の棧橋で腰から下海水に浸つてから、また病勢が悪化して熱のさしひきが甚しくなつてゐた。それを推して病床に起き直り、肩で呼吸をしながらいつた。

「情勢は緊迫してゐる。此の際此方の出様如何によつては、國家の安危榮辱の上に重大なる結果を來すことになる。固より暴虎馮河の輕舉は慎まなければならん。然しだ、彼等が何と苦情をいひ出したにしても、單に外の事ばかりを考へて

も居れぬ。國內の情勢をも思はねばならん」

伊藤は肯いて、

「勿論の事だ」

陸奥は咳嗽の鎮まるを待つて、又語をつゞけた。

「改めていふまでもないが、昨年七月以來我が陸海軍が流血曝骨、百戰百勝の軍功を積み、政府も亦、御同様内に外に苦心慘憺たる經營を重ねて今日に至つた。其の結果は内外の好評を博してゐる。況んや、既に陛下の御批准も濟んでをる條約中の主要なる部分を一朝烏有に歸せしむるが如き讓歩をする時は、假ひ吾々當局者は、國家百年の長計の爲に、胸中萬斛の苦痛を忍び、更に將來の難局に當ることを避けないと覺悟するも、此の事が一度世間にばツと發表するとなると、陸軍でも海軍でも必ず騒ぎ出すに違ひない。又國民一般が、いかに失望落膽するかも明かだ」

伊藤總理は黙つて肯き、陸奥をして言ふ所までいはしめようとした。

「外から来た禍は、此方の出方によつて緩和することが出来る。しかし、内から發する變動は、どういふ方法を以て鎮靜することが出来るか」

陸奥は憂慮胸に溢るゝ語調を以ていつた。

伊藤もそれは同じことであつた。

「それが問題なのだ。昨日廣島でも御前で種々評議したのだ」  
尙ほ陸奥がいつた。

「それゆゑ此方は、現在の地步を維持し、一步も譲らない決心を以て、兎も角三國に對して一應勸告を拒絶する旨の返答を與へて其の結果彼等が、どういふ策動をするか、底意の深淺を探り、一方國內に於ける軍部の動靜と國民の意向とを觀察することにしては、どうか。批准交換の期日までは、まだ十二三日の餘裕があるから、その間に尙ほ出来るだけ外交上の策謀を講じて見ようぢやないか」

陸奥は、粘り強くいつた。

しかし伊藤の意見は、もう廣島の御前會議の時から確定してゐた。

「君の論は強硬だ。吾々も、さう行つてみたい。しかし危機は目前に切迫してゐるのだから、一旦拒絶した際、結果がどうなるかといふことを考へないで、唯勸告を拒絶することは少し無謀ではないか。露西亞の、去年以來の動靜から見ても、今更、底意の深淺を探るまでもない。本當にやる氣に相違ない。向うは此方が拒絶の態度に出るのを待つてゐる。敵に好い口實を與へるに異らない。危機は機微の間に在る。外交策を以て此の危機を轉回せしめようとしたところで、もう、その餘地はあるまいと思ふ」

先刻から始終沈黙を守つてゐた松方藏相と野村内相とは、此の時始めて、莊重な口を切つた。松方はいつた。

「外務大臣の説には、吾々も實はさうありたいのぢや、しかし、もう外交策を施す餘地はない」

野村もそれと同じことをいつた。

陸奥は慨然として暫時沈思してゐた後、



「諸君がその意見ならば、僕の説は撤回するに躊躇しない。しかし、總理のいふ第二策、列國會議を開くことは賛成出来ない。といふのは列國會議を開くとすれば、三國の外に、少くとも英と米、又は伊太利あたりを招請しなければならぬ。是等の國が果して列國會議に出席することを承諾するかどうかは甚だ疑はしい。假りに承諾したとしても、會議を開くまでには相當の時日を要する。批准交換の期日の五月八日までには到底むづかしいと見なければならぬ。さうして和戦未定の間にぐづぐづしてゐることは、徒らに時局を複雑ならしめるに過ぎない。加之一度び列國會議に訴へた結果は、問題は單に遼東半島に止まらず、列國銘々勝手な利害を主張して、遂に媾和條約全體を破壊するに至る恐れがある。畢竟此方から好んで新に歐洲列強の干渉を誘導することになる」

さういふと、總理をはじめ、他の二閣僚も、言葉を揃へて、

「それは全くそのとほりだ。すると、列國會議を止めるとすれば、どうするか」  
四人はそこになつて、暫く沈思に陥つた。

廣島の御前會議で、今日の場合新に歐洲の列強を敵にすることは國家百年の大計から得策でないこと決定した以上、三國干渉を強行するとすれば、他に策の施しやうもない。此の際彼等の勸告を全然承認するか、それとも亦た一部を承認するか、いづれかに決定しなければならぬ。

陸奥はいつた。

「今の場合、對敵は三國ばかりではない。清國との問題がまだ未定である。三國との交渉に日を費してゐる間に、對手が對手の事だから、此方の弱みに附け入つて、媾和條約の批准を放棄するやうなことをしないとも限らない」

陸奥がさういふと、伊藤も肯いて、

「さうだ。或は露西亞で、もう、入れ智恵をしてゐるに相違ない」

「もし、そんなことになる、下關係約を反古にしてしまふことになる。だから、どうあつても此の問題は極力全く別個のものにしなければならぬ。假ひ三國に對しては、全然向うのいひ分を撒さねばならぬにしても、清國に對しては、一

歩も譲らないといふ方針でいかなければならぬ」

それには伊藤總理も松方も野村も全く同じ意見であつた。

伊藤は野村を見ていつた。「それでは、早速これを陛下に申上げなければならぬに野村内務大臣は、その夜直ちに舞子を出發して、廣島の行在所に向つた。

しかし、これは、最後にいよくどうあつても、いけないといふ場合に三國の申出に對して應答することであつて、尙ほそれまでは、出来る限り百方手段を盡してみなければならぬといふことに、四相の意見は一決し、即日舞子から歐米の國々に駐在して居る公使に向つて訓電を飛ばした。

露國にゐる西へ。英國にゐる加藤へ。獨乙にゐる青木、米國の栗野、伊太利の高平へ。

## 十一

四月二十六日（明治二十八年）發、本國の舞子から訓電に接した加藤駐英公使

（高明）は、直ちにその翌日——二十七日英國外務省に外務大臣キンバレイ伯を往訪して、陸奥外務大臣の旨意を帶し、英國政府の意向を探つてみた。

陸奥外相からの内意によれば、今回露獨佛三國から、日本の大陸割讓について異議を申込んで來た、その對策として、三國の勸告を斟酌し、日本は半島の永久占有は、これを斷念するが、朝鮮の完全獨立を、是等各國に向つて確約することは勿論、その他に營口と遼東半島に於ける他の一港を自由港として、歐洲諸國の商利を進捗せしむることにしたい。但しこれは目下我が日本國內の情勢からいつて、非常なる大讓歩である。此の程度の讓合を以て三國の勸告に答へんとする内意であるが、英國は、此の日本の答案に對して、果して何程の援助を與へてくれるであらうか、それを慥めよといふ訓電である。

加藤公使は、キンバレイ伯に向つて、

「日本政府は、此の際少しも早く圓滿に時局を纏めたい意向で居ります。従つて出來うる限りの讓歩を致すつもりであります」

といつて、携帶した訓電の書取りを取り出して示した。

キンバレイは、それを受取つて一讀した後、公使の方を向いて、

「三國の勸告に對する答案の要旨を内示せられて有難うございます」

と、簡單に答へた。加藤は、更に語を次ぎ、

「此の際貴國の一舉一動は、大いに本案の終局如何に關することいふまでもないことです。先日御話になつた通り、貴國の極東に於ける商利は、他國と同日の論でないのですから、一日も速に東洋の平和を回復するために、もし貴國の御援助を請ふことが出来ますならば、獨り日本の幸のみならず、貴國の商利の爲にも好都合かと思ひます。貴國の御盡力によつて、三國をして、此の程度で納得するやうお取計ひねがひたいものです」

すると、キンバレイ伯は、飽くまで落着いた口調で、

「英國政府は、今度の事件については、一切不干渉といふことに決定して居ります。しかるにもし今、貴國政府の御意思を貫かんために斡旋の勞をとり、又は何

等かの御助力を與へることになれば、それは取りも直さず一種の干渉でありま  
す。英國政府が、かねて決定してゐる所の趣旨に反することになりますから、只  
今私一存で即答は申上げかねます。いづれローズベリ總理大臣とも協議の上で何  
分の御返事は致します」

と、一應の挨拶を述べた後、キンバレイ伯は、少しく打解けた語調になつて、  
「これは、私一己の見解でございますが、今拜見しました貴國の御答案にある讓  
歩は、關係政府で、多分承諾いたす希望はむつかしいと思ひます。従つて折角の  
御依頼ですが我が政府としても、効果的の御助力を申すことは覺束ないでせうと  
思ひます。いふまでもなく英國は幸に日本とは極めて親密なる間柄ですが、目下  
貴國と對立關係に在る三國とも亦、同様に親密なる交際をして居る間ですから、  
英國外交の方針を決定するには、ひとり極東の利害關係ばかりでなく、歐洲の事  
も考慮に入れて、諸般の關係を総合的に考へなければなりません。且又、苟くも  
我が國が手出しをする場合には、最後の決心もなく、徒らに試験的の仕事をする

ことは出来ません。一旦手出しをする上は、必ず十分の決心と責任を以て、其の目的を達成することをしなければなりません。それゆゑ英國の進退は極めて慎重にしなければならぬといふことを、十分御諒解ねがひたいのでございます」

加藤公使は、なるほどさうなづき、

「御趣意は、よく解りました。……については、尙ほ他國のニュースについて何かお聞き及びの事はございませんか」

「近頃一向ニュースといふほどのことを聞いて居りません。果して何の點まで進むつもりか知りませんが、種々の徴候によりて察します所、情勢は極めて重大です。従つて、貴國が其の方針を決行せらるゝについては、將來起り得べき、凡ての事變を慎重に御考慮なさる必要があらうと思ひます」

キンバレイ伯は、かういつて暫く黙り、やがて又靜かに言葉を繼いで、

「申すまでもなく、我が英國は、専ら平和を希望してゐるのでございますから、貴國が再び清國に向つて戦闘を開始せらるゝことは好みません。況んや歐洲の諸

國と開戦せらるゝやうなことは最も欲しないことです。苟くも時局を圓滿に解決する機會あれば、英國は決してその勞を吝みません。たゞ併し、前申上げましたとほり、英國自身の進退は苟くもすることを慎まなければなりません」

キンバレイ外相は、練達な外交官らしい、慇懃な態度でかういつた。

剛腹な加藤公使も、さすがに、それ以上重ねて強請する譯にはいかない。

「貴説はよく解りました。……しかし尙ほ總理大臣閣下とも相當御評議下すつて、相成るべく速に御返事をいたゞきたいと存じます。……そして何日頃御返事を承はることが出来ませうか」

キンバレイ伯は、一寸思案して、

「多分明後二十九日には、何分の御確答が申上げられることゝ思ひます。いづれ此方から御通知申します」

公務上の會談は相互にこれで了り、キンバレイ伯は、それより一層肩の張らぬ調子になつて、

「此際貴國の如き國に向つて忠告をするのも、或る意味にては干涉の一種でありますから、それは致しません。これは、貴下に向ひ、唯私一己のお話に過ぎませんが、遼東半島を日本が占有することの、永遠の利害は果して如何なものでありませう？　これは頗る疑問ではないでせうか。英國と日本とは、地勢が大いに似てゐます。どちらも島國であつて、大陸に向ひ、外敵襲來の恐れが極めて少い。實に天然の金城湯池であります。（筆者曰。今から四十年前には飛行機の事は考へられなかつた）然るに今後貴國が大陸の一部を領土とせらるゝことになること、大に危険が生じて来る。固より貴國の本國を攻撃することは、いづれの國にしても困難な事ですから、そんな無謀な事を企てる國はないと思ひますが、若し優勢なる海軍力を有するものがあれば、日本の本土と遼東半島の領地との連絡を遮斷することは、決して困難な事ではありません。一朝さうなつた場合には、遼東の領地は危険に瀕する。これ取りも直さず、日本の爲に一つの弱點を作るものであります」

加藤公使は黙つて肯いた。

キンバレイ伯は語をつゞけた。

「大陸に領土を有する不利の適例の一つとして、英國は印度を持つてゐる爲め、常に露國の侵略を恐れ、絶えず國境の防備に憚まされてゐます。尤も私一己の見解では、印度に對する露國の侵略の恐怖は、我が國の一般人民の神經が少し過敏に失してゐると思ひますが、兎に角印度あるがために、それだけ英國の弱點となつてゐることは争はれませんが、貴國は朝鮮の獨立を確保する爲に半島を占有する必要があるといはれるのでありますが、清國は今度の大失敗に懲りて、容易に再舉を謀ることはありません。又、露國が朝鮮に侵入する氣遣ひがあるとしても、それは、貴國の本國からでも獨立を維持することは容易に出来ることではありませんか。結局前申した如く大陸に領土を占有することは、却つて弱點を多くすることになります」

加藤はこれを聽いてゐながら、心の中で、然らば英國は、ひとり印度ばかりで

ない、世界到る處に何故に領土を持つのであらうと訊きたかつたが、キンバレイのいつてゐることに、必ずしも悪意はないと思つたので、それは黙つて口にはしなかつた。そして、かういつた。

「仰有ることは御尤です。私も遼東半島の占領は日本の爲に或る場合に於て弱體となるかも知れないと思つてゐます。しかし、日本政府がそれを要求するまでには、いろいろ利害を講究した結果決定したことです。今日に至つてその利害得失を論ずることは、既に遅いのです。もし下關談判結了以前に、他國の抗議がありましたら、或は考慮の餘地があつたかも知れませんが、何分調印を了し、御批准も済んだ今日割讓を放棄することは、日本にとつては困難な事です。其の邊深く御洞察を願ひます」

「いや、御尤もの次第です。たゞ、今申したことは私一己の考へを申述べましたまでで、英國政府の御返答は、いづれ改めて申上げることになります」  
キンバレイ外相とは、その日は、そんな會談で辭去した。

翌二十八日は日曜日であつたから、その翌二十九日の午前外務大臣から手紙が來て、午後面會するといつて來たから、早速外務省を訪問すると、キンバレイ外相は、

「一昨日御内談の事を、早速ローズベリイ總理と協議しましたところ、英國政府は、今度の時局については、一切中立を守ることに決定してゐることであり、それから、今後もその方針を一貫するつもりで居ります。貴國折角の御依頼でありませんが、たとひ直接にせよ間接にせよ、御助力をすることは、英國政府の主義に反することですから、遺憾ながら、御依頼に應じかねます。英國は、貴國に對しては、固より十分御友情を持つて居りますが、自國の利害をも考慮しなければなりません。此の點惡からず御承知願ひます。ローズベリイ總理も、御内示の讓歩の條件は、多分關係三國を満足せしめないであらうと申して居りました。他の二國は兎に角露國だけは眞劍のやうです。總理大臣の考へも私の考へと同じです」

加藤公使も、ほど豫期したことであつたから、

「承知いたしました。早速其の旨本國政府へ打電いたします。本國政府で、此の報を受取りましたら、さぞ失望することゝ思ひますが、貴國政府の御趣意を一々承はれば、致方もございません」

加藤公使はさういつて、暫く黙り、

「羅馬駐在の、わが同僚（高平小五郎）からの内報によれば、伊太利政府は、今回の事につき、貴國と同じく、我が國に同情を表し、何かと斡旋してもよいこの意向のやうであります。それについて伊國政府から、御國の方へ何か打合せでもございましたか」

加藤公使は、伊太利が、極東に對して、大した勢力を持つてゐないことは知つてゐるが、かねて此の國が日本に對して好意を持つてゐることもよく知つてゐた、といふ譯は、日本が、徳川幕府の末に締結した、我が邦にとつて極めて不利であり且つ甚だ屈辱的な交通條約の改正は、明治政府にとつて多年の懸案であつたが、それを伊太利は他の歐洲列強に率先して、我が改正案の提議を容れ、短時

日の間に我が希望を達成せしめてくれたことを思つても知らるゝのであつた。

しかし、それにしても、今度露、獨、佛の三大強國の合従に向うを張つて、英米と連衡して、場合によつては、積極的に進んで日本を支援することを辭さないといふには、唯單に日本に對して好意を有するといふ理由からでなく、これには、必ず別に何か歐洲列國間の政略的關係から、そんな對策に出でやうとするのであることは推測出来るのであつたが、その内情如何は敢て問ふを要しない、伊太利が一臂の力を貸さうといふのは、時に取つての僥倖である。

溺れんとする者は藁でも掴むの譬。加藤は本國外務大臣から、批准交換の期日（五月八日）までに出來うる限りの畫策を試みて見よとの訓電があつたから、かういつて、英國と伊國とが、何の程度に日本を支援する意向であるかを打診してみたのだ。

さういつて訊くと、キンバレイ外相は、たゞ無表情の顔で、

「伊國政府から、我が政府の意向を問はれたことはありますが、格別打合せとい

ふほどのこともしません。尤も伊國は、我が國と同じく、貴國に對し好意を持つてゐることは、私も聞いて居ります。けれども彼國は東洋には殆ど利害を有しない國でありますから、今、どう進退するといふこともありませんまい」

加藤は肯いて、

「御説のとほりです」

キンバレイ伯は更に語を次いで、

「御承知でもありませんが、今日の場合、貴國は、サンステファアの實例を御參考になさつてよいと思ひます。現に目下、貴國に對して異議を唱へてゐる國の一は、あの當時恰度今日の貴國の地位に立つたのです。今、御國が、彼等に一步譲られたとしても、敢て貴國の耻辱とするに足りないと思ひます」

加藤は又輕くうなづいて、

「どうも有難う。貴國政府の趣は早速本國政府へ電報いたします。……實は今日獨逸大使から面會を求められてゐますので、これから獨逸大使館に行かうと思つ

てゐますが、一體獨逸政府が日本の要求に反對を唱へる理由は、どう考へてみても合點がゆきません。それについて何か御氣づきの事でもございませんか」

かういつて訊いてみた。

キンバレイは、

「いや、私にも、それは一向解りません。たゞ先日來度々獨逸大使にも面會しましたが、獨逸政府は、貴國が通商上に要求せられた利權に關して、多少苦情を申してゐましたけれど、その意味がよく分りません。尤も獨逸人は、商工業の上で、甚く貴國人を恐れてゐるやうです。

尤も之は單り獨逸人ばかりでなく、我英國人中にも近來大に恐怖の念を抱いて居る者もあります。貴國人の機敏銳意なる上に、勞銀の低廉に甘んずることは、吾々に取つて、たしかに恐るべき競争者です。しかし、唯それを以て外交談判の問題とするには足りない。私も先日同大使に此の事は語りました」

加藤公使は、そこで、その金佛面を少しく和げて、



「近來歐羅巴の人々が、わが日本人を甚く恐れてゐる風に見えるのは、甚だ私にとつて赤面の次第です。なるほど仰せのとほり日本人は敏捷で、歐洲人の爲すことは何事でも爲し得るでせう。しかし將來の事は暫く措いて、現在の所、また歐羅巴の人が勁敵として恐るゝまでに進歩してはゐません」

「それは、そのとほりでありませうけれど、貴國の前途はこれより大いに發達いたします」

キンバレイ外相と、そんな會談を交へて、加藤は英國の外務省を辭去した。

## 十二

加藤公使は、今朝英國の外務大臣から手紙を受取つたと、丁度前後して、同じ二十九日に午前獨逸大使の使者として、同書記官の來訪に接した。

その趣旨は、此日獨逸大使も公使に面談したいといふのだ。

加藤公使は思つた。

まだ一面識あるに過ぎぬ獨逸大使が、態々使を寄越して、面會を求めるといふのは、きつと目下我が國と其等三國との繋争になつてゐる問題について何か話したいといふのであらうと思つたので、早速來意承諾の旨を答へ使者を歸し、英國外務省を訪れた後更に獨逸大使館を往訪した。

案内せられた應接室に通つて面會すると、獨逸の大使は、日本を侮つた氣持を、顔の先に浮べながら、いきなり、かういつた。

「日本では、今度獨逸が急に方針を轉換したやうに思つてゐるさうですが、それは大變な誤解です。獨逸は最初から一貫して、同一の方針を持続してゐるもので、決して變更などしません。今日とても、我が國は、貴國に對して好意をこそ抱いて居れ、決して惡意など抱いては居りません」

それを聽いて、反撥心の強い加藤公使は、心の中で、  
(何をいつてゐるんだ。白々しい)

と思つたが、剛腹だけに、ちつと、それを心に抑へて、

「はあ、さうですか」

と、冷淡に答へてゐると、

獨逸大使は、口ほど調法なものはないことを、君は知つてゐるかといった態度で、更に次のやうに續けた。

「その證據には、去る三月六日東京駐在の獨逸公使が、本國政府の訓令によつて、貴國の外務大臣代理林次官に向つて、一日も速に平和回復の必要なること、及び清國に對する貴國の要求が適度を越ゆる時には、必ず他國と紛議を醸す場合が到來するから、豫め媾和條件を餘り過度ならしめぬやう注意して第三者との面倒なる交渉を未然に防がるゝが肝要であると御勸告申したところ、貴國の外務次官は、日本政府を代表して獨逸政府の好意の勸告に對して謝意を述べられたさうですが、結局貴國は我が政府の勸告を容れられずして、清國大陸の一部を要求せられた。その爲に、我が東京駐在の公使をして言はしめたところの今回の干渉を惹起したのです。獨逸は、豫ねて今日あるを知つてゐたればこそ、御勸告致し

たのです。それを思つても、我が獨逸の側で貴國に對して方針を變じたのでないことはお解りの筈です」

加藤公使は、勃然とした。が、どこまでも外交家的に外らさぬ態度で、

「東京駐在の貴國公使からお話のあつたとほり、初から我が政府に對して好意の御勸告を與へられ、それに對して謝意を表したことは、私の始めて承はることです。それは、そんな事もあつたでせう」

加藤公使は冷然としていつた。

そして、次にやゝ強い語調で、

「しかし我が國の今回の要求が適度を超えることは、私には首肯致しかねます。今、日本は連戦連勝の勝利者であります。何を求めても得られざるものなき立場に在りながら、尙ほ且つその要求が、あの程度に止まつたといふは、畢竟するに、日本政府が戦勝の勢に乗じて、決して過當の條件を強要しなかつたことを證明してゐるものです。歐洲諸國に於ても、一般の輿論は、日本の要求が極めて穩

當であると認めて居るやうです。これ或は我政府が、貴國政府の御好意の勸告に従つて條件を適度に緩和したのかも知れません。これによつて見ても、日本政府が貴國政府の好意の忠告を斟酌しなかつたといふことは、遺憾ながら、私は承認することが出来ません」

加藤公使は、相手に口を挿む隙を與へず續けていった。

「貴國は數年來常に我が國に對して好意を表せられた。従つて我が國に於ても無二の良友として常に貴國を信頼してゐました。而して貴國が三月六日我が國に對して勸告を與へられた事は、貴説の如く勿論好意から出られたことでありませう。併し、假ひ我が政府の清國に對する要求が、多少貴國の意に満たなかつたとしても、それが爲に、今日、直ちに露國に荷擔して我が國に正反對の態度をとらるゝところを以て見れば、前日の好意の方針は俄然として一變したるものと見ても決して不當ではありませんまい。忌憚なく申せば、貴下の所謂我が國人の貴國に對する不可解の感情は、私に在つても同感を抱かざるを得ません」

加藤公使は滔々として辯駁した。

すると獨逸大使も又負けてゐない。

「否！ 獨逸は貴國に對する好意を決して變更してはるません。現に獨逸が三國の仲間に加はつたればこそ、露佛二國の要求が、遼東半島占領放棄の一部分に止まつたのです。もし獨逸にして三國に加はらなかつたならば、干涉は單に半島還附に止まらず、或は臺灣、澎湖兩島の占有に對しても異議を言ひ立てたかも知れません。然るに獨逸が加はりたればこそ過當の干涉を抑へ、遼東の一點に止めたのです。即ち別言を以てすれば、獨逸加入の一事は、列國の不當干涉の要求を緩和せしめた効果があつたのです。取りも直さず日本は、獨逸の此度の進退によつて大に利益を得たことに歸着するので、決して不平を唱へられる理由はない筈です」

獨逸大使は、嵩にかゝつて、言ひくるめようとした。

加藤公使は、心の中で、

(何をいやがる。盗人猛々しいとは、獨逸の事をいふのだ)

突如起ち上つて、大使の頬げたに鐵拳を加へてやりたいと、もう腹の中は沸えくり返つてゐた。だが、そこは流石に英國流の紳士であつた。疑乎と胸を撫でながら、飽くまで言葉を平靜にして、

「或はそのとほりであつたかも知れません。然し、その反對に考へれば、獨逸にして、果して前日のとほりの主義を一貫せられたならば、他の二國に在つても格別異議を申立てなかつたかも知れません。要之獨逸が今回の事に加盟せられたことは、如何にしても遺憾千萬の次第で、且つ甚だ不可解至極です。それには何か別に深い眞因があるのでせう。お差支へなくば、それを承はりたいものです」

さういつて訊ねると、大使はそこで一寸軽く語氣を外らすやうに、

「本國政府では、貴國が今回要求せられた通商上の讓與について、大分不滿があるやうです」

加藤公使は呆れた顔をして、

「それは一向合點がまゐりませんことです。我が國際通商上の要求は、第一に歐洲各國と同等なる權利即ち最惠國の待遇を受け、第二若干の新讓與を得て、列國と共に、其の利益を分たんとするに過ぎない。而もその新讓與の多くは、從來列國が清國政府に請求したるに拘はらず、今日まで目的を達しなかつたものですから、今回の條約中通商に關する事項は、列國の同情共鳴をこそ豫期したれ、此の點について貴國が反對せらるゝは、我が日本としては實に意想外の事です。その理由を解するに苦しむ」

加藤は滔々として辯論した。

すると獨逸大使は、さすがに言葉に窮したと見え、洒々として、

「實は、通商上の利害如何は、私よく知らない。何れにしても貴國政府が平和條件を豫め列國に内示せられなかつたので、其邊に幾許か疑念が生じたのでせう」

あゝいへば、斯ういふ。

人を馬鹿にしてゐると思つたが、加藤は、

「日本政府は、列國政府が平和條件の内示を求められるならば、喜んで其の乞ひに應じたのです。しかし批准交換前の今日之を公示すべきものでないことは申すまでもありますまい。……貴國政府が異存を唱へらるゝは、察する所他に何か大きな理由があるのでありませう。お差支へなくば、それをお洩らしねがひたい」

加藤は、對手の胸に匕首を突刺した。

獨逸大使は、急所を衝かれて、やゝ暫くの間躊躇してゐた後突然として、顧みて他を言ふものゝ如く、

「貴下は歐羅巴には長く在勤してお出でですか」と、訊うた。

妙なことを訊くなと思ひながら、

「御承知のとほり、私の歐洲存在は僅かに數ヶ月に過ぎません」  
加藤は實のとほりをいつた。

すると大使は、

「さうですか……長く歐羅巴に居られたならば、列國相互間の實情がもつとよくお解りになる筈です。歐洲の外交政略はなか／＼込み入つたものですから」

何處まで人を喰つたことをいふかと、加藤は思つたが、じつと考へてみると、

此の言葉には、可なり深長な意味がこもつてゐる。

加藤はうなづき、

「貴下のお言葉の意味大體解りました。それにしても、わが極東の問題が、偶然歐洲列國間の外交政略の犠牲にされたことを遺憾に思ひます」

さういふと、大使も顔を和げて、

「さういふ事情ですから、佛國は、貴國に向つて強迫を欲しないにしても、今更手を退いて、露國の機嫌を損ね、歐洲に於ける露佛同盟を破壊することを甚しく恐れてゐます。佛國は厭々ながらも露國と道伴れをさせられるのです。しかし露國はさうではありません。日本が大陸の一角を占領することには極力反對してゐます。その點十分御注意なさらないけません。此の際貴國の爲に速に、三國の

いふ所に聽從して、永久の占領は斷念し、一時的の占領を以て満足せられた方がよくはありませんか。」

大使は油斷のならね眼に微笑を含みながら、

「見てゐて御覽なさい。三國同盟も、三四年経てば、立ち消えになつて、形勢一變するに違ひありません。もし今三國のいふまゝに、假りに永久占領を諦めて、一時的の占領にせられたところで、他日再びこれを永久の占領に變ずる機會は隨分生じないとも限りません。暹羅と佛國との關係は、その好い御參考になりませぬ。もし又、折角清國と談判の結果割讓させた物を空しく放棄するのは不名譽だから承諾出来ないといふお考ならば、償金を増額せしむるなり、又は他の何等かの方法によつて補償を要求する手段もありませう。それについて御意見があれば、腹藏なく御聞かせ下さい、私から本國政府へ申立て、出来るだけの御盡力をするやう勸めてやります」

加藤は、心の中で、腹の知れない獨逸の事である。迂濶にその言ふとほりを、

何處まで信じていゝか分らない。

彼は太い眉毛の下から大きな眼で、じろりと相手の顔色を眺めてゐた。

大使は更に言葉をつづけた。

「聞く所によれば、清國皇帝は、條約に批准をせられるさうです。しかし、批准をしたからとて、三國の異存は、そのために決して止みはしません。否、そのみならず、批准済みの上は、貴國で多少の讓歩をしようと思はれても、自國民に對して辯解の辭に苦しまなければなりません。そして、一方三國の強壓は倍々強硬の度を加へて來ます。従つて補償の相談をするにも時機を失し、結局遼東半島を全部放棄しなければならぬのみならず、場合によつては、其の他の讓與にも影響を及ぼし、遂には貴國が大勝の結果獲得せられた利權の大半を失はなければならぬことに立到るかも知れません。餘程慎重に考慮しないといけません」

その、いふ所を聽いてゐれば、なるほど肯かれる所がないでもない。しかし眞實の好意で、さういふのか、別に利己的立場から爲にせんとして、さういふの

か、それは分らない。加藤は黙つてゐると、大使はそこで一寸聲を落し、「英國人は勘定高いですからね。今日は日本に向つて好い顔をしてゐても、内心では、三國の干渉が功を奏して、貴國が據なく遼東占有を斷念することを希望してゐるでせう。其の點も十分御注意なさらんと」

獨逸大使は、わざと、あつさりいつた。

加藤公使は、心の中で、べつと睡をしたい氣持ちになり、

(それもさうだらうが、何方がどうだか！)  
と思つた。

加藤公使が、獨逸大使館を辭去したのは、もう日没頃であつた。ロンドンの街は深い霧に罩められてゐた。

歸る途中も考へた。

今の話で、歐洲列國間の情誼の真相が大分解つた。それにしても、何の譯で、

獨逸大使は、向ふから持ち掛けて來たか、それが解らない。此方が此間中度々英國外務大臣と會見することを知つて、英國の頼むに足らぬことを諷して、此方を動かさうとしたものか。

それとも又、自國政府が急に外交方針を轉換して露國に加擔したので、本國政府の外務大臣から青木駐獨公使(周藏)に向つて、こんな内談をするのはしにくい所から、態々倫敦の出先で自分に話して、日本政府に其意を通じようとしたものか。いづれにしても本國政府からの内訓によつて、面談を求めて來たのであらうが、考へれば考へるほど獨逸も此奴も油斷のならぬ手合ばかりだわいと、加藤高明は、馬車の中で、金佛面に獨りで、苦笑を浮べた。

兎に角歸館すると同時に加藤は、其の日、英國外務大臣と獨逸大使との面談の要領を本國の舞子に向つて打電した。

四月二十五日舞子から西駐露公使にあて、電訓した返電は、一日置いた二十七日に來た。

西は本國外務大臣からの電命に従ひ、その翌二十六日露國外務大臣と長時間の辯論を戦はして、極力露國政府をして、我が要求に同意せしめようとした。

即ち、露國にして、多年親好ある善隣の兩國の關係を傷けまいとせらるゝならば、今回三國協同の勸告を今一應再考せられたい。日本はたとひ遼東半島を永久占有するも露國の利益を冒すことをしないのみならず、又朝鮮の獨立に關しても、日本は、いかなる方法を以ても露國に満足を與へるやう取計ふべしといふ意味を以て對談したのであつた。

固より、それを露西亞が聽入れる筈はないと分つてゐるのだが、陸奥の方寸では、一應さうして見なければ、向ふの底意の深淺を測ることが出來ぬ。又さうしてゐる間に他の歐米列強に百方策略を施して見ようとした。

すると露は、案の定、西公使に答へて、日本の申出は、以て露國の勸告を翻意

せしむるに足りない。と、すげなく拒絶した。

西からの電報と恰も前後して、英國からの加藤の電報も到達した。獨逸の青木、米國の楨野、伊太利の高平前後して回電して來た。

陸奥は其等の材料を基礎にして、四月三十日再應西公使に電訓を發した。

日本帝國政府は、露國皇帝陛下の政府の友誼の勸告を熟考し、且つ茲に再び兩國間に存する親密の關係を重視する證據を表彰せんと欲するが故に、下關條約の批准交換により日本國の名譽と威嚴とを完うしたる後に於て、別に追加條約を以て、右條約中に左の修正を加ふることに同意す。

第一 日本政府は、奉天半島（著者註。奉天半島とは遼東半島の當時の呼稱）に於ける永久占領權は、金州廳を除く外は總て之を放棄す。但し日本國は清國と商議の上、其の放棄したる領土に對して、補償として相當の金額を要求す。

第二 然れども日本政府は、清國にて媾和條約の義務を全部履行するまでは、前記の領土を擔保として、これを占領するの權あることゝ知るべし。



西公使は、翌日、此の覺書を露國政府に示し、重ねて、言葉を盡して、我が提議を貫かうと努めたが、結局露國外務省をして最初の勸告を斷念せしむることが出来なかつた。

露國は、夙に、自分の方で占有しようとしてゐる遼東半島を日本が占領するのみならず、朝鮮を勢力圏内に置くことも極めて欲せざる所であつた。

一旦日本が遼東半島に於て、良い軍港を占領した後は、其の勢力は、ひとり同半島内に局限せず、將來遂に朝鮮半島及び滿洲の北部豊饒の地方をも併呑し、海にも陸にも露國の領土を危険に陥らしめる恐れを抱いてゐるのであつた。

日本としては、それは露國側の猜疑に過ぎないのであつたが、いづれにしても、日本が支那大陸に領土を有することは、飽くまでも、之れを妨害しなければ満足しないといふことは火を觀る如く明白である。

此の上、尙日本の初志を貫徹せしめようとすれば、どうしても實力に訴へて勝敗を決するの他はない。

さうして時日を経過してゐる際、果して清國政府からは、三國干渉を口實にして、五月八日に決定してある批准交換の期限を延期したいといつて來た。

これは露國が蔭から清國を教唆したことは明かである。

青木駐獨公使からの數次の回電は、大體加藤駐英公使が駐英獨逸大使から聽いた所と似たものであつた。青木公使の最後の電文によらう。

今獨逸は、東洋の問題について露國に加擔して、歐洲に於ける露佛を離間しようとする企てだが、その功を生じなかつたばかりか、露佛の間は一層親密の度を加へ、清國が日本に對して將來拂ふべき賠償金の調達の爲に、露國自身の擔保を提供して、佛國に於て英貨の公債を募らんとしてゐる。その公債引受け額には、世界の資本國である英國を、除外する譯にはならぬので、申譯ばかりに英國にも少部分割り當てゝゐるが、主として佛蘭西で募債せんとしてゐる。此の露佛間の情交は、それを離間せんとする敵本主義から求めなくてもいゝ日本の怨みを買ふことも辭せずして急遽思ひ附いたウキルヘルムの大賭博であつたが、それが今無効

に歸せんとしてゐるので、獨逸は甚く氣を悪くしてゐる矢先である。此處で何とか妙計機略を用ゐて獨逸を動かしたら、三國同盟の結帯を緩めきることが出来るだらう。

と、かういふ青木公使から陸奥外務大臣に對しての進言であつた。

だが、種々、在外公使からの公報、情報に依つて判断するに、此の上迂濶にそんな信頼すべからざることを空頼みして居られないばかりでなく、清國が露西亞から啄かれて批准交換を延期したいといつて來てゐることが最も注意しなければならぬことである。此の上ぐづくしてゐたら、遼東還附と、その他の條件とが混同してしまひ、遂には虻も蜂もとらぬ惡結果に落ちてしまふ恐れが十分にある。

#### 十四

陸奥は、もう愈最後の腹を定める時だと覺悟した。勿論伊藤も同意であつた。

二十七日に、陛下が廣島から京都に御還幸になつたので、伊藤はその日まで舞子に居つて兵庫から鳳輦に扈從して京都に入つた。

陸奥は、それより二日後れて二十九日京都の旅舎に入つた。

五月三日西公使からの電報を讀んだその翌日陸奥の旅館に滯京の閣僚、大本營の重臣を會合して三國干涉に答ふる最後の會議を開いた。

その時集つたのが伊藤總理、松方大藏、西郷海軍、野村内務、樺山海軍軍令部長であつた。

伊藤總理と、もに陸奥は、去月二十三日以來今日までの外交上の經過を概略報告し、既にかうなつた上は、致方ない。三國に對して勸告を無條件で聽き入れ、そつちの方は、それで葛藤を解き、他方清國との批准交換は條約の通り之れを斷行することを述べ、衆意に謀つた所閣僚重臣いづれも刻下の危機に處する措置としては、此の外にあるまいといふことになつた。

しかし、遼東半島を還附するにしても、これをむざ／＼無條件で、三國の沒義

道な強迫に聽従するといふは、日本國民として堪ふべからざる無念である。そこに何とか交換條件を附けねばなるまい。

異論百出したが、陸奥は、それを否定し、

「それについては去る四月二十三日以來、微力を盡して百方畫策したのであるが、この上尙下手をすれば、倍々國家の威嚴を損するばかりになる。ゆゑに此の際三國に對しては潔く彼等の勸告に應じ、遼東半島還附については何等の條件を附せず、他日外交上に、自由の餘地を残して置く方が日本としては得策であると思ふのであります」

伊藤總理は初から陸奥と同じ意見であつたので、總理もともに、他の閣僚を説いた。漸くそれに衆議一決し、陸奥は中田秘書官をして、三國に對する回答案の口授を筆記せしめた。

「日本帝國政府は露、獨、佛三國政府の友誼ある忠告に基き遼東半島を永久に所領することを抛棄するを約す」

といふ簡単な覺書を草し、一同の前で朗讀せしめた。

いづれもそれに同意し、伊藤總理は直ちにそれを携へて御所に伺候し、聖裁を仰いで、再び陸奥の旅館に歸つて來た時は、既に夜になつてゐた。

陸奥は直ちに井上書記官、中田秘書官等に命じて、それ／＼三國駐劄の我が公使に覺書の電訓を發し、各駐在國政府に其の趣を提出せしめた。

他の閣僚も、重臣も、もはや一人として口を利く者はなかつた。唯、名狀し難い悲痛と無念の色が凡ての人の眉宇の間に浮んでゐた。

その時海軍大臣の西郷從道が、一同の死の沈黙を破つて、

「此の方が日本の將來の爲によごわす。あッはゝゝゝ」

と太い、濫い聲を出して笑つた。

それに伴れて他の閣僚も空虚な笑ひを發するほかなかつた。

(昭和十年八月作)

## 岡崎邦輔翁に訊く

卷末に載せた三國干渉の自註にも言つたとほり、あの年（明治二十八年の冬）——の議會で、初議會以來常に政府反對黨であつた自由黨がどういふわけで、日清戦争の媾和談判後の外交に失敗した政府を辯護して、これ迄の態度から急轉換したかといふことは、その當時青年であつた私にはひどく物足りなかつた。がだんく成長するにつれ、あの時の自由黨の無節操であるかの如く考へられた態度が後日になつて極めて穩健であつたことが分かるやうになつた。私は自分の年齒加はるにつけ、この穩健なる自由黨が方向轉換さした原動力は何所に在つたかといふ點に興味を持つやうになつた。そしてそれが古き自由黨の智恵袋と言はれた岡崎邦輔氏であるといふことを知り、同氏に對して痛く興味を抱くやうになつてゐた。後同翁と知ることを得て、當年のことを訊ねてみた。その對談が次のとおりである。

## 政界回顧

岡崎邦輔述  
近松秋江記

## 伊藤博文と陸奥宗光

明治以來——所謂新日本の興隆期になつて、二十七八年の日清戦争、その戦争の勝利、引續いて三國干渉、遼東半島還附それから臥薪嘗膽といふ、今の言葉で申せば、一時代の指導精神とでもいふか、その臥薪嘗膽の結果をそれから十年後の日露戦争によつて實現した、この間の十年間が、新日本の興隆期では最も面白い時代であつたといふ、貴下の御説には私も同感です。その時代には私も大いに働いた。その時分のまゝ輪廓をざつといへばかうでした。

何しろ日本は、太閤以來、或は太閤以上に大陸に出兵して空前の勝利を博した。李鴻章

を下關に呼び寄せ、媾和談判を締結して、遼東半島を割譲せしめ、その外に臺灣を取り、二億萬兩の償金を取つたといふので、國民は上下を擧げて非常な満足です。尤も中にはもつと大きな欲望を抱いて居つた者もないでもなかつたでせうが、まあ、それだけの結果を得れば、國民の多數は非常な満足である。

そこで、國民も悦んだが、中にも兩全權の満足といふものは、非常なもので（筆者いふ兩全權とは、時の總理大臣伊藤博文、外務大臣陸奥宗光）大變な鼻息だ。その時は、私も、すつと媾和談判の初から終まで下關に行つて居つた。政黨の連中も大勢出掛けていつた。さう改進黨の方は、よく記憶してゐないが、鳩山（元文相の父和夫）はたしかに覺えてゐる。鳩山とは始終向うで會つてゐたから記憶にある。自由黨では河野廣中、林有造、中島信行（元商工大臣久萬吉男の父）それから三崎龜之助といふ連中であつた。私は、陸奥が、媾和談判で馬關に出掛ける時、お前も一所に行けといふので、それで出掛けていつた。すると、今申すとはり談判の結果は大成功だといふので全權の鼻息が大變だ。中島に會ふと、「どうだ、ひどく鼻息が荒いぢやないか。」といふ。「うむ荒い。」「いや、とても荒くつて寄

り附けない。まあ當分傍に寄らん方がいゝ。」

「それで、君は、これからどうする。」

「どうするつて、すぐ東京に歸る。まあ當分政治はお休みだ。」と、中島は、いふやうな次第。林は、俺は當分土佐に歸るといつて、土佐に歸つてしまつた。すると陸奥が私を呼んで、「君はこれからどうする。」と訊くから、私は折角こゝへ來てゐるのだから、終まで留まつてゐるといつて、つまり河野と私とが一番仕舞まで残つて居つたでせう。さうしてゐるところへ、三國が干涉して來た。そのいきさつと結果は御承知のとほりですが、全權達も談判の終頃になつては在外公使の情報などによつて、薄々は氣づいてゐたことも知れんが、今までの鼻息が荒かつただけに、伊藤公（當時伯爵）は、今度は反對に、非常に困つた。陸奥はその時分病を推して、つとめてゐたので、ひどく健康を害してゐるから、暫く播州の舞子にいつて靜養をすることになり、とにかく下關から、兩全權は大變な勢で大本營のある廣島まで歸つて來た。それは干涉の來る一寸前であつた。何しろ全權が歸るといふので、下關は非常な景氣で、見送りや見物で棧橋は黒山のやうな群集でしたが、その

時陸奥が棧橋から海に落ちた騒ぎなどもあつた。伊藤が一步先きに進んで行き、少し後から陸奥が歩いてゆくと大勢人が載つてゐたので、棧橋が落ち、病體の陸奥が腰から下海に落ちたなどといふ騒ぎがあつた。廣島までの船の上で伊藤が、陸奥の靴下の濡れたのを乾かしたりしたといふやうなこともあつた。

露、獨、佛の三大強國を敵に廻はして、戦争は出来ないといふので、折角割讓さした遼東半島は支那に還附したが、さうすると先の満足が非常なものであつただけに、國民の不平が、今度は丁度その反對に甚だしい。政黨もそのとほりである。とても、これでは納まりが附かない。そこで私は一人で考へた。折角支那から取つた遼東半島を三國に喝かされて、還附したのは残念ではあるが、當時の事情や形勢から見ても、これはどうも致方がない。無暗な強がりばかりいつて、下手な事をする、國に傷が附くことにならないとも限らない。そこで私は、東京に歸つてからでしたが河野に會つてその話をする、河野廣中も至極同感であるといふ。

臥薪嘗膽といふ言葉は、その頃から盛に用ゐられて來ましたが、これは、どうしても臥

薪嘗膽で行かなければならぬ。吾々政黨の同志で、一つ大いにやつてみようぢやないかと、河野との意見が一致したから、私はある日、陸奥の處にいつて、その話をした。陸奥はその時大磯に戻つて養生してゐた。陸奥の所に行つて、自分は、かういふ考へを持つてゐるといふ話をする、その時陸奥は非常に、私に對してクールなことをいつた。

「君一人で、そんなことをいつた所で、片袖では君、舞はまへない。舞は兩袖なくてはまへない。自由黨は、尺の足らない反物見たやうなものだ」といふやうなことをいつた。

こんな調子で殆ど對手にしようとしな。私はその時ひどく頼りなく思つたが、爲方がない。陸奥の方は、そのまゝにして、これはほかの方から手を着ければならぬと考へてその時は、それきりにして陸奥の處から歸つた。

しかし、私が、そも／＼政黨を基礎にした内閣を造らねばならぬと思ひ立つたのは、根本は陸奥の教訓が動機となつてゐる。私が始めて代議士になつたのは明治二十四年で私は二十三年始めて國會が開設された時には代議士にはならなかつた。その時陸奥が農商務大臣をしてゐて代議士になつた。今日では大臣その他役人をしてゐて代議士であることは普

通のことゝなつてゐるが、その當時でも、イギリスでも何處でも大臣が代議士であることを、却つて當然としてゐる。日本でもさうであつて可いといふので陸奥も大臣で同時に代議士に當選されたが、やつぱり當時では、まだいゝんな事情で面白くないといふので、代議士は一年きりで止めた。その後へ私が出た譯です。

その時私が代議士になつたので、陸奥が私を呼んでいふには、つらく今日日本の政治社會の事を観るに、官僚は官僚、藩閥は藩閥、政黨といふやうに、政界が横斷されてゐる。此の横斷はいけない。よろしく縦斷しなければならぬ。それはひとり政界ばかりでなく、一般社會がさうである。實業家と軍人、華族と平民、さういふものが悉く横斷的に社會に存在してゐる。これを縦てに連らねて、政治を國民の利害から割出して來ることにしなければならぬ。それが、また全體の権利でもあり、義務でもある。さうするには、どうしても政黨政治といふものを發達せしめなければならぬ。君は官吏といふものになつた經驗がないから官界の事は知らないだらうが、吾々は十分その經驗を有つてゐる。だから一層政黨政治の必要を認めてゐる。君もこれから政治に關係するなら、その決心で大にや

れ。

と、かういふ教訓を與へられたことを記憶してゐる。それで、私が考へたのに、今伊藤は、初の鼻息の荒かつたのに引換へ、國民の不平が勃發して、ひどく弱つてゐる。弱つたといつても、支那との戦争に空前の勝利を博したのだから相變らず鼻息は荒いだらうが、かう國民の不滿が募つては第一この冬の議會を、どういふやうに捌くか。大隈の率ゐてゐる改進黨は、これは正面の敵である。今までは、吾々の自由黨でも藩閥政治、官僚政治とは初期議會以來常に戦つて來てゐる。今こゝでもし自由黨と改進黨とが連合して政府と戦つたならば、伊藤は必ず困るに相違ない。伊藤が困るのは、いゝとして、第一日本といふ國家の不幸である。そこで私は考へた。私共が一國の政治は、政黨に基礎を置かねばならぬと考へて居つた。その意見を實現するには、今こそ最も好い機會である。

今、日本は歐洲の強大國から、殆ど袋叩きに遭はうとして危いところで國難を免かれてゐるが、吾々日本國民として考へれば、臥薪嘗膽も無理でない。この臥薪嘗膽を實行するには、いたづらに政府を攻撃ばかりして居つては、その實行は望めない。こゝは一つ此方

から進んで、伊藤内閣を支持して同時にその機會に政黨政治の歩を進めようと思つたのが、私の考へでした。

で、陸奥は、そんな調子だから爲方がない、暫らくそのまゝにしておいて、これは一つ伊藤に打つかつて話してみようと思つた。しかし、私が伊藤の處にいつたところで、何だ岡崎のビイ〜がと思はれては、話はそれきりだと思つたから、その前に伊藤には最も近親な伊東巳代治に一度會つて、伊東に周旋させようと思つたのですが、この伊東がまた、人を輕蔑する奴で容易くおいそれと行かないに定つてゐる。そこで私もいろ〜思案の結果、伊東とは最も懇意の間柄である阿部浩に話して、相談してみようと思ひ、阿部の處に出掛けていつた。阿部はその頃内務省の社寺局長をしてゐた。

阿部に會つて、少しゆつくり相談したいことがあるからといふと、ぢや會はうといふ。二十八年の、もう夏で暑い時分であつたことを覚えてゐる。何處か涼しい處で飯でも食つてゆつくり話したい、どこがよからう、それぢや龜清がよからうといふので、約束の日に私は阿部より一足先に柳橋の龜清にいつて待つてゐた。竹仙といふ染浴衣などを賣る反物

屋がある。その竹仙を龜清へ呼んで浴衣を見てゐるところへ阿部がやつて來たことをおぼえてゐるから、夏の初でした。

それから風呂に入つたり夕飯を食つたりした後で、阿部に、自分がかう思つてゐるがといふ話をする、阿部がいふに、「それは丁度い〜。伊東は今、親爺（伊藤）の機嫌を損じて困つてゐるところだから、何か手柄になる話を持つていつて伊藤の機嫌を取り直したいと思つてゐる。君のその話は此の際最も好い話だ。」

阿部はさういふ。それから一應阿部から伊東にその話をして、伊東から又伊藤に話すと、伊藤は悦んで一遍岡崎に會はうといふことになり、私は伊東と一所に伊藤の處に行つた。果して伊藤はひどく悦んで、

「さういふことにしてもらへば大變に好都合だが、それは君のいふとほりになるか。」  
と訊くから、

「ぜひとも、やつてみるつもりです。」

「さうか、何分よろしく頼む。」といふ。先つきの陸奥とは打つて變つた伊藤の挨拶で、こ



ちらも、いよく乗り氣になり、その話を河野にすると、河野とはもう度々意見を交換してゐて、元から賛成である。それから林(有造)が下關から、すつと土佐に歸つてゐるので、林を電報で呼び寄せる。板垣には、板垣と最も近親な関係のある竹内綱から話すと、板垣もそれには賛成だといふことになり、その他には片岡健吉、松田正久などは屢屢會合して、此の冬の議會で政府を支持することに吾々の腹は決定した。

その他の政黨では改進黨を除いて、佐々友房の率ゐる國權黨がある。これは話をすれば佐々は無論同意するだらうといふやうなことで、吾々は政府を支持しました。

すると陸奥です。伊藤に會つて二三日すると、陸奥から電報で、大磯に來いといつて來た。行つてみると陸奥は、その前會つた時とは凡て調子が變つて居つて、

「伊藤から聞いたが、今度の事は、大變好いところに氣がついた。今後ともその方針で大いにやつて貰ひたい。」と、前と反對に賞められたり激勵もされた。

そこで、いよくその冬の議會になつて、改進黨は正面から政府に反對して、彈劾演説は尾崎と犬養が急先鋒でやつた。自由黨からは三崎龜之助が政府の辯護演説をした。然

し、外交の失敗を國民と反對黨とがいかに彈劾したところで致方がない。吾々はそれよりも臥薪嘗膽の實を擧げること専ら目標にして働いた。

日清戦争でも、日露戦争でも、外交上の結末になると、國民は毎時不平を言ふ。外交談判に國民が不平を言はないやうな場合は、これは、國家にとつて危険な外交である。

その時の——二十九年年度の豫算が始めて二億萬圓に上つた。二十六年、二十七年までは豫算が八千萬圓であつたものが、二十九年の冬の議會で一躍二億萬圓といふ膨脹であつた。それは種々な事にそれだけ使つたが、主として軍事費であつた。今日から見ると僅か十分の一にも足りない豫算であるが、戦争前に八千萬圓であつたものが二億圓といふ數字に上つた。(後略)

(昭和八年五月執筆。——同年十月號中央公論所載)

英雄涙あり

天正十年五月末のある日であつた。羽柴筑前守秀吉は、此の間中から降りつゞいた梅雨の晴れ間を見て、小西彌九郎、堀尾茂助、片桐助作など數人の家來を供に從へて、矢部川を堰入れた堤の上を歩いて、味方の諸將の陣屋々々を巡視してゐた。彼は雨上りのジリジリと照りつける暑い日光を、軍扇を眉廂まひさしにして遮りながら、今しも高松城の下櫓の棟木まで浪々と浸してゐる凄じい水勢を眺めて、からりと快よげに打笑ひ、

「のう、茂助、此の間中の雨つゞきで、又急に水嵩が増したの。」後についてゐた堀尾茂助吉晴に言葉をかけた。

吉晴は一步秀吉の方に追ひ縋るやうにしながら、

「左様でございます。この分では最早敵の落城もあと數日を待ちますまい。」秀吉は、

「うむ。」と、一つ大きく肯いて、「秀吉の軍略が見事當つたのぢや。が、中國の毛利三家は流石に日頃の恩顧が手厚いと思はれ、皆なも知つたとほり、先年鳥取城

中の糧食が盡き、馬畜を食しても尙ほ降參せなんだこと、いひ、今この高松城も、あのとほり、満水堀に溢れたれば、城中定めし、竈に蛙が泳いでゐるであらうが、容易に降參する様子もない所を見ると、長左衛門も、元春、隆景から預つた大事の城なれば、一命を棄て、死守するであらう。

此の秀吉も斯かる中國の大敵を征伐する大將に、柴田、丹羽、瀧川ども、織田家の元老を差置きて選拔せられたのだから、右大臣殿の大事の軍を預つて居るといふもの。一生縣命ぢやぞよ。貴様達もその積りでやつてくれい。」

「それは申すまでもござりません。」茂助が返事をする。

秀吉は更につゞけて、

「けれども高松の城に居る者共が、上、主君に對して忠義ぢやが、下、民を愛し士卒を悲しむことを知つて居らん。軍は徒らに士卒を殺傷し、農民共を惱ますばかりが手柄ぢやない。……のう彌九郎、助作、さうであらう。高松の城の在地の百姓共の家宅は此の間から水に浸され、家財雜具を失うて、老若男女幾許の苦し

みをして居るか分らぬ。救ひを求めて泣き叫ぶ聲を聞いては、たとへ敵地の民草なりといへども、罪なき彼等を見殺しにすることも出来ぬによつて、此方から舟を出して救うてやつた。城中五千人の人数をして悉く鯉鮒の餌食ならしめ、清水宗治一人の忠節を全うせんとする事は、天下の民の主たるべき器ではない。見て居れ、五七日の内には宗治自害して籠城の諸人の命を助けくれよと訴へ來るにちがひない。所詮さうなくては、かなはぬことぢや。遅い、遅い。」

と、筑前守は手を拍つて、又、哄然と笑つた。

秀吉は陽にさういつて諸將の勇氣を勵ましてゐたが、此の程から心中には祕かに不安を抱くところもないではなかつた。と、いふのは、水責めの奇計が功を奏して、高松の城の落ちるのは、數日に迫つてゐるが、其の後詰に控へたる敵は名にし負ふ中國の豪族毛利一家の大軍である。武門の名譽にかけても、よも高松の城を見殺しにはしないであらう。先頃から、問者を放つて敵情を探らせたところによると、向ふの軍勢は日を追うて加はつてゐる様子である。

筑前守が高松城の水責めに取りかゝつたのは五月の初旬であつたが、その頃毛利の本家輝元は九州に兵を向けて、大友、立花などの諸侯と手合せをしてゐたが、備中高松の出城から急使を走らせて、織田信長の先鋒羽柴秀吉が上方勢の大軍を引具して備中國へ亂入し味方の城々既に四つ五つを落し、その勢破竹の如く高松城を落さんと攻寄せたが、城主清水宗治をはじめとして、一族郎黨、義心鐵石の如く、城中五千の人数心を一にして立籠り、急に落城する様子もないと見て、強ひて戦を急がうともせず、攻略の手を變へて、晝夜を分たず、數多の工夫を使役して矢部川の水を堰入れたれば、折柄の五月雨と堤の内一面の海となり候、あはれ一刻も早く九州の戦地より馬首を返させたまうて、高松表へ御出陣あり、上方勢を蹴散したまはずば、城命且夕に迫りて滅亡遠からず候。

と、注進した。そこで輝元を補佐して一緒に九州に出陣してゐた叔父の小早川左衛門佐隆景は、九州の方は先づ大方おほかたに事を濟まして、本國藝州に取つて返し、直ちに備中へ出馬した。その勢凡そ一萬五千騎と聞えた。

小早川左衛門佐隆景は備中表へ出張し、かねて其の名を聞き及ぶ羽柴筑前の陣容を遙に望んでみると、旗馬印の紋は大方播磨、美作、備前三國の侍と見え、其の左右に備へて居るのが上方武士と思はれて、日頃見馴れぬ家の紋である。猶その奥深く備へてゐるのは、例の五色の吹流しに金の瓢ひょうこの七つ八つ、五月晴れの風に吹かれて、そよ／＼と南北になびいてゐるのが、正しく羽柴筑前の本陣と見え  
た。

此の時、秀吉は主人の信長の四十九歳より二つ若い四十七歳、小早川隆景は四十八歳といふいづれ武將の盛り。隆景は固より思慮深き大將であつたから、じつと羽柴の勢の備へやうの嚴重なを見て、我が毛利とは初度の對陣であるが、敵は今、織田家の家中にありて日本國中にその名を知られたる羽柴筑前である。易く侮つて斬つてかゝらば思ひの外の敗軍をする事がある。

暫らく後陣の味方を待つて、其の上の評定にしようと思案をして居るところへ本家輝元は八萬餘騎といふ大勢を帥ひきゐて藝州表發足の注進があつた。尙、かねて

山陰の雲伯二州に出陣してゐた隆景の兄吉川駿河守元春へも、備中高松城の危急を告げて、應援の出馬を促して置いてゐたところ、元春は嫡子元長、次男元氏、三男經信等に雲、伯、石三州の兵勢四萬餘騎に達し、輝元の旗下八萬餘騎を合する時は毛利三家の軍勢は十三萬餘騎の大軍となり、秀吉の軍勢に比べると二倍以上になつた。各々帷幕を三ヶ處に張つて陣を横たへたる有様は、さすがに中國第一の名家の軍勢と思はれた。

かゝる毛利方の大軍が前後して殺到したことは、もとより秀吉の軍中にも分つたが、高松城内にてもその事を知つて、主將宗治以下大に力を得て士卒を勵まし萬死の中に守を堅めてゐる。

そんな有様で兩軍互に大事を計つて迂濶な攻勢を取らうとしなかつたが、その間に時々双方の小ぜり合ひぐらゐるはある。

そこへ此の程から降り募る五月雨に山々谷々の水は思ひの外に増して、今五尺も増したら、城中はすべて濁水の底に沈んでしまふと思はれた。

毛利方では高松城中五千の人数を見殺しにして置く事が出来ぬので、頻りに氣を焦り、羽柴が軍の氣を散らし、その隙を狙つて寄手の守る堤を乗取り、水を切り落さうと企てたが、智謀逞しき秀吉は固よりそんな手に乗る者ではなかつた。毛利勢の旗の動く様子を遙に望み見て、向ふの軍略を讀んでしまつた。そして急使を安土に走らせて、早々御下向、毛利三家を打ち果させ給へと、織田家へ注進した。

今、秀吉主従の歩いてゐる矢部川を堰入れた堤の上に一人の怪しい僧形の者が佇んでゐるのを、秀吉の先拂の者が見留めて、引提へて、秀吉の前に拉れて來た。

秀吉はそれを見ると、一見して何だか一癖ありさうな坊主で、常人でないといふ事を直覺した。そのみならず、此の坊主は以前何處かで見たことがあるやうな氣がした。勿論毛利方の者に相違あるまいと氣づいたので腹に一物ある筑前守は、四方を見放した堤の上で、そのまゝ家來を悉く遠ざけてしまひ、

「いかに、御僧、御手前は必定毛利方の御仁と見受けるが、お名前は何といはるゝ。それがし先程より、つらく御手前の顔を見て居るに、どこやら見覺のある顔のやうに思はれる……もしやお手前は前年京の三條大橋の橋詰にて、行人の人相を見てござつた易者殿ではなかつたか。」

筑前も、さすがにうる覺えではあつたが、二十年ばかり前のことを記憶に持つてゐたので、さういうて訊いてみた。

すると、その坊主は不思議な顔色の中にも、驚いた様子で、秀吉の顔を又しげ／＼と見守りながら、

「いかにも、拙僧ことは、先年、京の三條大橋の橋詰に於て、さゝやかなる圍ひをしつらへ、道行く人の手の筋、人相を見て、はづかしき生業をいたしてゐたことがござつたが、して、筑前守殿には、いかにして拙僧を御存知なされました。」  
「いや、忘れるに無理もないことぢや。道を往く多くの人の人相を見てゐる事故悉くそれ等の人々を記憶しては居られぬ道理ぢや。數ふれば今より二十年以前、

法印がそれがしの手筋に知天下の筋ありとていふかしがりし、その時の足輕こそ、此の羽柴筑前ぢや……して法印には如何にして此處へは來られしぞ。」

それを聞いて、その怪僧は頭を上げて筑前守の顔を、もう一度よく見直すと、なるほど、二十年の星霜を隔つ昔のことであるが、さういはれてみれば、何處か朧げながらに見覺えがあるやうに思はれる。

それには、少し昔に立戻つて話さなければならぬ。羽柴筑前守秀吉はまだ木下藤吉郎といつて、織田信長の足輕勤めであつた頃、ある時、主公の代參に立つて、山城、男山八幡宮へ年ごもりに參詣しての歸途、京の三條大橋を通りかゝり、その橋詰に葭簀の圍ひをして、道を往く者の手筋、人相を見て居る易者に、八卦を見てもらつた。すると、その賣卜者は、天眼鏡を透して藤吉郎の手筋をしげ／＼と打ち眺めてゐたが、その掌には中指の中心から手くびにかけて絲を引いたやうな一條の筋が通つてゐた。易ではこれを知天下の筋といふのであつた。易

者は、心に驚きながら、その男の容貌を見ると、何處か顔の容が猿に似てゐる。そして服装といへば、いかにも遠國の者らしく、腰に二刀は帯びてゐるが、その風體は足輕出たちである、草鞋も破れて殆ど素足同然である。竹の皮の笠は破れて日の目が洩れてゐる有様。

易者は、靜かに藤吉郎に向ひ、

「お手前の手筋と相形によつて判断するに、後日に至つて天下の權柄を執らるゝほどの天質顯らかである。必ず程なく立身せらるゝであらう。不思議の御人體である。」

と、歎息するやうにいつた。

藤吉郎はそれを聞いて、大に悦んだが、この身の立身果して法印のいはるゝ通りならば、如何なる謝禮をも辭せぬところであるが、見らるゝとほり、貧賤なる身分の者で、路銀の貯へとても甚だ乏しうござれば、重ねて御禮の時節を待たれといいつて、藤吉郎はそのまゝ、葭簀張りの圍ひを立ち出でた。

やがて藤吉郎の立ち去つた後姿を見送りながら、その易者は觀相の書物をとつて、突如鴨川に放り投げようとした。藤吉郎はそれを振顧り、見咎めて、一步うしろに立戻り、これは何故に左様なことをせらるゝぞといふかり訊いた。

「拙僧、此處に出て、日々多くの人々を觀見して居れど、いまだ一人たりとも見損じたことはござらぬ、それゆゑ、多くの人々も拙僧がいふことを信賴し、拙僧も亦自分のいふことの間違はぬのを樂しみとしてゐたのぢや。そこへ、今、お前さんの人相を見て實は心中密かに、不審を抱き、觀相の書物が信用ならぬことを知つた。今まで中つたと思つたことは、皆悉く偶中<sup>まぐれあたり</sup>で眞に相形の効驗といふものはないことを、今日といふ今日始めて悟つた。それゆゑ明日より斷然人を觀相することを止めようと決心した次第ぢや。この虚妄の書に最早用はござらん。それで河中に流し棄てるのぢや。」

藤吉郎はそれを聞いて、からりと打ち笑ひ、



「これはしたり法印、御邊いかに手相をよく觀らるゝとはいへ、當るも八卦、當らぬも八卦といふことがある。法印は、今手前の足輕姿を見て、それが、知天下の手の筋を持つてゐることを不思議がらるゝが、それが必ず間違つて居ると思はるゝは、ちと、早合點と申すものぢや。それがしとて、今は足輕であるが、行末立身してこの手筋のとほり、天下を取るまいものでもない。それがし確かに天下を支配してみませう。法印も随分長生きして、見て居られよ。」

藤吉郎は微笑を含んで、かういふと、易者は、

「これは、近頃、珍らしい強氣の御仁ぢや。どうしてその知天下の望みが達せられるな。手前が判断して進めた所によつて、定めしさう思ひつかれたことゝ察するが、後學の爲めぢや、その譯を謂うて聞かされい。」

藤吉郎は、なほも打ち笑ひつゝ、

「いや、譯を語るにも及ばぬ。凡そ人を觀相するに、唯二つ時の相形、風俗を見ただけでは生涯の事は分らぬ。その人の一生を盡して後はじめて占斷の當否が知

られる道理ではござらぬか。それがし三十歳にはまだ少しの間がある。生得の天分を盡すのは、これから先のことぢや。法印も知つて居らるゝとほり、當節の世の有様を思つても見られよ。人々の器量次第で、昨日まで油桶を枓あぶこにかけて荷ひ賣りをしたものが、一國の主となつた齋藤道三入道の如きためしもあり、又都に住みかねて、はるゝと駿河國まで浪人せし者が、他人の力を借りて人の國を切り取り、終に關東八ヶ國を我が物とした北條早雲の如きためしもあり、それがしとて、唯今は見らるゝ如き微賤の足輕なれども、足輕で、わが一生を終るつもりはない。御邊はあまりに氣の早いことをいはれる。」

さういふと易者は重ねて呆れた顔で、

「いかさま、いかさま、拙僧てまへの思ひ過しであつた。御邊は天晴れ大才子。相形のすぐれしのみならず、智慧も器量も天下一。末頼母しい御仁ぢや、折角勵まされい。しかし後々に至り、御見忘れといふこともある。その時のしるしにこれを參らせう。」

と、云つて、易者は自分の頸にかけてゐた輪袈裟を取つて足輕に與へた。

この賣卜者は、もと藝州の者であつたが、京都の東福寺の僧となつて、惠瓊といつてゐた。發明の性質であつたが、なか／＼尋常の事をして終るべき人間ではなかつた。後、寺を追はれて、衣食に窮した所から三條の大橋の袂で暫時賣卜を生業としてゐた。その後又故郷の安藝に歸り、廣島の城下の安國寺といふ寺に住して居たが、學才があり、辯舌に巧みで觀相術に妙を得てゐるところから、毛利家の信任を得て、常にその軍營に伴はれてゐた。今度毛利三家が羽柴秀吉の上方勢と高松城を挟んで對陣してゐる陣中にも従つてゐたが、秀吉の水攻めの奇計を驚き見て、その日も一人で堤の上に立つて形勢を觀望してゐたところであつた。

そこで惠瓊も昔の事を思ひ浮べて、はたと膝を叩き、

「なるほど／＼。もはや二十餘年前の昔のことゆゑ、拙僧も御見忘れ申してゐました。さるにても御大將の君には、御記憶の確かなるに感歎いたしました。」

それから、暫らく二人は思ひ出ばなしを交して、惠瓊を陣營に伴つて歸り、鎧櫃の中に保存して居つた往年の輪袈裟を取り出してこれを見られよと、法印に示した。それから又、互に今昔のことどもを語り合ひ、暫らく時を過したが、惠瓊は、

「君公にはかくの如く御立身あつて、播州姫路の御城主とならせられ、信長公の御代官として中國鎮守の御大將を承り、只今この高松城水攻の御軍略はなか／＼以て凡慮の企て及ぶところでございます。それに引換へ、貧道は、本國安藝の安國寺に住し、毛利三家の扶持により、今日を過して居ります。」

と、感慨めかしくいふ。

筑前守は肯きながら、

「先刻よりのお話に、毛利御三家とは別懇とのことでございます。それについて法印に一と働き働いてもらひたいことがござる。」と、云つて、筑前守は更に惠瓊を陣屋の奥の一室に招き入れた。

そしてこれを見られよといつて、示したのは今水攻めを仕掛けてゐる高松城の模型であつた。そのほかに、備中、備後と、これから先き段々攻め入らうとする毛利家の領地の城の模型をいくつも拵へてあつた。

秀吉は一々それ等を惠瓊に指し示して、

「このごほり今後の軍略は掌を指すごとく、既に成算がある。高松城は貴僧の見らるゝ通り、全く氷浸しになつてゐる。落城は目前である。城將清水長左衛門以下の者共は一人も剩さず水死すること疑ひない。誠に氣の毒の次第である。凡そ天下を知るべきほどの大將といふものは、たとひ敵地の軍兵百姓たりとも、徒らにそれ等を殺傷することを以て本意とするものでない。之れに反して、わづかに一國一城を守るほどの大將は敵と味方の死傷を多く悲しみ傷まぬ。今秀吉の戦法は即ち天下を知るべき大將軍の戦ひであるが、清水宗治の戦法は一城の主の戦ひである。法印には如何に思はれるか。」

と、意氣軒昂として誇らかに語つた。

惠瓊は、たゞ成程々々と肯づきながら、腹の中で思つた。さても、この筑前守といふ武將はおそろしい人物である。二十年前まで織田家の足輕であつたものが、今は中國陣の總大將となり、敵の城地を掌を指す如く悉く模型に造つて、戦略を立てゝゐる。この有様では、毛利家の本國安藝國も心元ないと、恐る恐る尙も、四邊を見廻すと、信長公出馬の日割、後割に明智、丹羽、細川、筒井などといふ大將が前後して押寄せてくるよしの道筋から驛路の次第を記した書附けを備へてある。

やがて筑前守は、ちつと惠瓊の顔を見ながら、

「なんと安國寺の法印、それがしの主君織田右大臣殿の軍ぶりは妄りに人を殺さず、亂りに民を傷はず、領地を貪らず、寶を私せず、唯王室を尊び、朝廷を敬び奉ることを以て専ら本意とせられる。法印よくこの旨を心得て、吉川、小早川の兩川始め毛利家の方々に語られたい。そもく信長公に於かれては、更に毛利家と宿怨あるにあらず、只近頃足利將軍家の事で織田家と毛利家と干戈を以て相見

えるに至つたことは、主君信長公にあつても初めより遺憾千萬に存じて居られる。それゆゑ當方に於ては、現在の戦況のまゝ、北は伯耆半國を境として、南は當備中國矢部川を限りとして東西に引分かれ、速に中國靜謐の計をめぐらしたいと存する。……秀吉がそのことをいひ居つたとはのめかして、兩川の心をさぐり、秀吉に知らして下されい。さあらば秀吉法印の爲に何處までも外護となり、何事にもあれ、十分に貴僧に御馳走致し申す。」

安國寺法印は、既に毛利家の爲に心中少からず危懼を抱いてゐた際とて、これを聞いて一議に及ばず、委細畏りて候と、筑前守の陣所を退辭して直ちに毛利の陣營に引返した。

先づ小早川の陣に行つて、隆景に會ひ、筑前守の陣にいつて見聞したまふの次第を語り、毛利家持城の地形は凡て出來て居り、その地形に従つて人數の手くばり手に取る如く工夫をこらしてゐる有様、決して尋常の軍略にあらず、當御陣所の地形も出來てゐたらしいと委細を物語りした。

すると、隆景は、何ともいはず、凝つと眼を瞑つてそれを聞いてゐたが、やゝあつて、

「さもあらう〜。さても羽柴筑前といふは不思議の侍である。元は木下藤吉郎とかいうて、信長の足輕であつたと聞いてゐる。それが今は播磨一國の主となり、三四萬の軍兵を手足の如く使ふことの巧みさ。我等高松の城の後詰めとして押寄せて來たが、水の爲に遮られて進む事もならず、空しく目を過すは、皆これ筑前の働きである。」

と歎息した。

そこで安國寺は、一段と聲を低くして、自分が先年京都に居つた頃一日三條大橋の袂で足輕の手筋を見たところ、不思議に知天下の筋を發見したことがあつた。すると、今日筑前守に面會したところ、それが不思議にも以前の足輕であつた。この頃の勢を以て考へまするに、今四五年の内には、いかやうに出世するか測られませぬ。或は天下の權柄を掌握することに相成るか知れませぬ。實に前途

の分らぬ人物でございます。といふと、隆景もうなづき、

「いかにも」。何様凡人でない武者振り、それにつけても事の起りを思ふに、信長は京より東の者である。當家は京より遙か西に離れて中國の者である。國境を遠ざかつた兩家の間、格別親しみもなければ、従つて又怨みもない。只鞆の津にまします足利將軍家のことよりして、今日の確執を招いたばかり、且つ又秀吉とは初めより何等の恩怨とでもない。むしろ彼が如き天晴な武將とは互に提携して天下靜謐の計を致したいものぢやと隆景も此の程より存じ付いてゐたところである。

隆景は秀吉といまだ一度も會はぬに兩雄肝膽相照したことをいふ。

その意見は吉川元春の考へとも同じであつた。殊に安國寺が秀吉の陣で目撃して來たといふところによれば、信長自身安土を出馬する日取も決定して、その他の後詰の諸將も、追々中國に向つて出陣の様子である。それ等の總勢が加はつたならば二十萬にも達するであらう。さうなつては味方の勝利愈覺東ない。これは

信長の加勢が加はらぬうちに、早く和議を調へた方が賢いと考へた。それで兩川は安國寺がそんな因縁で筑前と知つてゐるなら、よき仕合せ、一骨折つてもらひたいといふことになつた。

しかしそんな場合にはよくありがちなことで、毛利の家中血氣に逸る武士どもの中には、せめて一合戦して、毛利の弓矢の武威を上方勢に知らせて後、和議を取り結ぶも遅しとせぬといふものもあつたが深慮の隆景の意見はさうでなかつた。それといふのは筑前は信長の足輕より成り立つて中國一手の大將となり、遠く鎌倉以來取り傳へてゐる中國一の毛利家と既に互角の對陣をして居るのである。これさへ既に、毛利家にとつては、分が悪いのである。況んや此の上一合戦して、萬一少しでも毛利方に鈍い旗色でも示したなら、それこそ、倍々當家の名聞を傷けることになる。目前のことはともかく、行々當家の爲に萬全の策は一日も早く筑前と和平を取結ぶが得策であると、隆景は群議を制して動かかなかつた。元春も今のところ爲方もなく、隆景の策に従ふ他はあるまいとの意見であつた。

そこで尙ほ熟議の結果、毛利家は、正使として福原越後守貞俊、又介添として安國寺を、筑前守の陣中に使はし、和議を申し入れることにした。

すると、縦横の機略を藏する秀吉のことだ。先には機密に安國寺に意を含めて毛利の意向を窺はしめたが、いよいよ向ふから和議の申し入れがあるとなつたら、今度はひらりと身を交はしたやうに正面を切つた態度を示して、淺野彌兵衛をして毛利の使者にかう言はしめた。

「御口狀の趣き早々京都へ申し遣はし、右大臣殿の差圖あり次第御挨拶申すべし。」

といふ返答をした。そして秀吉自身は、福原越後守にも、安國寺にも會はうとしなかつた。

安國寺は、聊か事が相違した感じがした。けれども、毛利家から重大なる任務を依託されて居ることであるから、子供の使ひではあるまいし、秀吉に會はずに歸つたとあつては自分の顔は潰れてしまふ。ここはどうあつても秀吉に會はねば

主命を全うしたとはいへない。それで安國寺は頻りに秀吉に直々の對面を希望した。

そこで秀吉は、淺野彌兵衛をしてかういはしめた。

御坊と秀吉とは軍の外の交りである。又、福原殿は毛利家の御使者である。我は信長の代官に過ぎぬ。秀吉の一存にて和睦の議は何と取計らふこともならぬ。京の主公へ申し遣はしその後でなければ面會し難い。

そこで福原と安國寺は爲方なく、秀吉には面會しないで立歸り、その趣を語るに、兩川は更に又肝を潰し、さても大膽なる筑前かな、いよいよ以て我等が敵でない。大儀ながら、今一度安國寺折返して申し入れて見よといはれ、安國寺は重ねて筑前の陣中へ來て淺野彌兵衛を通して言葉を盡し説いたところ、秀吉もやうやく肯き入れて、然らば會はうといふことになつた。

その時、毛利家の提出した媾和條件といふのは、その所領、備中、備後、美作、因幡、伯耆の五ヶ國を織田家に譲り、織田家は高松城の將兵の生命を保存す

るといふのであつた。が、秀吉はそれを承知しなかつた。

安國寺はその由、毛利家に復命した。その邊に、双方の條件に大分の開きがあつて、和議はやゝ停頓の状態であつた。それで安國寺は思つた。五國を割讓してまでも秀吉が聞き入れないのは、畢竟高松の城將の首を得んが爲めであらう。

秀吉としては、それはいふまでもないことである。戦争の勝利といふ名目を明かにするには高松城主の首を得なければならぬ。

そこで安國寺は城主清水宗治に會ひ、秀吉との媾和條件について因果を含めて物語り、宗治の一命を毛利家の爲に捧ぐべき事を諷した。宗治は潔よくそれを應諾した。そこで安國寺は更に秀吉の陣に至つて、彼の再考を求めた。かくの如くして安國寺が専ら奔走斡旋してゐる間に、まさに晴天の霹靂ともいふべき大珍事が京都に於て勃發したのであつた。

それは六月三日の夕方であつた。秀吉の陣中に一人胡散な飛脚が紛れ込んで來

た。もとより嚴重に警戒してゐる陣中のことゝて、早速その者を捕へて筑前守の本陣へ拉れて來た。

秀吉は堀尾茂助をしてその飛脚を糺問せしめたが、彼は堅く口を緘して何事もいはぬ。着物を剥いで裸體にしてみたが、懷中にも何處にも所持してゐるものもない。それで今度は着物の襟を解いてみると、果してそこに一通の書狀を隠してゐた。茂助はそれを取つて黙つて秀吉に渡した。それは明智光秀から毛利家に届ける密書であつた。

書中には光秀こと此度京都本能寺に於て織田右府を滅ぼしたるゆゑ、近日中、當方より秀吉征伐の爲に下向いたすべし、然る上は貴家と心を合せて羽柴筑前守を挾撃したいといふ意味のことが書いてあつた。

秀吉はそれを見て、心中非常に驚き、その手紙を默讀し了り、そのまゝ黙つて暫らく眼をつむつてゐた。

「茂助！」と一口呼んだ。

「はい。」と、茂助は顔を上げて秀吉の顔色を窺つた。

「神子田と仙石の兩人にいひ附け、其奴を遠くへ連れ出して片付けてしまへ。」

と云つて又口を堅く閉ぢてしまひ、そのまゝ何やら深い物思ひに沈んでゐた。

堀尾吉晴には密書中のことは分らう筈もなかつたが、必ず秘密の大事に相違ないと思つたので、秀吉の命のまゝに神子田と仙石を呼んで、その飛脚を後手に縛り陣外に連れ出してしまつた。それは藤田傳八郎といふ者で、その頃、足の速いので名高い男であつた。

光秀は、六月二日の早曉本能寺に於ていよ／＼宿望を遂げて、主君信長を弑すると同時に當時疾脚鬼との評判を取つてゐた件の藤田傳八郎に意を含めて、中國の毛利家に走らしたのであつた。彼は走ることはなるほど疾かつたが、中國路の本街道を遮斷して、東西の往還に警戒の網を張つてゐる秀吉の部下の陣所を無事に通過する事が出来なかつたのである。

すると、陣中では、飛脚が一人斬り棄てられたと誰れいふことなく、あの書狀に

はどういふことが書いてあつたのだらうと、とり／＼に評判した。

或は、京都に何か異變があつたのではあるまいかといふ者もあり、いや、これは、織田右大臣殿に御事があつたのかも知れぬと、いろ／＼に取沙汰してゐるところへ又同じ三日の夜の子の刻頃に至つて飛脚が入つた。

それは京都に居る長谷川刑部卿宗仁からの使者であつた。長谷川宗仁といふ者は筑前守は、かねて昵懇にしてゐた。それゆゑ秀吉が、西國出陣の時にも京都の出来ごとは細大洩らさず、その都度中國の方へ知らせてくれるやうに頼んで置いたのであつた。もとより宗仁は見識のある人物であつたから、秀吉の前途を察して、この人間と親交を結んで置くことは自分の爲めにも好からうと思つてゐた。その宗仁は、本能寺異變の時にも、信長の旅館に伺候して丁度そこへ居合はしたのであつたが、事が起ると逸早く本能寺を遁れ出て、直ちに中國の秀吉の方へ飛脚を差し立てた。ところが、宗仁は光秀の如く高金を拂つて脚の早い男を雇ふことは出来なかつたが、毎時中國路へは使ひに往き馴れた小者を使者とした。



その男は長い道中を、折柄暑さの時分とて、疲れて、光秀の使者藤田傳八郎より遙かに遅れて到着したのであつた。けれども、此の方は、もう數度筑前守の陣中へ下りなれてゐるので、秀吉の陣中の者とは顔も知つてゐたが、陣中の作法であるから、飛脚が到着すると、警固の侍ばら／＼と八方から犇々と取巻いて、

「何者なるぞ。」と、先づ聲を掛けた。

「京都、長谷川刑部卿よりの使者でござる。」

「書狀か、口狀か。」

「書狀もあれば、口狀もござる。」

よつて、毎時のごとく淺野彌兵衛長政がそれを丹羽長秀の陣に召連れて行く。

それから秀吉の本陣に連れて行き、書狀を受取つて筑前守の前に置いた。

筑前守は、その書狀を靜かに默讀しをはると、近侍の者に命じて早速黄金十兩を慰勞として與へた。

それから加藤虎之助を呼んで、その飛脚を蛙ヶ鼻の本陣から三里ばかり東に離

れてゐる岡山の先まで連れ出して、そこから京都へ立ち歸らしめた。それ故秀吉の陣中の者共、長谷川の使者が齎らした密書の内容が何事であつたか、知る者はなかつた。

けれども、事は包むより顯はるゝはなしの例、陣中には誰がいふとなく、京都で明智光秀が謀叛を起し、信長公を弑しまゐらせたとはいひ、或は安土の城を燒かれて信長、信忠の御親子兩公とも燒死あつたなどいひそ／＼噂をする者があ

る。これは甚しく陣中の士氣に關する事であるから淺野彌兵衛はそれを憂慮して、筑前守にそのよしを告げると、筑前守は打ちうなづき、

「うゝ、さうか、さうであらう。」と、それから淺野を本陣の留守に残して置き、蜂須賀小六、黒田官兵衛の兩人を先に立たせ、その次に例の金の瓢箪の大馬印を先に押立て、秀吉自身はたゞ越後上布の帷子に一重帯をして、朱塗りの鞆の大脇差し、來國次の二尺三寸ばかりのを一腰さした、極めて身輕な裝ひ、飽くまでも

悠然として、波々と水を湛へた土手の上を打ちめぐり、さも長閑に歩いてゆく體は常にも倍していと晴れやかである。折りしもその日は快晴で、土手の土さへ裂けるやうな炎天であつたが、筑前守はその暑さにも構はず、立ち竝ぶ部將の陣屋々々の前に立ち止まり、

「どうだ。水は今朝よりどれほど増したやうか。随分念入れ、ゆめ／＼油断をするなよ。追付け右大臣家に於ても御出馬あるぞ。但し今は早やあのことほり水も城の上に上り居れば、いかに清水長左衛門、武勇にすぐれたりとも溺死には間もあるまい。さてその上にて廂山に陣取つてをる毛利兩川の勢を攻め、斬り散らし、足ついでに安藝の嚴島へ參詣し、周防長門までも仕置きして、織田殿の御先祖のある阿彌陀寺へも御參詣あらせられようぞ。その時は、いづれも長々在陣の鬱散に萩碗にて薄茶を立て、服のませるぞ。それも、もう遠くない内のことぢや。」

と、士卒の勞苦を勞ねがひながら、事も無げに巡見した。

秀吉の、この快潤な調子を見た者共は、これでは、昨夜からの上方に異變のあ

つた風説は全くの風説に過ぎなかつたのであらう。もしその噂が、眞實ならば筑前守殿があんなに悠々然と打ち寛ろいで居られよう筈がない。さうだ／＼。と又氣を取り直して一同思はず、どつと歡聲を上げた。その聲は漫々たる湛水にも響いて、浪を揺るがすばかりであつた。

筑前守は、そんなにして長い堤を巡りまはつて又本陣に歸つて來た。そこへ丁度毛利の方から三度目の使者福原と安國寺とがやつてきた。

使者は先づ淺野彌兵衛に面會して、然らば愈和睦の御約束を定め申したい。ついでにもし人質にても御所望とあれば何人にも差出し申すべしと辭を低くしていふ。彌兵衛長政がそれを取次ぐと、筑前守は、

「さうか、會はう。其者共を此方へ通せ。」

軍門の兩脇には、蜂須賀、黒田、堀尾、大谷、神子田、仙石その他の面々膝を竝べ、袖をつらねて控へてゐる。本陣の正面には、筑前守、常より悠然として敷皮の上に坐し、太刀も弓矢も身に添へず、例の朱鞘の國次の一刀を腰に帯びてゐる

るのみである。左右には藤堂、脇坂、糟谷、加藤、福島、片桐、平野なんどの直參の侍が、いづれも遙に居流れてゐる。

やがて毛利の使者兩人は淺野彌兵衛に案内せられて入つて來た。彌兵衛より改めて、

「福原越後守、安國寺惠瓊兩人、毛利の使者として參着いたし候。」

と、披露に及ぶと、福原越後守 畏りて、

「主人小早川隆景、吉川元春よりかく申し上げよと申付けて候。兼ねて申し上げしとほり右大臣殿と毛利の者共とは、元より遺恨あるべき様も無之、弓箭を交ゆる因縁とても無之候處鞆の津なる足利將軍家伺候の面々、兎角の評判申すにより、遂に本意なくも今日の對陣に及びて候へども、民の爲め、國の爲め、無用の費え多くして益なく、まことに遺憾の次第に存じ候ゆゑ、先達つてより御諚の如く、境界を定め、行末永く、織田、毛利兩家の間に御好みを結び、一日も早く天下萬民の安樂を達成いたさばやと、主人一同の希望いたす所にございますれば、何卒

御和睦の約束御取定め願ひたうぞんじまする、それにつきましては、人質の儀御所望あらせらるゝに於いては何人たりとも申聞けられたうございます。」と、述べ了つて福原越後守は、頭を疊につけて筑前守の返答を待った。

筑前守は委細の口上を聽きをはり、

「御兩家の口上具さに承知いたしました。秀吉に於ても元より兩川の衆と親しき間でもなければ従つて又、恨みの種もない。右大臣殿とても、毛利家とは、百里を隔て、東西に在れば、何とて憎怨のゆゑもない。此度弓矢を收め、兵士を休息せしめ、百姓、町人に安居樂業の道を與へられたいこの思召し、秀吉寸分疑ひ申さぬ。」

と云つて少し言葉を休めた。が、やがて、

「いかにせん。右府幕下には去る二日の曉、京都本能寺の旅館に於て信忠殿御親子諸共、明智日向の爲に敢へなく御生害遊ばされた。」

と云ひながら、筑前守は満座の中をも臆せず、はらくと落涙して、男泣き

に泣いた。

始めてそれを聞いた満座の者共、一同たゞ驚き呆れて、あつこの聲を發する者もなかつた。陣營の中は暫らく水を浴びせられたやうな不思議の沈黙に鎖された。

毛利の使者福原越後と安國寺惠瓊とは顔をも上げ得ず、一層疊に頭を近づけながら、たゞ平伏してゐた。

やゝあつて筑前守は涙をおさめ、

「聞かるゝ通りの次第ぢや。かねて、京都へ言上し、右大臣殿の御氣色によりて和平を定めたいと存じて居つたが、右大臣殿既にかくなり給うては最早御旨を伺ふことも叶はぬ。去りて御兩家との和平を破り、各々所領の民草を、尙この上にも苦しめることは固より秀吉の本意でない。……秀吉はともかくも是より直ちに上方に引返し、明智を討つて右大臣殿の御無念を黄泉の下に晴らす所存ぢや。……但し兩川の心には、筑前上方に引返すか、それを軍機逸す可からずと、それ

がしの後を慕うて追ひ討ちにはなされまいと存するが、田舎武士、弓矢の法を辨へねば、この由、罷り歸りて、有りのまゝに兩川に申傳へられたい。その上にて尙筑前と和睦を取結ばれようとならば、秀吉に於ても御相談に預かり申す。」と云つて、又はらゝと涙を流した。

秀吉の胸の透くやうな言葉と、その度胸の好きには、越後守も安國寺もすつかり頭から吞まれてしまつた。敵の使者に、それほど大事を隠さず開放して、その上で、尙和睦もしよう。又、一旦和議の進んだ話を破つて、再び弓矢を交へようといふなら、それも否とは言はぬ。しかも、吾々毛利の者を田舎武士と侮る大膽不敵。越後守は背に汗を浴びる氣がして思はず顔を上げると、筑前守の眼光、宛から稻妻の如く二人の方を射てゐる。越後守も安國寺も、何となく恐ろしくなつて唯々平伏しながら、

「畏まりました。只今の御言葉、委細主人に申し傳へましたる上に、重ねて參上致しまする。」

と、おそろしく、羽柴の陣門を退出して、又、毛利の陣へ引返した。

ところで驚いたのは、越後守と安國寺ばかりではない。味方の部將達であつた。浅野彌兵衛をはじめ、そこに並居る面々悉く膽を潰し、かゝる大事變を、今まで吾々にはお隠しありながら、敵方の者共へ先づ打明けられたるは、近頃御無念の至りであるといつて啣ちた。

すると、秀吉がいふに、

「いや／＼今までは右大臣殿の御心中を氣がねて、存分の戦も出来なんだが、これからは筑前が思ふまゝの戦ひをして見せるぞ。大分世の中が面白うなり居つたわい。……鬱晴らした。酒を持って。」

と云つて、酒樽を引寄せ、大盃に波々と湛へさせて、大酒盃に五杯つゞけさまに飲み乾して、そのまゝ横になり、高野でぐうぐうと眠つてしまつた。

それを見て、羽柴の陣中三萬八千の人数悉く、今更に秀吉の度胸の好いに呆れてしまひ、陣中些の動搖する氣色もなかつた。

福原越後と安國寺惠瓊とは、秀吉から始めて信長の自害を聞き知つて、一旦は喜んだが、さて不可解なるは秀吉の胸中である。どうしても凡人の企て及ぶ度胸ではないと舌を捲いて驚きながら、毛利の陣に歸つて、秀吉のいつたとほりをそのまゝ輝元をはじめ小早川、吉川の兩川に言上すると、隆景も元春も同じく秀吉の竹を割つたやうな宏涼とした度胸に魅せられてしまつた。

そして結局、その調子では、信長亡き後の天下を統ぶる者は必ず筑前守に疑ひあるまいといふことになつた。

たゞ吉川元春は、少し違つた意見もあつたが、小早川隆景の眼識は更に一段優れて時勢の動向を遠觀してゐた。元春も強ひて隆景と争はなかつた。結局滞りなく和議を結ぶことになつた。

それで毛利家では、信長公御生害ありたる今日とても、和睦の議は従前通り聊かも異議あるまじき旨を申し入れ、更に、筑前守上方へ馳せ上り、主公の仇を報ぜらるゝならば、當家よりも加勢として一手の軍勢を差添へ申すべしと相談一決

して、越後守と安國寺は重ねて使者に立つた。秀吉はその時、毛利家の高義を心から感謝したのであつた。それで和睦の條件どほり清水宗治の船中の自害が滞りなくすむのを待つて、早速命令を傳へて高松城の湛水を切つて落し、待つ間もなく直ちに軍を引揚げて強行軍で一指上方へ、上方へと馳せのぼつた。

## 太閤歿後の風雲

(關ヶ原の前夜)

去年の八月太閤が薨じた時の遺言に従ひ、秀頼は、加賀大納言前田利家に擁せられて、翌慶長四年の正月十日、伏見の城から大阪城に移り、そこで諸大名の新年の賀詞を受けた。秀頼は、明けて、やうやく數へ歳七歳であつた。

太閤の遺言には、自分の亡き後は、徳川家康をして、秀頼が自分で政務を執ることの出来る年齢に達するまでは、太閤になり代つて天下の政治の仕置をし、秀頼は、前田利家の手で、大阪城に移つて、傳育せしめようといふ意思であつた。そこで、利家は、太閤の遺命を守つて、少しも早く大阪城へ秀頼を移さうとしたが、どういふ譯であつたか、よく分らぬが、家康は、それに反対した。家康のことだから、何か深慮があつたものであらう。又、それと異つた意味からだらうと思ふが、御母公の淀殿も、秀頼を大阪に移すことは反対を唱へたが、剛直な前田利家は、どこまでも太閤の遺命一天張りて秀頼を大阪に移したのであつた。

家康はその時二晩ばかり片桐市正の邸に泊ると、十二日には、もう、向うを立つて伏見に歸つて來た。

それから、十日も立たぬ十九日の晩のことであつた。その日、家康は、かねて  
 呢懇の間である有馬法印の邸に猿樂の催しに招かれて、数々の饗應をうけ、終日  
 遊興に暮してゐた。日頃、法印と親しくしてゐる大名、小名も招伴されてゐた。  
 家康の來駕を得た主人の法印の悦びは格別で、書院の奥の間に屏風を立てまはし  
 て、そこに家康の座を設け、下にも置かぬ歡待ぶりである。法印の心づくしに、  
 家康は、舞曲の笛、鼓まで氣に入つたといつて、この外なる満足であつた。  
 すると、やがて黄昏時に及んで、家康の家人伊井直政が、事ありさうに急いで  
 來て、主君の近くに寄り、側の人を拂つて、何かしら、少時密談をしてゐたが、  
 間もなく直政は、猿樂をも觀ずに歸つてしまつた。家康もそれから間もなく歸館  
 した。それは、後になつて知れたことであつたが、その日、大阪から急に藤堂高  
 虎が馳せ上つて來て、家康の邸を訪ね、彼地の切迫した情勢について告げたこ  
 ろがあつたからだ。

家康が歸館してみると、高虎は緊張した顔をして、彼の歸るのを待つてゐた。

「佐渡守ごのには、わざく御苦勞でござつた」

家康は落着いた態度で、高虎をねぎらうた。

「井伊兵部より、事の大局は、おん聽き取りになつたことゝぞんじまするが、大  
 阪表に於て、近頃、穩かならぬ謀計をいたす者ども有之趣でござる」

「治部少輔殿の小智さかしらごとでござらう」

高虎の緊張した顔色に似ず、家康は相變らず落着いてゐる。

高虎は肯づきつゝ、

「勿論、彼奴が發頭の一人たるには相違ござらぬが、加賀大納言を初め、毛利、  
 浮田、上杉の四大老も悉く奉行方の申條に同心の趣確聞いたした。二三日前の  
 夜、加賀殿の館において、それ等の老中、奉行密談をこげ、近日御當家に使者を  
 差向け、故太閤の御遺命に背きし條々について、嚴談いたすべしとの専ら取沙汰  
 でござる。仕儀によつては、そのため、意外の珍事にならうやも測り難い。萬一  
 さある場合には、佐渡が一家の存亡はもとより、御當家と御運を共にする覺悟で



ござる

高虎は氣負うていつた。

家康は、それを始終沈黙して聽いて居つたが、意味の解らぬ微笑を、かすかに顔に浮べながら、

「そこ許、だん／＼の御懇志 家康身にとりて辱うぞんじ申す。したが、加賀大納言には、餘程立腹と思はれる」

と、いつたきり、もう、その事については、それ以上に深く訊かうともせず、自分の方からも、あんまりいはなかつた。家康は、若い時代からの癖で、何事によらず、家人などが、火急な事件を申上げると、その瞬間は、ひどく駭くが少時すると、又元のとほりの靜かな面色にかへるといふ風であつた。が、その時は、どういふ譯であつたか、藤堂から、そんな話を聽いても、初から一向氣色の變る様子も見えなかつた。

そして座側に侍する井伊直政を顧みて、

「佐渡守殿は、われ等と多年昵懇の間ぢや。そちも遠慮をするには及ばぬ。さあ、いづれも平にござれ」

といつて、機嫌好ささうに、平常のとほりの氣持ちで、今日有馬法印の邸で觀て來た猿樂の話などに時を移した。

高虎も舞曲は好むところなので、話しかけられるまゝに、内府の對手はしてゐたが、大阪表の密謀のことが、絶えず氣にかゝつてゐて、舞樂の話はただ受け返答をしてゐるだけであつた。

大阪に居る四大老と奉行等が、この間中から、密々謀議を凝らしてゐたといふのは、かういふ理由からであつた。

故太閤殿下の死肉はいまだ冷かならぬ今日、天下の政務をあづかる家康の行爲に、甚だしく太閤の遺命に背く、專横の沙汰が多いといふのである。然らば家康の專横とは、何を指していふのであるか、去年の八月十八日、太閤が歿した直後

から家康に、とかく傍若無人の振舞ひが多かつたことは、平素、徳川に對して反感を抱いてゐる諸大名の胸には、事毎に穩かならぬ感じを與へてゐたのであつたが、就中太閤殿下が、生前に規定して、堅く諸大名に披露しておいた、重要な法度の一つであつた所の私婚の禁制を、天下處置の、重責に任する家康自身が破壊したといふのである。

「諸大名縁組之儀、御意（太閤の）を以て、可相定事」とは、既に去ぬる文祿四年八月二日を以て、家康、前田利家等連署の上で發布せられた太閤の法度であつた。それは、太閤亡き後といへども遵守すべきものであることは、去年八月太閤の死床にあつて新に家康等によつて交換された誓紙によつて保證せられてゐたものであつた。家康は自から、それを蹂躪したのである。家康の私婚とは何であるか。それは、伊達政宗の女を、家康の第六子忠輝の妻にした。甥松平康成の女を養女にして、それを福島正則の子正之に嫁せしめた。又自分の外戚の曾孫女である小笠原秀政の女を養うて、蜂須賀家政の子の至鎮に嫁する約束をしたのであ

る。蜂須賀といひ、福島といひ、いづれも、秀吉の出世時代から、豊臣氏とは最も因縁の深い関係の家筋であつた。それが、太閤の死後半歳も立たぬ間に、故主君の御法度を、家康とともに犯したのであるから、大老や奉行等の間に物議を醸したのは當然であつた。

大老といふのは、こゝに更めていふまでもないことだが、家康、利家、毛利輝元、上杉景勝、浮田秀家の五人であつた。天下の大事は、この五人によつて決することにした。又五奉行とは淺野長政、前田玄以、石田三成、増田長盛、長束正家であつた。小さい政務はこの五人で執行した。太閤は、自分の死後等々の五大老、五奉行をして互に相牽制しつゝ政治を行はしめようといふ腹であつた。そして、萬一この兩者の間が圓滑を缺くやうなことがあつた場合のことを慮つて、別に中老といふものを置いた。即ち中村一氏、生駒親正、堀尾吉晴の三人である。中老は、大老と奉行との意見の扞格などあつた時に専ら居中調停の任に當るのであつた。

秀吉の晩年の、諸大名の間の情勢からして、彼が寂滅の後には、天下の政權が、實力と聲望の上からして、家康の手に歸すべきことは、殆ど萬人の認めるところであつた。その形勢が歴然たるだけ、家康反對派の焦心苦慮は甚だしかつた。石田三成がその渦巻きの中心點であつたことはいふまでもない。

それで、今度、家康をはじめ、伊達政宗だの、蜂須賀家政、福島正則等が、故太閤の掟を破壊したことについては、家康以外の四大老、及び奉行等が言ひ合はしたやうに、これは怪しからぬことであると思つたにちがひない。しかし、事が單に太閤の御法度を破つただけに止まれば、格別のこともないわけであるが、平然として法度を破るといふことの奥に、家康反對派にとつては、これは、どうしても棄て、置けないものがあつた。そこで大阪に於ける四大老、五奉行等は相議して、伏見の家康に向けて、御法度破壊の詰問を發することになつたのである。中にも太閤から最も信頼せられて、その死後遺孤を托されたる前田利家は、正直一圖に秀吉の遺命を嚴守することを以て自己の責任と心得てゐるところから、家

康の行爲には、言語同斷の不快を感じたのである。彼は、もし、その爲に、家康に異心あらば、直に軍勢を淀、橋本の方面に繰出して、潔く決戦することを辭さないといふ氣込んだ。さういふ次第で京阪間の物情は恟々として來た。

太閤歿後の大名中の長老は、いふまでもなく家康と利家であつたが、この二人は、石高に於いて、大變な懸隔があつた。家康は關東八州の地において、貳百五十萬石を領してゐた。然るに利家は加賀、能登、越中において七拾七萬石を領するに過ぎなかつた。その領土の大小は直ちに勢力の強弱であることはいふまでもない。利家は家康の勢の三分の一にも及ばなかつた。が、その徳望においては、必ずしも家康に劣るものではなかつた。どちらにしても、家康に對抗しうる者を求むれば利家を置いて他にない。しかし、前田と徳川とは、秀吉の生前から互に反目する仲ではなかつた。ところが太閤歿後の政局の情勢から見ても、結局は天下の政權が徳川に歸するに相違ないと見て取つた、反徳川黨の主腦たる石田三成と

増田長盛とは、この際徳川に拮抗しうる勢力は何といつても前田であるから、前田を押し立て、徳川を討滅しなければ豊臣の天下は長久を期することは出来な  
い。それには、前田と徳川の兩家の間が無事であつては事は成就せぬ。兩家をし  
て相争はしめなければならぬ。三成と長盛とは、こゝに深く相約して、兩家を離  
間するやうに策謀した。

それは、太閤が死んでからまだ、間もない時分のことであつた。長盛は家康の  
處に屢々出入して、彼の歡心を買ふにつとめた。三成は利家に媚を賣つた。そし  
て三成は機を見て、利家に勧めて、家康との親善を厚うするために、一日家康を  
招いて饗宴することに話を進めた。その日になつて、家康は、利家の邸に向はう  
とすると、長盛は、今日の饗宴にもし不慮の事があつてはならぬから、御謝絶あ  
つて然るべう存すると、まことしやかに止めた。そこで家康は、急に加減が悪い  
といふ理由を以て、前田の方に謝絶の使を出した。利家はそれがために、ひどく  
恥辱されたやうに思つた。それから暫く經つて又長盛は利家に會つて、先日のご

とは、あの時偶々不穩な飛語を耳にしたところから、あんな失禮なことになつた  
次第であるが、内大臣には、ひどく、その風説に迷はされたことを、今では悔い  
て居られるやうです。も一度改めてお招待になつたならば、内府は必ずや悦んで  
御饗應にあづかられるに相違ござらぬと進言した。そこで利家も、なるほどさう  
かと思つて、十二月の吉日を卜し、家康を案内することにした。いよいよ當日に  
なつた。すると長盛はまた家康の處にいつて、決して、利家の宴に行つてはなら  
ぬ、いかなる密計があるかも知れぬと諫止した。けれども、家康は二度それを聽  
かなかつた。やがて刻限になつたので館を出ようとしてゐると、長盛はやゝ面の  
色を變へて入つて來た。そしていふに、既に事態は急である、密書を袖の中か  
ら、とり出して家康に示した。それを見て、家康もなるほど、うなづき又々途  
中から引返して戻つた。

驚き且つ憤つたのは、事情を知らない利家である。一度ならず二度までも家康  
に侮辱せられた彼は何としてこの無念を晴らしたらいかと思つて焦燥した。誰

れかに向つて堪へ難い胸中の鬱結を吐露し盡さなければ、静としてはゐられなかつた。さういふ場合に衷情を打明かすに好く聽いてくれる者は細川忠興であつた。忠興の長子忠輝の妻は、利家の第六子千世姫であつた。さういふ姻戚の關係から、忠興と利家とは最も打ち解けた仲であつた。そこで彼は忠興を呼んで聽いてもらつた。

「いや、もう、かう年をとつたら、いゝ加減な時分に引込んで隠居した方がいゝ。俺は今度といふ今度は、徳川殿に非道い赤恥を搔かされた。何であゝいふことをせらるゝか、頼と内府の腹が解らぬ。利長や利政にも既に言ひ渡したところや。俺は近日公儀に御暇を願うて國に歸つて隠居することに決心した。」

利家は堅い決意を面に表はしていつた。  
忠興は思慮深さうに、大納言のいふことを凝乎と聽いてゐたが、利家の言葉の切れるのを待つて、

「その御立腹は、それがしとても、至極御尤もにぞんじ申すが、餘人ならば知ら

ぬこと、あの物熟れた江戸内府に、譯なうして左様な如才のあらう道理はござらぬ。それには何か仔細がなうては叶ふまいとぞんじ申す」

「なら、その仔細といふは何ぢや、そこ許ご存知あるか」

「いや、それがし、その仔細を、よく存知居ることは明言いたしかねますが、近ごろ少し思ひ當るところもござれば、ひたすらにその事を以て、内府公が大納言殿に他意ありてのことゝ思召さるゝは、ちと御思ひちがへかと存じまする」

「さうであらうか……ぢやが、俺は、太閤歿せられてから、自分も此の頃、めつきり年をとつたやうな氣がしてならん。太閤とは信長公のお部屋に住んで居つた時分からの戯童友達で、兄弟といつてもないほどの仲ぢやつた。その太閤が亡くなられてから、俺は俄かに世間が面白くなつたぢや。人交はりが厭はしうなつた。俺は利長に世を譲つて隠居するつもりぢや」

「これは又、大納言のお言葉とも覺え申さぬ。さりこては、あまりに御心弱き仰せでござる。世間の事をおん煩ひげに思召さるゝはさる事ながら、たとひ太閤殿

下殺せられましても、昔馴染の淺野彈正殿も無事でおはする。まだくそのくらゐの御年にて左様にお心弱きことを仰せられてはなりませんぬ」

「いや、さうでない。この頃俺は、ずんと身に<sup>つが</sup>悲を覚える」

忠興も、利家が、自分でさういふので、ふと、更めて對手の容姿を見守つた。

なるほどさういへばこの秋頃から、どこもなく大納言の面色に老が加はつたやうな氣がするのであつた。しかし、忠興は、そんな風は色にも現はさず、

「お氣分が優れさせず候てはいけませんぬが、それは、太閤殿下が殺せられるために、幾分おん力落しのせむもござりませう。なれども、今、こかく世間の物情が不安定で居ります最中に、萬一老公がお國元へ御隠居なさるゝなどの事あつては、第一、秀頼公おん守り立ての大役を仰せられたる故殿下の御遺言も空しう相成ることになります。そのところをよく御思案なされませい。世間には、加賀殿は、一身の安穩を思つて托孤の重責を忘れたというて、讒る者もござりませう」

忠興は誠意をこめて諫止した。

利家も、秀頼といふ六尺ろくせきの孤こを托されてゐることに一度び思ひいたると、わが生命にも代へられぬ責任を感ずるのであつた。彼は、黯然として、暫く無言のまゝでゐた。そして後には老眼をしばたゝいて落涙の體であつたが、

「越中守には、よう、その事をいうておくりやつた。老の一徹から太閤の遺命のほどをゆるがせにするところであつた。……あゝ、いやゝゝこの又左衛門の白髪首に代へても秀頼公の無事の成人を圖らねば阿彌陀ヶ峯の遺靈に對して申譯が立たぬ」

さういひをはつて、利家は涙を拂つて、今度は笑つてみせた。

「御意に逆らうたそれがしの御不禮をも咎めず、早速の御納得ありがたうぞんじまする」

それから間もなく年が改まつて、利家は秀頼を擁して大阪城に移つたのであつた。

果然大阪の四大老と、五奉行とは中老の一人生駒一正と、僧承兌の二人を使者として、家康に詰問状を突付けた。それは十三ヶ條の項目を並べて、家康の政道に私心あることを詰つたものであつたが、中心點は私に、伊達、福島、蜂須賀の三家と婚姻を取結んだことであつた。利家は、特に家臣の村井豊後守長頼、奥村伊豫守永福、徳山五兵衛をして、附添はしめた。

使者は伏見の家康の邸に到り、直々に家康に面會した。そこで、僧承兌は、先づ口を切つて、

「去年、太閤殿下御逝去の後といふもの、内府におかれては、とかく萬の行に専横の御處置が多いやうにお見受申す。就中今度諸大名と御縁組の儀は、御先代より堅き御法式のあることにて候を、此方へ何等の御相談もなく、御一人にて御取り極めなされたること、甚だ謂れなうぞんずる。その御返答承はりたい。もし、御申開き相立たざるにおいては、大老奉行十人の衆より、貴殿の御加判おん除き申すべし」

承兌長老は威猛高になつて家康を面詰した。

家康は、それを聴いても顔の筋一つも動かさなかつた。そして、靜かに、使者を見ていつた。

「去年太閤殿下御薨去ありて後、この家康が政道の仕置きに、世を憚からぬ行ひありこのこと。不肖のそれがしの事故、定めし方々のおん氣に添はぬこともあるべし。それ等の事は、なほ重ねて、とくと申承はるでござらうが、此の頃、双方の都合にて約束いたさせたる縁組については、御先代の御法式のありしことを、つい、うつかりしてゐて、忘れ申した。甚だ相濟まぬことながら、失念といふことは、ひとり家康のみならず、何人にもあることござる。何卒平に御宥免ありたい。しかし、それは、ともかく、十人の衆の加判を除くとの仰せなれば、致方もござらぬ。お旨に従ひ家康は早速政務を御辭退して歸國いたすでござらう。が當方より改めてお聽き申したきは、家康をして、秀頼公を輔佐せしめんどの、故太閤殿下の遺命に背くことを四大老、五奉行には遺憾とは存ぜられぬか」

白々しい態度で、あべこべに逆捻ぢを喰はした。使者は、家康に吞まれてしまつた形であつた。彼等は又、福島、伊達、蜂須賀の三家に到つて、天下の御法度を破つたことについて、明答を促した。が、いづれも瓢箪で鯨を抑へるやうな、不得要領の返答であつた。

伊達政宗は使者に向つていつた。

「此度縁組のことは、泉州堺の町人今井宗薫の仲人によつて成立つたことにて、吾等は萬事あの仁に任かせ置きたれば宗薫より夙に公儀へお届けいたし居つたことゝばかり存じ居つた次第でござる。他事と異り折角纏つた縁組の事にてござれば、奉行衆におかれても、その邊のこと、何分よしなにおん取計らひを御願ひ申す」

と、きはめて當り障りのない挨拶である。

福島正則の返答はかうであつた。

「縁組の事は、内府公より、當家に申しかけられたる儀にてはござらぬ。われ等

の存じ寄りにては、秀頼公のおん身の端なるゆゑ、内府と縁邊を結び候はゞ、行々秀頼公のおん爲にも宜しかるべしとて、此方より談合に及びたる次第でござる」

蜂須賀は、徳川内府から仰せ聞けられたので、それを承引したまでとあるといつた。

事態が、そのとほりであつたから、大阪では、内府その他三家の返答いかんによつては、兵火に訴へても罪狀を糺問すべしといふ風説が専ら傳へられて、諸大名の家中、一門に立ち騒ぎ、馬、武具よと犇めいた。

伏見にも、そのことが聞えたから、武家も、町人も騒動した。近日、大阪方と合戦始まらば、どちらに味方すべきかと、いづれも惑ひ迷うた。その中でも、黒田甲斐守長政は、大阪からの使者が、まだ内府の處へ來ぬ前から早く在伏見の諸大名の間を駈け廻つて、徳川方に附くやうに説いた。長政の意見に賛成する連中は多かつた。池田輝政、福島正則、藤堂高虎、細川忠興、淺野長政、幸長、加藤



清正、有馬法印、その他金森、京極悉く徳川派であつた。伊達正宗はいふも更なり、堀秀治、蒲生秀行、田中吉政、最上義光等もその方であつた。是等各々家に軍馬を催して、いざといはゞ直ちに打つて出る用意をしておいて、われ先きにと、内府の館に參集した。

それに對して、奉行方に加擔する者には、浮田秀家、上杉景勝、毛利輝元、佐竹義宣、立花宗茂、小西行長、長曾我部盛親、岩城宣隆その他に秀頼親衛の七組の番頭はんがしらなど居つた。

そして、前田利家の味方であるべき細川忠興、それから加藤清正、加藤嘉明、淺野幸長父子などは、元から前田にも好く、徳川にも好いのでいよく兩家が敵對するに至らば、非常に困惑する立場にあつた。

丁度その物騒ぎの最中、清正等が、家康の邸へ折柄の見舞ひに參向すると、内府は具足を取り出させて、それをつくつく見ながら、これは、先年長久手合戦の砌、太閤に勝つたる具足である。いづれも方、それがしと合戦いたさるゝよし聞

き及ぶ、よつてこの具足を取り出して見て居る次第でござる。といった。

清正は、それに答へて、

「御前を相手にいたして、何とて合戦を思ひ立ち候者がござりませうや」といつたど、傳へられてゐる。

家康は、もう、かねてから、大阪の物音を聞知してゐて、伏見に番代りの面々その他關東の家人に、急ぎ上るべきよしを下知しておいた。彼は、何時にても、もし向うから仕掛けて來るならば利家はじめ四大老、五奉行等と合戦を辭さない決心をしてゐた。彼は、いよく大事が始まつたならば、京の東寺を本營にする豫定であつた。今にも、京阪の間に火蓋は切られんとした。

秀吉は生前から、豫め今日の事あるを思つてゐた。その時のための調停役として三中老を特設しておいたのであつた。五大老、五奉行の間に、たとひ、爭論の事ありとも、生駒雅樂頭、中村式部少輔、堀尾帶刀の三人にて和議取計るべしといふのが太閤の言ひ置きであつた。三人の中でも、堀尾は特に家康と昵懇であつ

たから、彼は、ひどく心配して、双方の仲に立つて、極力和解を勸説した。そこで井伊直政に先づその旨を傳へて、今度縁組異議のこと、徳川殿において、老中、奉行方の申入れを、御承引あるにおいては、その餘のことは、一切さて置き、前々の如く、御和睦あらば、天下の悦び、此の上なかるべし。四大老、五奉行の方は、われ等きつと都合よく取計らひ申すべしと、いつたところ、井伊兵部は、大いに悦んで、此度の事については、内々それがし共より參向申度く存じ居りし折柄、御考慮一段と辱う存する。内府の機嫌については、それがしにおん任せ下され、奉行方の意向いかにもして和睦を調へられ、世の中静かなるやうに、御心を盡されたし、と、いふ返答であつた。

そこで、堀尾は、生駒、中村と帶同して、大老、奉行の宅を歴訪して、先日各々方より仰入れられたる、私に縁組の事、内府に於いて承引ありたり、且つは公儀の御爲といひ、世上の騒動も静めたし、秀頼公の御後見、世の固めせらるゝ事なればいさゝかの事は、棄て置かれ、前々の様に御入魂のおん交りあれかしと、

堀尾、中村、生駒の三人、理を盡して述べたので、四大老、五奉行も、然らばとて、互に誓文を取換すことになつた。しかし、家康の方では、私の縁組みは、公儀の御法度を守ることが承引したといふのも、それは、今後を氣を付けるといふまでのことで、既に婚約したものを破談にするといふ、譯ではなかつた。

四大老と奉行側の誓文は次のとおりである。

#### 敬白起請文前書の事

一、今度縁邊之儀に附而、御理申入候處、早速御同心畏入存候。然上は、向後遺恨無御座候旨、於各忝存候之條前廉不相替、諸事入魂可仕候事。(以下省略)  
之に反して、内府側の誓詞は次の如くいつてゐる。

同じ文句のやうでも、注意して讀んでみると、家康の書いた誓詞と、四大老、五奉行方の誓文とは、いさゝか辭句の相違がある。即ち内府の誓文は次のとおりである。

#### 敬白起請文前書の事

一、今度縁邊之儀に附而、御理之通承、然上者、向後遺恨不存候間、前廉に不  
相替諸事可念入魂事。(以下省略)

四大老、五奉行は、そもく何の爲めに、初から、家康に向つて、今度の縁組  
みの事が、太閤の御法度を蹂躪したといつて、詰問状まで突付けたのであつた  
か。家康は、たゞ誓文の上で、御理の通承はり置くといふまで、既に取極めた  
私婚を取消すとも何ともいつてゐないばかりか、畏入つたといふ風は少しも見え  
てゐない。之に反して、初は脱兎の勢で詰問してかゝつた四大老、五奉行の方で  
却つて「御理申入れ候處早速御同心畏入存候。然る上は、向後遺恨無御座候旨、  
於各忝存候之條」と、家康の方で、こちらの言條に同心してくれたことに畏入つ  
て居つたり、又、それが爲に、今後遺恨に思つてゐないといふのを、各々の連中  
は忝けなく存じて居るといふのである。まるで、家康の面前に出て、べこくお  
辭儀をしてゐるやうなものである。

しかし、ともかくも、さうして堀尾吉晴等の居中調停の勞によつて、和解は難

なく調つたところから、前田利家を除くのほか三大老と、五奉行とは、自分達の  
方から内府の邸に出掛けていつて、家康に對面した。内府は、彼等に向つて、た  
ゞ鷹揚に、

「今から後は、各々方と互に隔心なく申承はるであらう」  
といつたゞけである。

その席上で、三大老と五奉行とは、言葉をそろへて家康に向つて、加賀大納言  
殿折柄病中の事にてあれば、今度一同と、伏見に參向相成り難し、願くば、内府  
公において、大阪へ御下向ありて、利家郷に御對面ありたしと勸めた。

すると内府公は、黙つて、大老、奉行等のいふことを聞いてゐたが、結局、  
「左様、仰せのとほりいたさう」とのみ返答した。

そして、さういつたゞけで、どう思つたものか大阪へ行くことは、そのままに  
して置いた。それを石田三成はじめ奉行の中には又、含んでゐた。

三大老、五奉行の側では、吾々が、あゝして、家康の館を訪問し、辭を低うし

て和議を結んだのであるのみならず、既にその席に於いて、加賀殿は病中の事ゆゑ、内府の方から、大阪へ下向して、對面あるやう申勧め、内府においても、それを應諾しておきながら、一向大阪へ參向する風も見えぬのを、不快に思つてゐる。それに引換へ、又、徳川方の方では、加賀大納言には、まだ寝つきりに寝てしまふといふほどの病體とも聞かぬに、誓約の後、つひに伏見の徳川邸に來ぬといふのはどうしたものか。秀家、輝元、景勝の三大老も、いづれ加賀殿と心を合はする人々のことであるから、内府に對して依然、心の奥底では解けてゐる筈もない。これでは、先日の折角の互の誓約もまた空しくなるであらうと、諸大小名の間では、とかくの噂が止まなかつた。固より家康もその事には不安を抱いてゐた。

さういふ形勢について、最も心配したのは細川忠興であつた。忠興は既にいつたとほり前田利家とは姻戚の關係がある上に家康に對しても深い情誼があつた。どうしても、このまゝ打ち棄て、置いた時には、前田と徳川とが相闘争する日が

來るのは眼に見えてゐる。これは今の内に早く双方を心から和解させなければならぬ。忠興は、父の利家を動かすには、その子の利長から説くのが、最も好いと思つた。先日、堀尾吉晴等が双方の和平を取計らつた時にも、忠興は蔭に廻はつて、利長に説いて父の利家の心を和げ、誓文に署名することを勧めたのであつた。

忠興が利長に説いた主意は大體かういふことであつた。

大納言殿には、この頃専ら石田治部をおん近寄せになり、ややともすれば、彼の甘言に乗ぜらるゝ憂ひなきにあらず。治部の逆意を抱いてゐるは、昨日今日のことにては候はぬ。たゞ内府を害はんが爲に、しばらく亞相の力を借る所存である。一旦その目的を達したる曉には、更に大納言家を無きものにせんとする底意を藏してゐることは、火を見るよりも明かである。且つや、父公には、近頃老病に臥してござるゆゑ、その餘年のないことを幸にして、たゞ一時の便宜のため、假りに亞相を推戴してゐるに止まる。彼治部にして、萬一志を得なば、次は

禍害<sup>わざはひ</sup> 立<sup>た</sup>るに加賀殿に迫らんこと必定である。固より内府の智勇は、百の治部ありといへども匹敵するところではござらぬが、此の際天下の御爲を慮れば、一日も早く内府公と亞相とが隔意なき和親を取り交はされやう、御邊より父公へお説き勧めあるが肝要でござる。先達つて、奉行等伏見に於いて内府公に御對面の砌、内府公、大阪へ越すべしと宣ひながら、今日に至るまで尙ほ大納言に御對面なきは、内府公にも似げなき禮儀とぞんすれども、それは、一つには、御邊御父子の御心中を、やゝ覺束なく思はれての事あるべしと推察いたす。されば、御父公に於いて、御老體にも甚だ御大儀とはぞんすれども、先づ御自身の方から、伏見へ御越しありて、内府へ親しく御對面あらば、内府も亦、心解けて、自然大阪へ下向せらるべし。たゞ、ひたすらに、奉行中の申す所をのみ、用ひ給ふは、御思慮のほどとも覺え申さぬ。

忠興は、利長に向つて説いたばかりでなく、前田家の家老神谷信濃、片山伯耆、徳山五兵衛を呼んで、これ等にも篤と旨趣をいひ含めて、父利家亞相の意を

動かさうとした。

利長は固より忠興と同じ意見であつたから、早速父利家の處にいつて、伏見へ行くことを勧めた。ところが、彼は頑として應じなかつた。

「なに、越中が、俺に、伏見の内府の處へいつて、對面せいといふのか。そちまでも、同じやうに、勧めるとは心得ぬことぢや。そも、この度の事は、内府から和談を申入れられたのぢや。然らば、向ふから、こちらへ來て、禮儀を述べられるが本當ではないか。しかし、先は高官の人であるからといふので、先日、老中、奉行の方より、彼宅<sup>あつち</sup>に至つて、和談あつた。されども俺は病中といひ、老人でもあり、こちらから頭を下げて伏見へ上る必要はない」

大納言は件の利長に向つて立腹の態でさういつた。

利家は、重厚で、然諾を重んじ、正義を守る人であつた。秀吉が、遺孤を彼に託したのは、當然の事であつた。彼は、子の利長から、天下の形勢と、自家一身の利害とを説いて、此の際徳川氏に楯を突くのは、決して家運の長久を謀る所以

でない、懇々聽かされたが、青年時代から無二の親友であつた、故太閤の依託の重責を思ふと、自身一家の利害よりも、豊臣氏の爲に、容易に家康に對して頭を下げることを潔しとしなかつた。

この老爺の鐵石心の容易に動かし難いことを見て取つた子の利長は、更に忠興の他に、加藤清正、淺野幸長等に相談して、助言を乞うた。彼等はそこで、利長とともに、再三利家の處にいつて、百方利害を懇説して、此の際拵げて、伏見に行くことを勧めた。彼等の意見に従へば、今、利家が、一家の運命を賭して大阪の奉行等の甘言に乗じ、家康に敵對し、事を起し、幸にして、首尾よく家康を倒すことを得たとしても、それと同じ運命は直ちに又、前田家にも、めぐつて來る。大阪の奉行等は前田をも徳川と同じく亡きものにしようと思ふのだ。況んや、今日、天下の形勢を觀察するに、とても徳川を倒すことは不可能である。さうなつた場合に敗者として、最も慘憺たる犠牲者は前田家であることは言ふを待たない、いづれにしても、太閤殿下の歿後、いまは半歳を出でざるに兵亂

を醸すやうの事があつては、故殿下の遺命を如何にせん。秀頼公の幼弱を思うたならば、今は、どんな不満があらうとも、凝乎と堪忍して居らねばならぬ時である。又さうして、天下の無事太平を計るのが、一家の爲めでもあるといふのである。

それで、利家も爲方なく、

「それほどにおいやるなら、老いては子に従へといふこともあれば、そちの意にまかせて、ともかくも致さう」

といふことになつた。

よつて、忠興は直ちにその事を伏見の家康の方へ傳へた。家康は、自分の方から行かないで、利家の方から先づ來訪するといふのであるから、無論不満を唱へる筈もない。快よく承諾の旨を答へた。

又、前田の方では、利家に、その事まで相談はしなかつたらうが、利長の一存で、父に先立つて自分、伏見に家康を訪うて、近日父利家が伺候する旨を申入れ

た。家康は、それで、殊の外悦んで、

「われ等は、もとより、御父大納言殿に、おん恨みのあらう筈もござらぬ。何分よろしきやう、肥前殿（利長）にて取計らうておくりやれ」

と、親しい言葉で打解けた。

結局、五大老の中、たうとう利家までが、その一人の家康に讓歩したのだ。

さて、いよいよ病氣中の前田利家は、疾つまひを乗輿のりものに托して、伏見に徳川家康を訪問することになつた。二月二十九日大阪から川舟で淀川を溯つた。長子利長も同行しようといつたが、利家は叱つて、大阪に留守をせしめた。その時利家のいつたことは、かうであつた。

「太閤殿下の御意に、秀頼の事は、とかく大納言の一存に任すと仰せられ、今はの際に、おん寢褥ねどころに起上らせられて、俺わしの手をおん取りなされ、奉行衆の、蹲踞つくはひ居る所で、此の手を御戴おんかきなされ、亡き後の事を御頼みなされ、繰返しくりか

へし仰せられたこと、生きて居る間は、申すまでもない。自分死んだ後までも決して忘るまいと堅く心に留めてゐるゆゑ、先の知れたこの年で、内府と争うて天下を騒がしては、秀頼公の御爲にならぬと存じ、何事をも堪へて、内府を訪ふのぢや。内府は、きつと俺を斬るであらう。内府に斬られてゆくのは、即ち太閤様に斬られるのぢやと思つて居る。その覺悟ぢや、今度、家康が利家を斬らぬことは、百の一つぢや。その時は人數を揃へておき、直ちに弔合戦して、勝利を得て候へ」

と、高たかかに言つて、正宗の腰の物を、すらりと抜き放して、つくぐ眺め、

「内府に對面して、いざ事あらば、この一刀にて、當るを幸ひ打つ放してくれ」

と、最後の覺悟を以て、利長に注意した。

利家の坐した舟の中には、細川忠興、加藤清正、淺野幸長の三人が側を離れず話の對手をしてゐた。利家は羽織に袴を着けてゐた。附添ひの者も、殊更に穩かな扮装であつた。

翌朝坐舟が淀に近づいた頃、家康も小舟を漕がして出迎へた。その舟には、家康と利家と、いづれにも入魂の間である有馬法印一人が附添うてゐた。家康は淺黄の上下を着けてゐた。

利家は、家康が淀まで、そんな身輕にしかも鄭重に出迎へたのが一寸意外であつた。彼は坐舟の障子を悉く開け放して、家康と顔を合せた。

「御病中と聽いて居つたに、遙々の御のぼり、家康忝う存じ申す。舟中おん障りもおはさすか」先づ家康の方から聲をかけた。

「これは、お出迎ひ、大儀至極にぞんじ申す」

利家も面を和げて答禮した。

「舟中のおん旅、さぞお疲れにておはさう。一と先づ御自宅におん入りゆるく御休息の上にて、我等の方へおん出でなされい」

「いや／＼、さまで疲れも覚え申さぬ。これより直に貴館へ參り申さう」

「それは、一入添けなうぞんする」

と、家康は、小舟を急がして先きに歸館した。

利家は、それから伏見の徳川の屋敷のすぐ下で舟を上り、直ちに館へ參入した。舟からそこまでは、わづかの距離であつたが、肩輿に乗つた。その途中、加藤、細川、淺野の三人は、徒歩して始終、乗輿の傍に附添うてゐた。

家康は又門外まで出で迎へて、館に請じ入れ、手づから褥を設けて、利家に薦めるといふ歡待ぶりであつた。その饗應は善美を盡したものであつた。家康は、そのために、大阪から、わざ／＼利家の料理人鯉塚なにがしを呼んで、庖厨の手傳させた。

忠興、清正、幸長は、御次の室で、井伊直政、榊原康政、本多正信とともに宴席に侍した。いづれも長袴に短刀といふ、正式の作法であつた。

やがて土器數回の後、利家の寵臣神谷信濃守を召出して、家康の酒盃を與へ、腰の物を贈つたりなどした。利家は、大分豫想と違つた、家康の歡待を受けた氣がしてゐた。



彼は、酒間に機を見て、

「此度、各々同意にて、憚はぶかりの儀を申入れたりしは、少しも私の宿意ありてにはござらぬ。是れ皆、御幼君の御爲を相計るの外、更に他事なき事にて候へば、構へて、御心にお懸け下さるな」

と、言葉和小かにいつた。

「その儀は、我等とても同じこと。もはや御心に懸けらるゝな。……それよりも、御老體を折角御大事になされい」

「忝かたじけなくなうぞんじ申す。我等も、もはや長うは生きられまいとぞんじ居ります」

「はゝゝゝ。そのやうなお心弱いことでは叶はぬ。我等は百歳までも永らへるつもりぢや」

利家は、それで、ふと、家康の様子を又見直して、

「貴殿こそそれがしとは、確かわづかに、五六歳の相違でしかなかったが、そこ許の健康な御身體はつくづく羨ましくぞんするぢやて」

家康は、その時まだ五十七で、元氣一杯であつた。五十七といへば、今日の内閣の大臣の年齢に比べても、老かろい方ではなかつた。利家は六十二歳であつた。これも、今日の政治家の年齢に比べて、まだく老いた方ではなかつた。が、利家の健康はその時もう全く衰へてゐた。一説には、太閤も、利家も、小早川隆景も先年明使沈惟敬が携へて來た靈藥その實毒藥を服して健康を害し、相次いで死んだのだといはれる。すると、家康は笑つて、

「身體は養生が何よりでござる。専ら氣を附けて御養生なされい」

「辱はづかなうぞんじ申す。したが、當御館は、あまりに街路に端近うて、御用心も薄きやうでござる。それゆゑに自然と、怪しき巷説も傳はり申す。いつそ向島に移館なされては、どうぢやな。あちらは用心も好うござる」

向島の邸といふのは、太閤在世の頃、澱江よどがはの向岸に別殿を設けて、折ふしの興を催うした處であつた。

「御注意ありがたうござる。仰せに随ひ、左様いたすでござらう」

そんな對話を交換して饗宴は滞りなく済んだ。暮に及んで利家は辭去した。家康は、子の結城秀康をして河岸まで見送らしめた。

そのことがあつて後、家康は、細川忠興に意を傳へて、利家の病氣見舞ひをかねて、先日の答禮の爲に、大阪へ下向する旨を披露した。その頃には、もう利家の病氣も一層重くなつてゐた。忠興は、喜んで、それを前田家に通じた。

すると、石田三成は、どう思つたか、家康に内報して、大阪は、不穩の風説があるから、下向は中止に相成つたが宜しからうと、警告した。それは、三成が奸策を以て、又、利家をして怒らしめて、徳川と前田と兩家の間を割かうとしたものであるといはれてゐる。福島正則も亦た家康を訪うて、大阪行を止めることを勧めた。

「大阪は奸人輩の巢窟でござれば、輕々しく御下向、甚だ然るべう存じませぬ」

しかし家康は、今度は、前田を訪ふことを斷念しなかつた。

「御心入れは、有難うぞんすれど、大納言殿病中にもかゝはらず遙々おん越し下

された。その返禮は、ぜひとも致さねばならぬ。油斷ならぬとあれば、こつちにもそのつもりで、用意をいたすまでぢや」

さういつて、三月十一日、淀川を御坐舟で下つた。伏見には結城秀康をさゝめて留守せしめた。加藤清正、池田輝政、細川忠興、福島正則、黒田長政、淺野幸長などの諸將が、手の者に弓と銃とを携へて、水路と陸路とから護衛した。忠興は、前田家と姻戚の關係でもあり利長とは親友でもあるところから、殊に遠慮して、父の幽齋を人質のつもりで、坐舟に侍せしめた。

やがて舟は大阪の北濱に着岸した。すると、そこへ女輿が一臺据ゑてあつた。人々は不審に思つてゐると、その中から藤堂高虎が這ひ出て來て、家康の近くに進み、

「今朝ほどより密かに當地の情勢を窺うて居りまするに、さしたる氣色も相見え申さぬが、これより大納言殿の屋敷までは、道もござれば、御用心に如はござりませぬ。この女輿に召して、先づ、某が屋敷へおん入りあつて

「それは、いかいお手敷を相掛け、痛み入る。然らばお言葉にしたがひ、拜借いたさう。皆々御免候へ」と、女輿に入つた。それから、藤堂の人数に守られて、

中の島の高虎の邸にひと先づ入つた。そこで、少憩して、前田家に向つた。

利家は、利長、利政等の伴をして、門外まで出で迎へしめた。自身は、左右から扶け起されて、中の御居間まで出て、やつと家康に對面することが出来た。その席には御挨拶人として、徳川、前田いづれにも仲の好い有馬法印則頼ばかりが附添うて入つた。

「おゝ、これは大儀々々。それには及び申さぬ」

家康は、一目利家の病み衰へた姿を見ると、思はず、さういつて言葉を掛けた。

彼は、この間、伏見で會つてから、まだものゝ十日ばかりにしかならぬのに、利家があれば又、ずつと病勢が募つてゐるのを見て、心の中で驚いた。そして、氣の毒に思ふとゝもに、いよゝゝ最後の勝利者は自分であることを意識せず

には居られなかつた。が、もとより、そんなことは、色にも表はさなかつた。

「遙々の御下向、利家辱なうぞんじ申す」

利家は、病氣のせるで、口が樂に利けなかつた。

「御氣分は、いかゞでござるな。ちと、お宜敷い方でござるかな」

家康は、自分の側に控へてゐる利長と、利家とを等分に見ながら訊ねた。

「先達て伏見參向の節よりは又、ずつと病勢進んだやうにござりまする」  
利長は父に代つて答へた。

「そのやうにお見受け申す。病は氣からと申す。あまりに、あれやこれやと御心を痛めらるゝな」

家康は和かな語調で利家に向つて慰め顔にいつた。

「これが、今生にてのおん暇乞ひでござる」

さういひさして、利家は深く咳入つた。やがてそれが鎮まつたところで、

「太閤の遺命……殿下に頼まれた秀頼公の御事が何よりの心懸り。明日にも、そ

れがし亡き後は、内府殿一人が頼みの綱。くれぐれもお頼み申す。……」  
さういつて、言葉は涙に消えた。

「御憂慮召さるな。その儀は家康、屹度受合ひ申した」

家康は明白に答へた。利家は老眼を拭ひながら、

「……それにて利家安堵いたした。なほその上のおん願ひは、われ等相果てたる  
後は、伴利長とも御懇意に御頼み申す」

「その儀とても同じこと。肥前殿に決して御留意いたさぬ。御安心召されよ」

家康は、ふたゝび明答した。

利長は又、落涙をして、

「これにて、もはや思ひ残すことはござらぬ」と、やゝ安らかな顔になつた。

「あまりに取越し苦勞をいたさるゝな。それが何よりも身體の害。氣の持ちやう  
で病は癒るものぢや。今一度の御本復を祈り申す」

さういふ對話の間も、利長は、家康の側を、片時も離れないやうにしてゐた。

それは利長の弟の利政が、好い隙もあつたらば、家康を刺殺さうといふ心のある  
ことを、兄の利長がよく知つてゐたからであつた。

平常、利家は、利長、利政の兄弟を、側に呼んで、この頃、江戸内府の振舞を  
見てゐるに、末々天下を恣にせん腹なること疑ひもない。さればとて、今俄に退  
治することも容易ではない。この上は、たゞ、秀頼公の天下を、しろしめされん  
事は、天に任するのほかはない。と、いつて屢々歎息したことがあつた。

二男の利政は、つくづく、それを聞いてゐたが、此度、内府が、館に來たの  
は、千載の一遇、この機會に家康と刺違へて瀕死の父の焦慮を晴し、豊臣家の天  
下を百載に安泰ならしめようと考へたのであつた。で、その意中を密に兄の利長  
に打明すと、利長はいふに、

「お前の思つてゐることは、無論一理あることだが、さればといつて、今、何處  
に、現に、内府が政權を恣にして、豊臣家の天下を奪つてゐるといふ形跡も認め  
られない。その證跡が明かでないのに、内府を打果すと、却つて、その爲に立所

に天下の兵亂を來すことは火を見るよりも明かだ。さうなれば、秀頼公の御爲にも不幸である。それは淺果敢な考へだ。決して／＼そんな亂暴なことをしないやうにしてくれ。又、内府の心中をこつくと見究めて、眞實、秀頼公に對し、二心あること分明ならば、その時を待つて、退治して可い。その場合には、それがしとても人に後れぬ決心がある」

穩健で、消極的な利長は、さういつて弟の利政を説諭した。そんなことがあつたものだから、利長は、萬一利政に粗忽の振舞ひがあつては一大事と、家康の側に引添うて、利政の舉動に始終目を放さなかつた。

利政は、兄の意見に上べは聽從したやうに見せかけておいて、好い隙あらば、たゞ一刀にと、備前兼光の利刃を佩いて、それとなく家康の様子に張膽明目してゐた。

あまり話が長くては、利家の病氣に障るので、對面は、それで終り、内府は、設けの書院の間に席を移し、そこで善美を盡した饗宴が開かれた。父の名代とし

て利長が淺野長政と、もに内府の陪食の席に連なつた。利家は酒盃の献酬をして、家康に寶刀を進呈した。供奉の諸將連は、障子を隔て、次に滿座してゐた。先刻、對話の座で、機會を得なかつた利政は、宴席では必ず素志を果たさるものと、つと起つて何氣なく家康に近づかうとすると、兄の利長血相を變へてはたと呪んだ。利政も、もし下手なことをして、やり失敗つては詰らないと思つて、無念の齒を噛みしめながら、靜かに、もこの座に返つた。利政の志は遂に達せずして止んだ。

それから、餘興に、前田の家來富田越後、山崎内匠、山崎次郎兵衛三人の優れた劍術などを觀覽して、餘念なく時刻を移した。家康に親しい大小名は悉くその日の席に參候して、何くれと閑談してゐた。と、そこへ招かれもしなかつた石田三成が黒の道服姿で、

「大納言殿、今日、おん病氣は、いかゞでござりまするな」

といつて、やつて來た。一座それと見て、白け渡つた。しかし、三成は、その

まゝ直ちに辭去した。三成は、利家の病中看護と稱して始ご傍を離れぬやうにしてゐた。

やがて日没に及んで、前田家を退出して、又藤堂佐渡守の中の島の邸に歸り、そこに一泊することになった。

その夜更けて、淺野幸長と利家の家人徳山五兵衛との二人が、佐渡守の宅に来て、家康公、今日、利家の館に來訪あつた御禮を述べた後、利家の代理としていふやう、今日、内府公、自分亡き後も、故太閤殿下の遺命を守り、秀頼公を輔佐するは勿論、後嗣利長に對しても疎意なしとの御言葉、辱うぞんずる所なるがそれについて、御誓紙を下さるに於ては、利家生前の悦び之に過ぎたるはないと、申入れた。

家康は聽いて、利家卿のお言葉なくとも、故太閤の遺命はいふまでもなし。利長殿に對して、疎意あるべきでない。が、誓紙は、今、此の處にて差上げすとも、伏見へ歸館の上にて差越さうと、返事した。

すると幸長、五兵衛の兩人、

「御覽ぜられしとほり、利家、今は、餘命旦夕を測り難し、存命の中に、御誓紙を見せ申したうござれば、願くは、只今賜はりて、罷り歸りたうぞんじまする」と、重ねて懇請した。

と、傍に侍してゐた有馬法印、一と膝進めていふやう、

「あ、いや、その、たつての御懇望は宜敷うござるまい。内府殿、常々、一旦御言葉に出された事、後に至つて相違ありたることなし。然るに、伏見にて御誓紙を調へらるべしと仰せあるを、覺束なく思はるゝに於ては、たとひ只今此の席にて、御誓紙ありたりとても、猶ほおん疑ひは晴れ申すまい。くどういはずと、たと仰せのまゝに差置かれたがよい」と、やく色を變へて言つた。二人も爲方なく、そのまゝ口を閉ぢて、退去した。

その日の事であつた。石田三成は、五奉行はじめ、かねて同志の仲間へ使を立

て、今日、小西攝津守宅に於て相談申したき事あり、各參會致されたしと案内した。淺野長政は、今日利家卿に頼まれて、徳川内府へ御挨拶に出なければならぬゆゑ、參會いたしかねるといふ返答をして斷つた。その餘の連中は、石田の案内に従つて、小西行長の居宅へ集つて來た。饗應が過ぎて、三成が語り出したところは、

「先達つて大納言殿病中を推して伏見へまゐられ、今日又、その返禮として、内府下向あり、表面双方和解相成りたるやうなれども、近日大納言殿の病勢甚だ心元なく相見受ける。一朝利家卿に萬一の事あらんには、豊臣家の天下は、内府の恣にならんこと目前なり。各うはいかゞ御思慮あるか」といふ。

すると、小西行長は、石田の言葉も終らぬうち、

「總じて、先日來よりの御相談甚だ延々となつたるからして心得難い。今日、たとひ大納言殿、内府と御和解相成りたりとはいへ、前田殿をはじめといたし、残る老中浮田殿、毛利殿、上杉殿皆な内府の專横を快からず思はるゝは、今以て同

前でござる。幸ひ、今夜は藤堂佐渡が宅に一宿なれば、押懸けて焼討にいたすか、さなくば明日伏見へ歸向の途中に於て打果たすか、この二つの外に思案はござらぬ。首尾よく内府を打取るに於ては、秀頼公を主君と思ふ者共は、忽ち悦びの眉を開き、又、近頃、内府の權勢に恐れて、諛ひ従ひたる輩も、一時に志を翻へして、我等が方に興くみすることは必定なり。既にかくなつたる上は、殘黨の奴原を退治すること、いと易し。唯速に事を決行いたさるゝがよい」と、決心の色を面に浮べていひ放つた。

そ  
の  
前  
夜  
  
(家康と三成)



慶長四年三月十一日の夜、その日、徳川家康が、前田利家の病氣見舞かつは、過般利家の伏見訪問の答禮とあつて、伏見から淀川を船で下り、大阪の前田の邸を訪ひ病床を見舞ひ、あとは書院の間で、滞りなく饗宴もをはり、餘興に、前田家臣の武術の試合などを観覽して、あまりに夜の更けぬうちに、家康は、利家の長子利長などに門前まで送られて、無事に、その晩の宿泊所に定めてゐた中の島の藤堂高虎の邸まで引揚げて戻つた。

その夜のことである。かねて——去年の八月太閤歿後以來——家康の政治上の仕置に、とかく専横の振舞ひが多いといつて憤慨してゐた、五奉行の中でも、最も出頭人である石田三成、三成とは意氣投合する小西攝津守行長は、同志の連中へ急使を立て、攝津守の邸に密會した。集つた者は、前田玄以、増田長盛、長束正家などであつたが、一人淺野長政は、その日利家に頼まれて、家康の對手に出なければならぬといつて出會しなかつた。

饗宴のをはつたところで、三成は膝をすゝめながら切り出した。

「方々は何んと思ふ。家康の爲ることがどうにも某には氣に喰はないのだ。あの先々月の伊達、福島、蜂須賀の三家と、故殿下の御法度を無視して勝手に婚約をした時だつて、ひどとほり、お互に和解をしたやうなものゝ、一體あの、家康の方から、吾々の方へ出した起請文といふのが、既に氣に入らないのだ。自分の方で御法度を無視してゐながら、少しも自分の落度を詫びてゐないぢやないか。ねえ、「今度縁邊の儀について、御理ごはりの通、承届候。然る上は、向後遺恨に不存候間、前廉不相變、諸事可入魂事。」とたゞこれだけぢやないか。それに引換へ、吾々四大老と五奉行の方から、向ふへ出した起請文の文句は、どうだ。

「今度縁邊之儀付而、御理申入候處、早速、御同心畏入候。然者向後、御遺憾無御座之旨各々忝けなく候之條……」このとほりだ。吾々の方で對手の非理を咎めて置きながら、それを、向ふが、なるほど、さうであつたと聞き入れたまでのことを、此の文句では、まるで吾々の方が畏れ入つたり、それをかたじけなく思つたりしてゐるではないか。中老の堀尾茂助などが折角双方の仲に入つて種々心配

したので爲方なく自分も、堀尾や生駒らの顔を立て、黙つてゐたが、この起請文の文句だけで、加賀大納言までが内府に頭を下げたことになつてゐる。なに私婚の事だけに止まれば大したことでもないが、あれは奴が一寸、あゝして、瀬踏みをしてみたのだ。もし、吾々の方で、あれを、おとなしく黙つてゐたら、好い氣になつて、後から、あとから、どんな事を仕出來して殿下の御遺法を蹂躪するか知れなかつた。まだそれのみならず、和解の時にしても、堀尾が頻りにいふものだから、理のある吾々の方から、わざ／＼伏見まで出掛けていつて、内府を訪問して挨拶をしてゐるのに對して、殊に加賀殿は病中引籠りといふことを、よく承知してゐるのだから、本當ならば、今度は内府の方から一度大阪へ挨拶に出て來るべきだ。そのことも、吾々が一同で挨拶に行つた時に、玄以殿、君の口から一應述べて向ふでもさうすると返事してぢやなかつたか。それにもかゝはらず、後は忘れたやうに知らん顔をしたる。實に怪しからん。そこへ今度、細川や加藤などが、大納言殿を、やつと宥めて、氣の毒にあの御老體を杖に縋つて、船で

伏見へ上られた。あれから、わづか十日ばかりにしかならぬが、あれがひどく病気に障つてゐることは、自分は毎日傍に附いてゐるから、よく分つてゐる。到底、今の様子では、さう遠くはあるまいと思ふ。かう徳川と前田と兩家が和解してしまつて、その上に大納言殿に今にも萬一の事があつた暁には、利長君はあのとほりの温順しい一方だから、とても今までのやうな譯にはいかない。内府が益々のさばるのは、もう眼に見えてゐる。……やつ付けるなら今の内だと思ふ。」

三成はやゝ昂奮しながら、熱意をこめて説いた。

すると、小西行長は、三成の、まだ言葉をはらぬ先きから頻りに肯いて、

「治部少のいふところに、自分も、徹頭徹尾賛成だ。一體中老の堀尾は悪い人間ではないがあれはすつかり内府の方擔人だよ。あの起請文の文句は堀尾の計らひで専ら内府の顔を立てさせたものだ。随分片手落ちだ。某はあの事には、勿論直接に關係はないが、よくあんな起請文に大納言殿をはじめ、毛利や浮田や上杉が格別異議をいはないで連署を承諾したものと、後で聞いて思つたことだ。……こ

の事は、もう正月、若君が伏見から當城へ御移座あつた時、内府が、片桐の處に泊つてゐるのを幸ひ斫り込まうとしたのだつたが、一同が一致しなかつたからいけないんだ。この相談には、もう徴が生えてゐる。ぐづくいつてゐないで、今夜、これから直ぐ藤堂の邸を取巻いて焼討ちしたらどうだ。」

行長は、今にも立ち上りさうな意氣込みでいつた。

すると、前田徳善院玄以は、靜かに、傍に坐つてゐた増田長盛を顧みながら、「かう増田殿、治部殿や攝津殿の御思案を、貴殿はどう思はるゝ。それがしの所存とは、いさゝか相異なるやうぢや。御兩所の考へで、豊臣家の無事長久を思ふために、飽くまで内府を除かうといはるゝのぢやが、今日の場合、たとひ多少、内府の仕置に存分の事がござらうとも、秀頼公御幼少の間は、江戸内府自分に成り代つて天下の政治を仕置せよとは、故太閤殿下の御遺命でござる。さすれば、その御遺命を果さるゝ内府の位置に服するは取りも直さず、故太閤殿下の命令に服するも同然でござる。かつまた、秀頼公御自身にては、何事の御辨へもなき折

柄、その御膝元において、今、私事に兵を動かすこと、幼君の御迷惑は、申すまでもなく、天下の公約に背くと申すもの。御兩君の仰せらるゝとほり、首尾よく内府を除く目的を達し得たるにしても、その先諸君の御身が、よも安泰ではゐられませんまい。その上今宵は、佐渡守の館においても細川、加藤、淺野の面々油断なく屋敷を警衛すべしとの取沙汰。なか／＼思ふやうに手易くは參るまいて。萬一迂濶に事を起して決戦長引くうちには、内府公、もとより、その準備はあるべきはず。伏見より結城秀康殿關東勢を具して來援あるにおいては、味方は必ず敗戦するでござらうぞ。……事失敗にをはつたならば、諸君は謀叛人の汚名を呼ばれねばならぬぢや。それが笑止千萬でござる。」

圓滿な玄以は、石田と小西との輕擧を警しめるやうにいつた。

しかし、行長は、容易に玄以の説に服さなかつた。それでは、明日、伏見へ引揚げる途中を要撃しよう。なかに、一氣に押懸けて討ち果してしまへば、もう大丈夫だ。内府さへ討ち取れば、豊臣家恩顧の者はどれほど悦ぶか知れない。既に

内府がやられたと聞けば、かねて内府の權勢に壓せられてゐる加藤、細川、福島などの連中は掌のうらを返したやうに此方に蹤いて來るに定まつてゐる。さうなつたら徳川方の殘黨を退治するのは譯ない。一體諸君は、文墨の風流には明るうござらうが兵機といふものに疎い。それゆゑ毎時いづれ狸爺いぬぢやに誑かされてゐるのぢや。」

小西は、もう、事が成つたやうにいふのであつた。

増田長盛は、玄以の説に賛成であつた。そしていつた。

「某の意見も徳善院殿のいはるゝところと同じだ。治少貴公の眞意は、某にもよく解つてゐる。しかし、君は、今度はあんまりことを逸り過ぎてゐる。小西氏といふところもさうだ。實は一昨日も大谷刑部が某にぜひ會つて話したいことがあるからといふから、行つて會つてみると、いろ／＼世間の話をしたところで、やつぱり今度の貴公等の計畫の事をいひ出してひどく心配してゐた。大谷のいふに、今度内府を討たうとする仲間の意中を察するに、秀頼公の御爲をひと筋に思つてゐるのは解つてゐるが、下手に事を始めると、却つて秀頼公の御爲に不利な

結果になる。内府に果して二心ふたこころがあるか、もし二心のあることが明瞭であるならば、それが、天下萬人の眼に明かになつた時にその罪を問ふべしである。その際に及んでは、太閤殿下の恩顧を思ふ者は誰れ一人、此方の正義に背いて、内府に組する者はあるまい。然るに今、内府の罪状も明かならぬに、輕卒に事端をひらくのは、却つて好辭を向ふに貸すやうなものである。それでは、石田氏・小西氏等が結局自分の身を誤るのみならず引いては豊臣家を禍することになる。……大谷はさういつてゐた。石田氏によくそれを話してくれと、くれぐれもいつてゐた。」

大谷吉隆は、石田の親友であつたから、増田のいふことを聞いて、石田も決して悪意には受取らなかつたが、しかし、納得は出来なかつた。

「そりや大谷が心配してくれる好意はよく解つてゐるが、内府の二心が天下萬人の眼に顯著になる時をべんぐと待つてゐたら、その時こそもう手の着けられなくなつた時だ。内府に果して二心があるかつて、二心のあるのは、見え透いてゐるぢやないか。今の内に刈取つてしまはなければ、どうすることも出来ない。」

小西はもう堪へ難いやうに急いそいでいつた。

「さうだとも。自分もそれを思ふから急ぐんだ。内府に二心の有無を今更詮議していゝ場合でない。遂つひるなら今の内だ。」

長盛は重ねていつた。

「それから又、大谷がいつてゐた。諸君の企ては勿論豊臣家の御爲を思つてゐるのは分つてゐるが、朝鮮の事以來、随分お互ひ同志の感情が齟齬してゐるから、名を秀頼公のことに籍りて、内實、そんなことで私怨を晴らすのだと誤解される憂ひもある。よくその邊のことも考へなければならぬといつてをうた。」

増田のその話を聞くと、石田も小西も不満な表情をして一寸黙つた。

そんな具合で、いつになつても議が一決しさうにもなかつた。やがて夜になつてしまつた。そこで長束正家が雙方を調停するやうにいつた。

「それぢや、かうしたら、どうだ。實は、僕の方で内々、藤堂の屋敷の様子を探

らすつもりで、内府の警護といふ名目で人を附けてある。それ等が、何といつて歸つて来るか。向ふの警備が手薄のやうであつたら、小西氏のいふとほりに、これからすぐに取懸らう。もし又、前田殿の御説のやうに警護嚴重であつたら、今夜は中止といふことにしようではないか。」

さういつてゐるところへ、長束の手の者が追々歸つて来て、先方の動靜を報じた。

どうしてぐ、向ふも油断などしてゐるはずはなかつた。中の島の藤堂佐渡守の邸は炬火が星の如く列なり、參集の面々には、織田有樂、福島正則、加藤清正、有馬法印、黒田長政、細川忠興、堀尾吉晴、金森法印、池田輝政、淺野幸長父子等數十人の大小名。又内府の家人には井伊兵部、榊原康政、阿部伊豫守をはじめ小身の面々、各々人数を引具して藤堂の屋敷の内には居餘つて、門外まで犇めてゐるといふ有様である。さすがの小西も石田も、それを聞いて、夜討ちのことは、本意なく思ひ止まつた。

家康はその翌日大阪を立つて無事に伏見に歸着した。道中は榊原康政が前驅し井伊直政が後衛をした。

三成と行長とは、齒齧みをして悔しがつた。何とかして、ぜひとも内府を討たうといふ一念は止まなかつた。三成は祕かに思つた。この大事を果たすにはどうしても細川忠興を一人仲間に入れなければならない。

そこで、前田玄以から話さして、忠興の袖を引かしてみた。もし事が首尾よく成就した暁には、日本國中望むところを二三ヶ國與へるいふ條件を持ち出した。けれども忠興は當時の武將の中でも、家康を除けば、最も思慮も富みまた機略を藏してゐる人物の一人であつた。かつて岳父の明智光秀が弑逆を行つた時にも丁度、今度と同じやうな條件を以つて誘惑して来たが、彼は、斷乎として拒絶した。忠興は三成に答へる前に先づ志を同じうする諸將に、そのことを打明かした。三成が、忠興を甘く見たのは、彼の大きな失敗であつた。明智の亂は、天下何人の眼にも名分の正しからざるころあつたが、今度の三成らの企ては、必ずし

も信長に對する光秀の關係とは同じものではなかつたのであるが、忠興は表面姻戚の關係もあるところから前田一家とは最も親しい間柄であると同時に、徳川家康に對しては、生涯忘れてはならない恩義を感じてゐることがあつた。その事については、こゝではいふことを省くが、それは、まだ太閤生存中のことで、家康と老臣の本多正信と、忠興自身と、忠興の家老の一人のほかに誰も知るものはなかつた。その時もし、彼が家康の内證の時から黄金二百兩を借りることが出来なかつたならば、或は太閤の忌諱に觸れて、國を除かれてゐたかも知れなかつたのだ。忠興はそれを終生の恩とした。しかしながら、彼が家康と特別に親近することは、双方の安全を保つ上に、最も外聞を憚らねばならぬことであつたから、その事があつてからは、忠興の方から、意中を明かして、今までよりも殊更に、家康に對して疎遠を装ふてゐたのであつた。勿論、そんなことは、太閤にも内秘であるし、姻戚の前田利家すらも知らぬことであつた。況んやさすがに慧眼なる三成なども少しも氣づかなかつた。で、忠興が、他の武將どもに、三成からの誘

引のことを明かすと、

「ちやうど好都合だ。僞つて、同意した風をして、向ふの密計を探つたらいゝ」  
それから間もなく、ある一晚、忠興は、長束正家の邸で、三成と會見した。そして率直に三成の内府を滅ぼさうといふ方策を訊いてみた。

「一體どういふ方策でやらうといふんだ。」

「この事について、みんな二の足を踏んで恐れてゐるが、某は内府一人を討つぐらゐる何でもないと思つてゐるんだ。伏見の邸の様子を探らしてみたいところ、邸兵は、わづかに二千ぐらゐるものだ。さうして、都合のいゝことには、あの邸のすぐ隣か宮部と福原との邸だ。これ等は、皆此方の黨だ。そして二人の屋敷の方が、内府の邸よりも地勢が、ずっと高くなつてゐる。だから此方から、高みを頼んで、盛んに火箭を放しかけて、そいつを避けようとして、騒いでゐるところへ、鐵砲でどん／＼打込んだら、徳川の一黨を塵殺しにするのは譯はないことだ。みんなが、ぐづ／＼して決行しないから駄目なんだ。」

「そして、何時やるつもりだ。」

「今夜やらうと思つてゐる。」

「……ふむ。」と忠興は、心の中では困つたことだと思つたが、そんな風は色にも見せず、やゝあつていつた。

「内府にしたつて、平素から兵士の訓練に油断はしてゐない。二千人は多くないにしてもそれだけが、決死の覺悟で討つて出て來たら君達の方で必ず勝つものとはいへない。それに、火箭を放すに、地勢の高い低いは論にならない。向ふがやれば、此方もやる。同じことだ。そいつは、どうも、あんまり妙策ではない。それよりも、僕に一策がある。僕が手の者二千で、先鋒を努めよう。そして、ひた押しに突つ掛けていつて、決戦の覺悟でやるから、君達は、大勢で僕の後に續いてもらはう。きつと克つてみせる。」

忠興が、さういふと、三成等は、それには従はなかつた。忠興も、あくまで自説を主張して下らなかつた。いたづらに議論を闘はしてゐる間に、夜が明けてき

た。忠興はそこ／＼に長束の邸を抜け出して來て、加藤清正に先づ告げた。そして二人で家康の邸に馳せてきて、具に事態を陳じた。

すると家康は落着き拂つた様子で、

「わざわざ有難うござつた。いや、いづれ、そのくらゐのことは、ありさうなことだと思つて、自分の方でも、いざといふ用意だけはして居ります。」

朝鮮の役以來、互ひに先陣の功を争ふて、深く相反してゐる小西行長と加藤清正との間はいふまでもなく、出征の各將の武功争ひの心理、利害關係は複雑を極めてゐた。その中でも加藤清正と黒田長政と淺野幸長の三人は殊のほか石田三成に脚む所があつた。それは太閤の生存中から、積りにつもつた反感であつた。石田の肉は、斬り割いて、焼いて食つても、まだ飽き足りないくらゐであつた。太閤も今は世に亡くなり、三成の頼む木蔭はなくなつたところへ、内府に對して、禍心を抱いてゐることが、いよ／＼動かすべからざる明白な事實となつたので、前記の三人は、機こそ來たれどかねて、これも、彼れに悪感を抱いてゐる福島正



則、池田輝政、加藤嘉明、細川忠興の四人を語らうて、七人連署を以て、家康に三成の罪状を訴へて、誅戮したいと強請した。けれども家康は、それに承諾を與へなかつた。爲方なく、七人は大阪に行つて前田利家に訴へ、三成を存分にしたいといつた。が利家もそれを許諾しなかつた。三成は、太閤の歿後は、専ら前田利家の勢力を頼みとして、常にその蔭をつた。まして利家危篤の折柄とて、七人の武將達は押しして、この長老の意に逆ふわけにもいかなかつた。三成は、利家の看病に託けて、日夕利家の側を離れなかつた。さすがの七人の連中も、いまいましい思ひを堪へながら、手を出しかねてゐた。

すると、その年の三月は閏月があつて、次の三月の三日に、たうとう加賀大納言は、一家のこと、また豊臣家の將來のことなど、數々の積る憂慮に一人胸を傷めて、敢なく逝去した。

七人の大名達は、利家の息の絶えるのを待つてゐたやうに、飛び上る思ひで、今夜こそ百年め、三成の奴を討ち殺して鬱憤を晴らさうと、手ぐすね引いて待つ

た。

その夜、大阪在城中の大小名は、秀頼へ、前田利家卒去の弔禮を、述べるために登城してゐた。七人の連中は、三成の、その下城の途中を要撃する手はずを定めてゐた。

ところが三成には敵ばかりはなかつた。

毛利、上杉、浮田、島津、佐竹の五將は、かねて三成と親善の關係であつた。

その時先年三成の取做しによつて、故太閤に仕へてゐた。秀頼の旗下の士に、桑島治右衛門といふ者があつて、城中で、七人が密談を凝らしてゐるのを、餘所ながらに漏れ聞いて、逸早く三成に急を告げた。

「……左様の次第でございますから、一刻の御猶豫も危険でございます。」

「さうか……浮田や上杉はまだ下城せられぬか。」

「はい、備前黄門にもまだ御出でのやうでございます。」

石田は、桑島と一緒にまだ留まつてをった浮田秀家、上杉景勝の處に行つて、

右の次第を話つた。

「そいつは油断がならぬ。早く手配をしなければならぬ。」

浮田と上杉は言葉を一つにしていつたが火急の事とて、即座に好い智慧も浮ばなかつた。そこへ、丁度、これも利家の弔問のために少し前に伏見から急いで駆け付けたばかりの佐竹義宣が登場して来た。それを聞くと、

「いや、實は今日は大納言の御見舞も御見舞だが、加藤や黒田等が、伏見で内府に、どうあつても石田をやつ付けなければ承知しないと強訴してゐた様子から、加賀殿が逝かれた上は、きつと、そいつをやり出すであらうと思つてゐたので、それが氣にかゝつて急いでやつて来た譯だ、こゝで愚圖々々暇を潰してゐる場合でない。女輿のりものに乗つて、そうつと、浮田殿の備前島の邸に行つてをつたらうだ。」

「そうか、それが差當つてよからう。」秀家も勧めた。

それから、こつそり女輿に身を隠して、三成は、秀家の邸に入り、毛利、上

杉、浮田、島津、佐竹五家の人数で、それとなく守備してゐた。

しかし、もう、さう七將の側が殺氣立つて来ては、いつまでも浮田の邸に三成を忍ばせて置くわけにもいかなかつた。佐竹義宣は、それで三成に勤めていつた。

「どうも、あの連中が、かう怒り立つてゐては、所詮始末にいかぬ。といつて、此方もその氣になつて、對抗することになれば、決して負けてをらぬつもりだがそれでは、事が大きくなつて、亂になる。どうだらう、一つ此處は、君も、そのつもりになつて、内府の懷中に飛び込んで行つてみては。」

義宣は意味深い眼で、三成の顔を見ながらいつた。

「……うむ……つまり死中活を求むるといふのだな。」

三成は機敏な眼を輝かして答へた。

「さうだ〜。」義宣は、うなづきながらいつた。「加賀殿が亡くなられた今日となつては、もう、否でも應でも、内府よりほかにあの連中の頭を抑へる者はないのだから。」

といて彼は、又、少しく聲を落しながら「まあ、後のことは、あとの事にす  
るとして、君が今、内府の懷中に飛び込んでいつたつて、まさか内府が君を捕つ  
て食ひもしないだらうよ。」

「うむ……そのことはよく分つた。……内府に頼むことにしよう。」三成は俄かに  
頓悟するところあつたものゝやうにいつた。

「さうと定まれば、少しも早い方が無難だ。一緒に上ばらう。」

それから、三成はまた女興に身を忍ばせ浮田の家人と、大阪の守口に留めて置  
いた佐竹の人数で、それとなく遠巻きに警護して伏見に上つた。

三成は、先々月太閤の喪を發して、阿彌陀ヶ峰に葬儀を營んだ時、他の奉行等  
と同じやうに、忌に服して剃髪し、僧服を纏うてゐた。伏見に着くと早速、佐竹  
と帶同して家康の邸を訪ふた。佐竹からまづ口を切つた。

「更めてお話し申上げるまでもございせんが、七將の遺恨がなか／＼和ぎさう  
にもございせんので、實に石田も當惑してゐる次第でございます。これまで、

治部の致し方については、内府殿に對しても、少なからず御無禮の儀もあつたと  
存じますが、そのへんのことには、何卒平に御寛恕を願うて、どうか内府殿より七  
人の仲間を一つ篤と御説き鎮め下さるやうに御願ひ致したいと思ひまして、昨夜  
半、大阪から同伴して伺候いたした次第でござります。」

佐竹も、徳川の二百五十萬石に比べては、知行高は遙に少なかつたが、それで  
も常陸で八十萬石の大名であつたから、當時の大名では、徳川を除けば、毛利や  
上杉に次ぐ大身であつた。その家康に對しては、さすがに頼みの筋がすぢであつ  
ただけに、言葉を低うして哀訴した。

石田も、佐竹の語のをはるを待つて一應の挨拶を述べた。

「この際、もはや、私の存じ寄りにつきましては、何事も申上げませぬ。何分に  
も内大臣様の御加護を仰ぐよりほかはございせん。」

家康は、いつものとほり、その福やかな顔に、今日は深い海の和いでゐる時の  
やうな微笑を浮かべながら、二人のいふことを聽いてゐたが、

「それは、さぞかし御當惑のこと、お察し申す。治少殿の一命は、家康きつと請合ひ申す。お心安う思召されよ。」

「は、有難き仕合せに存じまする。」

佐竹も石田もさういつて、同時に低頭した。

「ちやが、とかく世間も物騒がしうござれば御兩所方においても、とくと御用心召されよ。」

「は、その御配慮痛み入りまする。」石田は重ねて頭を下げた。

二人は、やがて家康の邸を辭去して、三成は伏見の自邸に引取つた。

その日の夕方であつた。昨夜半、三成が伏見へ上つたといふことを、後で知つた加藤、黒田、淺野などの連中は、またしても、石田奴に出し抜かれたかと、齒噛みをして悔しがり、各自に手廻りの者を引具して、石田の後を追うて、急ぎ伏見に駆け上つて來た。

「うぬ、蟲けら同然の石田め酒蛙々々とした面をさらして、よくも洒落臭い眞似

を致しをる。徳川殿に如何なる申開きをいたさうとする？」

七大名は伏見に着くと、すぐその足で家康の邸に駆け込み、井伊直政を通して内府に石田を存分にしたいと強訴した。家康は、それは、ならぬと井伊に答へさせた。加藤や福島は面を膨らして、押返していつた。

「石田の奴め、内府公にお目ごほりして、何事を申し陳じたかは存ぜぬが、今日、彼れを存分に致しおかず、一日生かしておく時、一日禍を成長せしめ、果ては、いかなる天下の珍事が出來せんも測り難い。兵部殿にも、よく考へてお見やれ、貴殿の御主君の寢首を搔かうとする奴ではござらぬか。」

井伊は、それを聽いて、

「いかにもく。それがしとても左様に存するが。わが君の御思召しもあることなれば……。」

そんな押問答をしてゐるところへ、本多正信も奥から顔を出して來た。七人は又正信に向つて、ぜひとも、内府公に説いて石田の成敗を默許して下さるやうに

取計らつてもらひたいと頼んだ。

本多は、それに答へていつた。

「方々の積憤のあるところも内大臣には、よう御存じであらせられるが、しかし、それは申さば、私の怨みといふもの。太閤殿下歿せられて、なほ目も淺く、且つは秀頼公にはなほ御幼少にておはす折柄、方々が同志を組んで私の怨みを晴らさるゝにおいては、再び天下大亂の基と相成る。上下の不幸これより大なるはない。内大臣殿には、故太閤殿下になり代つて天下の仕置をいたさるゝ御身にござれば、ひたすら私の怨みは、思ひ棄てゝあらせられる。」

本多の、理を詰めた言葉に、逸り立つた大名も、さすがに直ぐには何といつていひ返すことも出来なかつた。

正信は主君の家康よりも、たしか二つか三つ年長であつたから、七人の大名達より、年は二十餘も上であつた。彼は、參河以來、徳川家累代の家臣であつた。家康には無二の忠臣であつたが、平素主君の家康に呼び掛けるにも、まるで友達

のやうであつた。それくらゐにまた、家康の方でも正信に信頼してゐた。

七人の大將連は、互ひに顔を見合はして、どうしようかといつてゐたが、中でも一番思慮のある忠興が、

「爲方がない。今夜はまあ一應引取ることにしようぢやないか。」

と、自分から鎮めにかかつた。それで他の者も據るなく、その夜は、一同各自の邸に引揚げたが、依然として兵備を怠らなかつた。

その晩、家康は、いつになく早く寢所に入った。そして、寢床の上に仰臥に横たはりながら獨りで、三成のことを、どうしたものであらうと、あれ、これと思索してゐた。

「どうせ、あの男は、放つて置けば何か良くないことを仕出かすに定つてゐるのだ。七人の連中が折角形付けようといつてゐるのだから、此方は、たゞ打遣つておいても、七人の手で始末は付くのだが。……しかし、今、石田の始末をしてし

まふのは、一寸時機が熟さないやうだ。もう少しの間、天下の形勢を醗酵さすまで生かして置いて、その時一氣にやつた方が、此方に都合がよさうだ。今七人に引渡すのは惜しい……。」

そんなことを思つてゐると、どうも、眼が冴えて來て、快よく寢附かれなかつた。そこへ、そうつと次の室の襖の外から本多正信が言葉をかけた。

「御前、どうかありませんか。今晚に限つてえらいお早いちやありませんか。」

「だれだ？」

「佐渡でございます。正信が一寸おうかゞひ申したいことがありますので。」

「訊きたいことがある。……いゝから、まあ入れ。」

佐渡は、襖を開けて、内府の寢床の脇に進み寄つた。

「何の事だ。」

「いや、ほかの事でもございせんが、治部をどう思召します。」

「自分も今、ちやうどその事を考へてゐたのだ。」

「あ、左様でございますか。御前が考へておるでになるなら、それで、もう、ようございます。私から格別申上げることもしません。それで安心いたしました。」

「お前は、どう思つてゐる。」

「いや御前の思召と同じでございます。……どうぞ、ゆつくりとお休みなさいまし。」

正信は、頓智問答のやうなことをいつて、そのまゝ退つていつた。

明惠上人と泰時

「<sup>まじ</sup>佐殿！」

政子が、柳營の奥の御坐の間で頼朝に呼びかけた。

今は頼朝も、日本六十餘州の總追捕使、征夷大將軍といふ、いかめしい官職を京都から賜はり、鎌倉の主として、天下の大小名を睥睨してゐるが、その昔、まだ流人として伊豆の北條に預け者になつてゐた時分、今でいふ自由戀愛で夫婦になつた政子は、自分が今柳營で數多の侍女に侍づかれて、御臺所として萬人に敬はれてゐるが、やつぱり昔の事を忘れかね、奥の間で夫婦差向ひの時などには、かうして、<sup>まじ</sup>佐殿と呼ぶのであつた。<sup>まじ</sup>佐殿（兵衛佐）といつて、まだ北條の父の館で人目を忍び合つた時分のこと懐しかつた。

「何ぢや？」

頼朝は、政子を振向いた。

「あの、侍どもの噂にいふのを聞きますと、多賀重行は不埒な者でござります



な。

「その重行が、どうか致したか？」

「いえ、ほかの事でもござりませぬが、金剛（北條泰時の幼名）が此の間、七里ヶ濱の方に遊びにまゐつた途中、こちらは徒歩、重行は馬上であつたさうでございますが、重行は金剛に出會ふても、馬から下りもせず、そのまゝ行き過ぎましたさうでございます。無禮ではござりませんか。貴方はお氣につきませんか、どうも、此の頃、大分武士どもが増長いたしてまゐつたやうでございます。重行を呼んで、少しお叱りになつた方がようございますよ。」

「ふむ。そんなことがあつたのか？」

「あつたどころぢやございません。その時金剛の供をいたした者等が皆な、さう申して居ります。」

頼朝は、

「さうか。一度よく説諭してつかはさう。」

かういつて、早速、多賀重行を表御座所おもてごしよに呼び付けた。

「これ重行、その方、先日、七里ヶ濱の戻り道で、折柄かち徒歩の金剛主従に行き會ひながら、馬を下りなかつたさうだな？」

重行は平氣な顔をして、

「いえ、決して左様なことはござりません。金剛殿には出會ひましたが、下馬して御會釋ごごうじやくいたしました。」

「いや、詐いつはりを申すな。たしかに聞いて居る。武士の禮儀は年齢の老少にはよらぬ。その人々の地位によることぢや。金剛は幼うても北條の嫡孫。御臺所の甥なれば、わしにも義理の甥である。その方共とは身分格段の相違である。」

頼朝は、きつと睨み付けた。

重行は恐れ入つて、

「それは、仰せまでもござりませぬ。よく心得て居ります。たしかに下馬いたして、金剛殿に御挨拶申上げました。」

白々と虚言をいひ立てた。

頼朝は、それが明白な詐と知つてゐるだけに、眞から立腹した。鎌倉の専制君主に眞から機嫌をそこねては、忽ち命にもかゝはる。

「どこまでも虚言を言張り、この頼朝を輕蔑することは、不届な奴だ。可い金剛を呼んで訊いてみる。……誰れかあるツ、金剛を呼べ！ 急いで江馬太郎にまゐれといへ！」

金剛は早速侍に迎へられて頼朝將軍の前に出た。

「金剛、そちに訊くが、此の間、七里ヶ濱出遊の折、馬上の重行に行き會ふたさうぢやな？」

「はい、出會ひました。」

「その際、重行は馬上のまゝ行き過ぎたといふが、それに相違なかつたか？ 眞實を申せ。」

かういつて、頼朝はきつと金剛を見守つた。

金剛は、（はい。）といひかけたが、何か、これには深い事情があると、敏くも悟つて、又、（はい。）と、言葉を呑み込み、

「重行には出會ひましたが、たしかに下馬いたして、私に道を譲りました。」  
言語明晰にかういつた。

頼朝は、凝乎と金剛の顔を眺めて、暫くの間、その言葉を味ふやうに黙つて考へてゐたが、やがて、につこり笑顔になつて、

「よい、重行は退れ！」

金剛の言ひやう一つで、どんな事になるかも知れぬと、すでに一命を覺悟してゐた重行は、ほつと胸を撫で下ろす心地がした。

重行が恐れ入つて退つていつた後、將軍は一層上機嫌な顔で、

「金剛、こゝへまゐれ、もつと近う寄れ。」

金剛がその言葉に従つて前に進むと、頼朝は、右の手で金剛の肩を撫でながら、  
「そちは、まだ十三歳といふが、賢い者ぢやの。十三といふので思ひ起したが、

頼朝も、ちやうど、その十三の時に平治の亂であつた。その時は困苦した。……そちは、その年齢で、よく、人の過をかばふてやることを心得て居る。大人も及ばぬ優れた器量ぢや。天晴れ、好い武將になつて、此の鎌倉を大事に守護してくれ。」

さういつて、侍士を呼び、黄金づくりの太刀を取つて、

「今、重行の一命を助けた褒美ぢや。これを、そちに取らすぞ。」

二

頼朝が死んで、子の頼家が二代の將軍になつた。

その頃、年々各地に風水害があつたり、冷害があつたりして、關東地方も凶作であつた。房總の沿岸には津波が襲ふて、人が三十人も死んだ。

頼家は、蹴鞠が好きであつた。京都から蹴鞠の師匠紀行景といふ者を呼んで、毎日蹴鞠をして遊んでばかりゐて、一向政務を見ようとしなない。

先の金剛今の泰時がそれを見て、或時、頼家の嬖臣の中野能成といふ者を、そ

つと呼んで、

「將軍家は、鞠をして蹴遊ばれるだけなら、少しも害はござらんが、毎日それに耽つて、肝腎の政務を見そなはせられぬは宜しうない。今の如く連年天變地異の頻發して居る際、少しく御遠慮あつて然るべきだ。貴殿は、上様のお氣に入り。側から少し申上げたらようござらう。先將軍家には、かやうの時分柄には、民草の疾苦を忘れて、御遊戯に耽けらるゝことは決してござらなんだ。」

泰時はかういつて、頼家の近侍の者に忠言をした。能成は、そのとほり將軍に告げた。けれども頼家は、たゞさうかと聞き棄てにしてゐた。

丁度、その時、泰時は、伊豆の北條の領地が、風水害のために凶作であつたので、自分で實狀を行つて見ようとしてゐたところへ、かねて親しい間の觀清といふ坊さんがあつた。これが心配さうな顔をして訪ねて來て、

「太郎殿、御邊は、先達つて、飛んだ御無禮なことを、能成から上様のお聽きに入られたさうにござるが、將軍家には、大層御立腹で、泰時のいふことは、道理

にちがひないが、彼には父もあり、祖父もある。將軍にいふべき事は、義時、時政がいほう。泰時が賢ら立てをするには、出過ぎた奴だこの御仰せ。貴殿の御身の爲ぢや、病氣を申立て、暫時の間北條に御遠慮なされたがよろしうござらう。ナニ將軍家の御氣性で、十日も過ぐれば、必ずお怒りも解けませう。」

觀清が深切にさういつてくれたので、泰時は、

「それは、御懇情の御言葉、難有うぞんずる。それがし敢えて、君をお諫め申したといふほどのことでもござらぬ。たゞ、聊か拙者の愚見を御近習まで申したまへ。お上も、もし、その爲に拙者をお咎めなされるのならば、泰時は遁げも隠れも致さぬ。慎んでお叱りを受けませう。が、丁度明日早朝その北條に向つて發足いたすつもりで、このとほりに用意もいたして居ります。貴僧のお言葉によつて、泰時遁げるのではござらん。」

と、いひつゝ泰時は、そこに支度してあつた簀と笠を出して見せた。

頼家將軍も、別に泰時を咎めもしなかつた。

その翌朝泰時は早速北條に向つて發足した。北條の領地は去年の凶作で、百姓等は飢餓に迫つてゐたので、泰時は稟倉を發いて貯蓄米を農民に貸し與へた。今年秋の收穫でそれを返納する約束であつたが、今年も亦た凶作であつた。放つて置くに、農民は皆な手に手を取つて、他卿に流浪して行きさうな事態であつた。泰時は簀と笠とで百姓同然の姿で北條に到着し、直ちに負債者を全部呼び集め、「年々の風水害で、お前達もさぞ難儀をいたすであらうと察する。貸米は悉く免除して遣はすぞ。」

かういつて、證文を取り出し、百姓共大勢の見て居る前でそれを火に投じて焼いてしまつた。

「よいから心配致すな。天災なれば致方ない。」

そして、百姓一人當りに米一斗づゝを更に給與し、尙酒食を振舞つてやつた。

彼等は悉く感泣して、泰時の爲、北條家の萬々歳を祈つた。

泰時今は、鎌倉の執權職北條義時の嫡子として、天下の衆望を一身に擔つてゐた。

京都では、三代將軍の實朝も不慮の横死を遂げ、こゝに源氏の正統も斷絶したところであるから、この機會に鎌倉を滅ぼし、賴朝以來武家に掌握せられた兵馬の權を朝廷に取戻さうとして後鳥羽上皇<sup>後鳥羽上皇</sup>宣を以て關東討伐の令旨が下つた。その血祭りとして、先づ、承久三年の五月十五日、義時の代官、京都の守護職伊賀判官光季の邸に夜討ちをかけ、光季父子はその爲に戦死を遂げた。

鎌倉にその急報が入つたのは、同月十九日であつたが、義時を始め、鎌倉中は震駭した。尼將軍の政子は、まだくゝ元氣であつた。政子は、弟義時の奏聞によつて、それを知ると、即刻柳營の廣間に鎌倉中の武將を集め、鎌倉幕府創業以來の賴朝の苦心と功蹟とを演説して、悲憤の涙とゝもに一同を激勵した。諸將士は悉く、關東を背にして京都に向つて死ぬことを誓つた。

諸將士の中で三浦義村、安達景盛等は、足柄箱根の天險に據つて京軍を迎へ討

たうといふ説であつたが、一座の長老大江廣元はそれを斥け、

「いや、天險を頼みにして、徒らに日を延ばしてゐる間に、關東の人心が、いかやうに動搖するとも分らぬ。既に院宜は武田、小笠原、千葉、小山の諸大名に下つて居ると聞く。先んずれば人を制す。手を拱ねいて自敗を招くは愚でござる。武藏守殿には今夜の中にも早速軍立ちなさるゝがよい。」

大江長老の意見に、尼將軍も同意であつた。

しかし、武藏守泰時は、いさゝか躊躇した。何といつても、對手は一天の君によつて差向けらるゝ官軍である。これを向うに廻はして朝敵となつて戦ふことは泰時も大分考へねばならなかつた。

「それがしに總大將を拜せよこの仰せ。固より辭みに致しませぬ。しかし、今より直ぐに進發すると申しても、まだ武藏、相模の兵さへ召集するに、四五日の日數はかゝります。先づ武藏、相模二國の兵の到着するを待つて、出陣いたしましては？」

すると、大江長老は、飽くまで兵の神速を主張して、

「いや〜、それがよろしくない。武藏相模の兵の着來を待つ間に、いかなる人心の變動あらうも知れぬ。たゞ〜武藏殿御一人でもよい。單騎に鞭を揚げて西を指し今夜の中にも發足せられい。さすれば、武藏守殿御進發と聞けば東國の兵士は、武藏相模二ヶ國はいふに及ばず、忽ち龍に従ふ雲の如く驅け集まらんこと疑ひござらぬ。」

大江長老は、聲色を勵まして發足を促した。泰時は、その夜の明け方、わづかに十八騎だけを従へて進發した。果して、廣元のいつたとほり、美濃近江まで來た時分には、二十萬の兵が附き従ふて來た。

#### 四

京勢が、宇治と瀬田との防戦に敗れると同時に、鎌倉勢は、恰も津浪の如き凄じい勢ひで、ひた押しに京洛に押寄せ來た。

都方に加擔した公卿、殿上人、僧兵、北面の武士諸國の浪人ども、戦場で潔く

死んだ者もあつたが、遁げ落ちようとして、或は斬り殺され或は生捕りにされた者數を知らず、洛中洛外至る處に血生臭い修羅場を現出した。

中にも京方の參謀長格ともいふべき平九郎判官三浦胤義父子の最期は悲壯であつた。

京都方が、いよ〜負け戦とわかると、總大將ともいふべき能登守藤原秀康、平九郎胤義、山田忠重の三人は、四辻殿の仙洞御所に引揚げて、某共只今歸參仕つて候と申入れたが、この時御所の門は、内から堅く鎖されてゐる。

どんく〜どんく〜と戸を叩いて、

「能登守秀康、三浦胤義、山田重忠にてござる。戦の模様を奏聞いたし、今後の割策を言上いたしたうござる。」

と叫んだが、應ずる聲もない。尙續けて、どんく〜叩いてゐると、やがて門から何者とも知れず呼ぶ聲がして、

「負け戦して引返した武士どもに、もはや用はないぞ。其方ども、いづれへなり

とも勝手に落ちてまゐれ。」

それを聽いて、三人は、無念の顔を見合はせ、暫く開いた口も塞がらなかつた。中にも短氣な山田次郎重忠は堪えかね、大きな鎧を打った門扉を一層荒々しく叩きながら、

「大臆病の謀主初段に騙られ、吾々武士ども大骨折つたその上に、最後は憂死うきじにせねばならぬとは！」

ざりぐ、齒齧みをして口惜んだが、内からは、それつきり、もう何の音沙汰もない。

さうしてゐるうちにも、まだ明けきらぬ夏の夜、遠近に天を焦がす火の手が揚つてゐる。公卿屋敷の焼き討ちだ。矢叫びの音、女童の泣き叫ぶ聲、どたくどと駆け出す足音。つゞらや大風呂敷を背負つて遁げる町人、人の斬り殺される物音。鎌倉方の軍勢は京中に、水が浸いたやうに充滿した。

胤義は、無念の中にも今は諦め顔で、山田次郎と秀康に向ひ、

「所詮かうなる上は、關東勢に打合ひ、矢盡き、刀の折れるまでも戦つて、潔く討死するほかない。方々御免。伴共従へ。」

と、それより太郎兵衛胤連、次郎兵衛兼義の二人の伴と、數十人の郎従を随へて、何處ともなく逸散に馬を駛らせた。暫くして馬の上で考へた。

（だが待てよ。宇治の方は大勢だ。その上泰時、時房等の大將がある。萬一あの連中に顔を合すことがあつては残念だ。）

手綱を控へ、急に馬首を轉じて、

「澱へ！」

と下知しながら、先頭に立つて、どん／＼走つた。伴の義兼、胤連、その他家の子郎黨われ遅れじと後に續いた。

京はづれの東寺までやつて來ると、そこにもはや鎌倉方の手は廻はつて京勢は一兵をも討ち漏らすなど、人垣を造つて警戒してゐた。しかも、それは駿河守義村の手の者であることが、旗印にも分明であつた。

駿河守三浦義村は胤義の實の兄である。彼等は、頼朝に仕へて、鎌倉幕府創業の功臣では十本の指に數へられた三浦義澄の子達である。

ここに此度の戦については、事を起す初めに、胤義から、早飛脚を立て、密書を鎌倉の駿河守義村の許に送り、仙洞御所よりの御思召である。兄上に於てもし此度の有難き院宣をお受けして、京都方に應通し、鎌倉を討ち滅ぼし、左京權大夫義時が首を取つて獻ぜらるゝならば、其處許をば、源實朝、北條左京大夫にも代つて、日本六十餘州の總追捕使に任ぜられんとの御思召でござる。一家一門の榮譽を思ふて、早速に吾方に味方せられたい。

かういふ密書を送つた。兄の義村は弟の手紙にざつと眼を通すと、

「委細の趣承はつた。返事したいが、道中人目の恐れあれば、わざと返書は致さぬ。歸つて弟平九郎にその旨申傳へてくれい。」

と口頭にいつたまゝ、即座に使者を追ひ返した。

駿河守は早速その密書を懷中して、義時の邸に赴き、

「さてこそ、天下は既に亂れてござるぞ。先づ、平九郎よりの密書を御覽じられい。」

と、義時をはじめ、その座に居合はせた諸人の前に弟の手紙をくり披いて置いた。

義時は、じつとその文面に眼を通した後、からくと打笑ひ、

「かうなる上は致方ない。御邊の手にかゝつて、權大夫の首を進上申すまでぢや。」

戲談らしい中にも、義時の顔にはどこか深刻な猜疑の色が微に見えた。

義村は、忽ち飛び上るやうに坐を後にすべつて、

「たとひ御戯れにもいたせ、これは以ての外なる御言葉。そも平家追討より以來度々の戦に忠節を致し、未だ一度びも不忠の儀身に覺えもござらぬ。今後とても又同じこと。夢々疎略には存じ申さぬ。もし偽りを申すに於ては、遠くは熊野權



現、近くは伊豆箱根の諸神、別して當所八幡宮、若宮三所の神罰たちど立るに義村が一族に示現まします。決して二心はござらぬ。」

かういつて、壘に頭を付けた。

義時は又、から／＼と笑つて、

「いや、戯れに申したまでぢや。駿河守の赤心疑ひは致さぬ。」

二人は、それから連れ立つて尼御臺の御殿に相談に出掛けた。先すれば人を制すの手で、此方から京都へ攻め上る策謀が疾風迅雷的に、鎌倉の營中で決定したのは、その翌日であつた。

六

澱街道を東寺に懸つて來ると、敵の方でもこちらが三浦判官の一黨であること  
を早く見て取つたらしく、馬を進めて近寄りつゝ、

「やあ／＼、そこに落ち延び給ふは、まぎれもない判官殿御父子と見受け奉る。  
尋常に御勝負あつて、某共に手柄をいたさせられい。」

眞先に馬を進めてゐた二男の次郎兵衛義兼は、手綱を控へじつと向うを見て、

「おう、さういふその方もは、叔父上の手の者佐原の次郎、天野左衛門尉の兩人であるな。時運の巡り合せとはいひながら、その方共と一刃を交ゆるとは思ひもかけなんだ。戦をするのも無益ぢや。そこ退け。」

と大聲に呼んだ。

二人が少しく怯むところへ、後から二十騎ばかりを引連れて驅け付けた、駿河守の伴又七郎泰村、少しも屈せず、すつと馬首を進めて、

「卑怯なるぞ次郎兵衛義兼。佐原と天野は父駿河守の手の者なれど、泰村と和殿とは従兄弟同士の間である。好い敵對あひてぢや、勝負々々！」

と詰め寄つた。

それを見てゐた父の平九郎は次郎兵衛危しと、つと前に進んで出で、

「そちは、甥の泰村。この胤義には、武士の情義なさけあるべしと思ひしに、手向ひするとは不都合千萬。憎い奴！ 者共、あれ討ち取れッ！」

と大聲に叱咤した。

「はッ。」

と、長男太郎兵衛胤連、次郎兵衛義兼、高井兵衛太郎等大太刀を振り翳して斬つてかゝつた。その勢ひに敵しかねて、泰村主從負け色立つてさつと逃げてゆく。遁すものかと追ひ掛ける。

中に佐原又太郎景吉、重圍を突いて一方を斬り破り東寺の東裏を大泥溝に沿ふて南へと落ちて行く。

「それッ、景吉を遁がすな。」と追ひ詰めてゆくと、

景吉、何と思つたか、手綱を引締めて馬を留め、背を振向き、

「これは佐原又太郎にてはござらぬ。藤内行成と申す者でござる。」

と、名乗つた。

「やあッ！ 藤内であらうと、行成であらうと、容赦ならぬ。討て々々！」

對手は、堀の際に追ひ詰められて、躊躇ふところを、太郎兵衛胤連間近に詰め

寄り、

「えいッ！」

眞向から、一と打ちに甲の鉢を打ち落した。

こちらも早業、又太郎は、その時遅く、この時早く、馬の上から、ひらりと身を躍らして、大泥溝を飛び越え、向うの深田の中に突立つてゐた。

それを見て、胤連は、思はず失笑して、

「はッ。どうだ、狐め！ 化の皮が剝がれたであらうがな。」

兜を叩き落された又太郎は脚の膝まで泥田の中に踏入れたまゝ、

「いかにも又太郎景吉に相違ござりませぬ。和子達がまだ關東にお出でなされた時分、この又太郎抱いたり負つたりしてお守りをしたこともござつた。今、此の景吉一人をお討ちなされたこと、所詮勝ち目のない戦でござる。また、和殿達を討ち取つたところで、何の用にも相成り申さぬ。勝負はこれまでになされい。」

彼は、深田に突立つたまゝ、こんなことをいつた。

胤連義兼も、勢ひ込んで太刀を握つたまゝ、重ねて笑ひもならず、そのまゝ引返へして父の處に戻り、その話をするに、胤義も思はずどつと笑つたが、心の底では悲しかった。

## 七

さうする中にも鎌倉勢は、犇々と新手を加へて殺到して來た。

角田太郎、角田彌平次の兩人眞先に進んだ。彌平次は、大將胤義を目懸けて組み附かんと詰め寄つた。胤義の馬は逸物であつた。ついで乗り過したところを、後から家來の三戸源八が近寄つていつて、彌平次に組み付き、互に馬と馬との間に落ちて、上になり、下になり暫くの間勝負もつかなんだ。

その間に胤義は馬を蹴立て、落ちていつた。

次男の次郎兵衛兼義と高井兵衛太郎の二人は、たうとう敵に隔てられて味方を離れ、最早落着いて死に場處を求めるほかはないと、逸散に馬を走らすうちに、いつしか東山のほとりに落ちて來た。見ると薄暗い樟の老樹の小蔭に地藏堂があ

つて、背後は深い竹藪である。

二人は互に顔を見合せて、どつと馬から飛び下り、竹林の中に分け入り、

「こゝだ〜。」

高井がいふと、兼義は黙つたまゝ肯いた。そこまで引入れた馬の鼻をとつて、じつと考へてゐたが、やがて掌で馬の首を軽く叩きながら、

「忠義な奴、可哀さうだが、生かして置いて、むざ〜敵に渡すは、貴様の本心ではあるまい。畜類とはいへ、死出の旅路の供をしてくれい！」

といひさま、一步後に退くと見るうち、いきなり太刀を振り上げて、たゞ一打ちに頸を斬つた。

高井もつゞいて斬つた。

「さあ、これで思ひ残すことはない。」

それから二人は心靜かに物の具を脱ぎ棄て、鎧の下に着た汗みづくの白麻の肌着の胸をくつろげた。その時義兼は、高井兵衛太郎の顔をじつと見ていつた。

「高井殿、お身と兼義とは、同じ三浦の一門の中でも、幼少の時から兄弟といふでもない仲好しであつた。お身は十七。」

「兼義殿は十六。二人一所に死ぬるも前世とやらの盡きぬ縁ぢや。」

「本望ぢや。」

「本望ぢや。」

二人は顔を見合せて寂しく笑つた。

兼義は又いつた。

「こゝで死ぬるは本望ぢやが、あんまり強う刺されなよ。兼義も上手に刺すほどに。」

二人は互に堅く手を取り交したまゝ刺し違へ枕を並べて死んでゐた。

仙洞御所で胤義主従と別れた山田次郎忠重は、嵯峨の奥に遁げて来た。そこには一條の溪流が、せゝらぎの音を立てゝ流れてゐる。折しも六月二十六日の眞晝のことゝて、兵火と炎天とで蒸すやうに暑い洛中から、そこに來ると、まるで極

樂にでも來たやうである。こゝには修羅の巷の物音も聞えてこぬ。深い夏木立の中で、岩にしみ入るやうな蟬の聲が一入静けさを増してゐるばかりである。

忠重は、ほつと一息吐いた。

と、溪流の岸で何か人の動く氣配がするので、又、きつとなり、様子をうかがつてゐると、思ひがけない、それは、作の伊豆守重繼といふまだ十七歳の少年であつた。

重繼は、馬を傍に置いて、谷川の水を掬つて湯を醫し、息を入れてゐるところであつた。

「おう、そこにゐるのは、重繼ではないか！」

重繼も不意に聲をかけられて、ぎよつとして此方を振向いた。

「お、父上も、そこにか。」

「もう、わしの武運も盡きた。これも世に在る時、善根功德をせなんだ天の報いであらう。」

忠重は悄然としていった。

重繼は、父を慰め顔に、

「さうでもござりますまい。父上は、かねて大乘經を書いて、供養せられてゐたではござりませぬか、是に過ぎた功德はござりませぬ。たとひ現世は苦難であつても來世の安樂は疑ひありませぬ。」

「うむ、よういふてくれた。しかし……」

と、いひかけるところへ、天野左衛門の手の者共、鬨の聲を擧げて、

「そこにゐたぞ！ 遁すな！」

と、猛獸の狂ふが如く押寄せて來た。

健氣な重繼は、太刀を押取り、近づく寄せ手を斬り拂ひながら、

「早う／＼父上。この隙に御自害召されい。」

と奮戦した。

父の自害する間、敵を打拂つてゐたが、敵の放つ矢に右の股を射抜かれて生捕

りにされて、斬られた。

八

次郎兵衛義兼を見失つた判官胤義と伴の太郎兵衛胤連の父子は、力の續く限り奮戦したが、數十人の郎従も今は或は落ち、或は討たれ、二人ばかりになつてしまつた。

「急げ太郎、東山だ！」

「通れますか？」

「運を天に任かして！」

二人は、馬を蹴立て、道を迂廻しつつ、東山に落ちていった。

東山の片ほとりに、鎌倉以來知合ひの心安い男が一人で住んでゐた。それは人麻呂といふ者であつた。胤義父子は、そこに忍んでいった。

もう、人も馬も疲れ切つてゐた。

胤義は、戸口にうかゞひ寄つて、

「人麻呂どの内にか？」

「おう、これは、判官殿。太郎殿にも。」

「いやもう、散々の負け戦。落着いて自害をする場處を求めて、こゝまで来た。父子おやこの者の最期を見届けて下されい。」

人麻呂は、何といつて慰める言葉もなかつた。

「いやもう、此の間中から戦の噂ばかり聞けば、判官殿には、京方の總大將になられたとか、お勝ちなされたとか、旗色が悪いとか。お噂を聞く度ごとに人知れず心を痛めて居りました。それでは、京方は、敗北になりましたか。」

「負けるにも負けるにも、大敗戦だ。あゝ、ひどく疲れた。しばらく休ましてくれ。」

「それはく御傷はしいことござります。此處は滅多に人に見附けられはいたしませぬ。安心してお休みなされませ。」

人麻呂は深切に判官父子を傷いたはつて、飯を炊いたり、酒を暖めて侷すめたりした。

判官父子は連日不眠不休の奮戦苦闘に身體は綿のやうに疲勞してゐた。

「手厚いお待遇もてなし。辱けなく頂戴いたすぞ。」

暫く休息してから、胤義は、小刀を取つて、わが鬚の毛を、ざぐりと切り取つた。それを九つに分けて紙に包み、

「人麻呂どの、これをそなたに頼む。この髪の毛一つ々みを屋部やべの尾上おしろへに奉る。どうぞ平九郎が後生を供養してたもれと申傳へてくりやれ。一包みは太秦うづまさに居る女房に届けてくりやれ。六つは六人の子供等に、父の片身に取りらし、一包みは、そなたの手許に置いて、胤義が亡き後の爲に見る度に念佛申しておくりやれ。」

人麻呂は泣きくそれを受取つた。

判官は暫く考へてゐたが、

「此處を最期處と思ふて來たが、太秦に居る子供達を、今一度見て死たいものぢや。太郎そちも母御に一目會ひたいと思はぬか。」

「會ひたうござります。」

「では、まゐらう。人麻呂何かよい工夫はあるまいか。」

いろ／＼考へた末、人麻呂は、女の乗る牛車を用意して來た。三人それに乗つて洛北の田舎道を牛に挽かれていつた。嵯峨の木島神社の森まで來かゝると、もう、その邊には、鎌倉の追手で充ちてゐるといふ牛挽きの男の話である。

（致方ない。日の暮れるを待たう）といつて、胤義と胤連の二人は、木島の祠の中に身を隠し、人麻呂一人だけ、白絹のとばりの懸つた女車の中に載せて置いた。

九

胤義が、まだ鎌倉に居つて、鎌倉の功臣三浦義澄の公達として若かつた時分からの郎従であつた藤四郎頼信といふ者があつた。その後發心して高野に登り剃飾して僧になつてゐた。

この程より都の方から來る噂に聞くと、京、鎌倉の間に確執があつて、合戦があるとのこと。故主平九郎殿が京方の大將であるともいふ。判官殿には、かねて

鎌倉の北條に對しては私怨も抱いて居られた。どうせ今日の鎌倉に對しては京方は齒も立たぬ。定めし判官殿は討たれて居られるであらう。せめて遺骸なきがらを探ねて、供養をして差上げたいものである。

頼信入道は、かう思つて、高野を下り、京に出て來て、ひそかに心當りを探ねて歩いた。東山の方にゆくと、それなら太秦うづまさの方に行かれた筈ぢやと、人の噂。そして丁度木島神社の森にさしかゝつて來ると、何處かそこらで、（あれ、頼信でないか。）といふ聲が耳に入つた。空耳ではなかつたかと思ひながら、祠の方を見やると、果して、まぎれもない故主である。

頼信はさては神佛の御引合せであつたかと喜びなら、四邊を見廻して、そつと祠の中に身を忍び入れた。

「よい處でお會ひ申しました。まあ、その御姿は、どうなされました？」

「いや、もう訊いてくれるな。此の場になつて愚痴は言はぬ。平九郎今にも死ぬ覺悟はして居るが、も一度、太秦に遣して置く稚い子供等を見て死にたいと、太

郎を伴ひ、此處まで來たが、行く手は、敵が満ちて居ると聞くゆゑ、この祠の中に忍んで日の暮れるを待つて居るところぢや。」

頼信は涙を拂ひ、

「勝つも負けるも運命でござりますれば、それは申しますまい。しかし、これより太秦へと仰せられましても、たとひ夜になりましても、それは叶ひませぬ。天野左衛門が手の者、野にも道にも立ち塞がつて居ります。」

胤義は聽いてゐたが、伴の太郎を顧みて、

「太郎、もはやこれまでぢや。遅れず自害をせい。」

「夙から覺悟して居ります。」

太郎胤連は、かう父に答へて、今度は頼信に向ひ、

「頼信入道よ、胤連が今はの際に、一と言母御前にいひ遣すことがある。今一度お顔を見ようと、此の處までまゐつたが、それも叶はず、父上の御供して、先立ち自害仕ります。弟次郎兵衛は高井太郎と一所に敵に懸け隔てられて、見失ひま

した。東山の方に落ち行きましたと思ひますが、今は、もう討たれて居りますか、自害をして、果てましたらう。……思へば、去年の春の叙任に、弟と一所に兵衛尉を拜した時、母御前この上もなく喜ばれて、長生して、是等が國司、檢非違使にも出世する日を見たいと仰せられた。今一度悦んでもらひたいと思ふてゐたに、運拙く先立ちまするが悲しうござる。太郎が斯様申したと、傳へてほしい。」  
それだけ言ひ終つて、口に念佛を唱へながら、小刀を逆手に取り、うんと一息に腹を掻き切つて突臥した。

苦しい唸き聲を立てながら、まだ兩脚をばたく動かしてゐる。父の判官は、口に南無阿彌陀佛を唱へつゝその脚を、じつと抑へて、靜かに息を終らせ、自分の太刀を以て、その首を打ち落し、

「入道よ、おん身への願ひは、胤義父子の首を、一旦太秦へ携へまゐり、女房どもに見せたる上、駿河守の手許に届け、貴殿、一族を皆な失ひ一人世に永らへて、家門の繁昌するは、おん日出度きことござる。平九郎が最期に、斯様に申



したと、傳へてくりやれ。……太郎、次郎兩人が待つて居らう、さらば、最期を急がう。」

といつて、薄暗くなつた祠の中で西に向つて坐し、十念を唱へつゝ腹を搔き切り、どつと前に臥した。

頼信入道は、泣く／＼刀を振り上げて、その首を斬つて落し、判官が肌着の白麻の袖に押包み、社やしろ祠に火を放して置いて、二つの首を抱へ、泣く／＼太秦へ訪ねていつた。

十

洛西の太秦には、判官の女房があげ暮れ都の戦の模様を心を傷めながら、夫の武運はいかに、子達は無事であるかとひたすら神佛を祈つてゐた。

この胤義の女房繪島の前といふは、右大臣頼朝氣に入りの僧昌寛といふ者の娘であつた。以前二代將軍頼家の侍女に上つてゐる間に一人の男子を生んだところ、執權義時が、ゆるもなく殺してしまつた。繪島の前の悲歎遣る瀬なく、同じ鎌倉

に住んでゐて、憎んでも憎んでも足りない、あの義時づれに顔を見せるのが厭はしいといつてゐたが、後に胤義に嫁し、胤義が禁裏警固の大番の役で京都に上つたまゝ、役は果てゝも、そのまゝ留まつて京に永住してゐたのである。

胤義との仲に、今度の戦で討死した太郎と次郎のほかはまだ四人の小さい子供があつた。

僧體の頼信入道は、雲霞の如き敵勢の中を、無事に通り抜けて太秦に辿り着き、判官殿父子の首級しるしを取出し、

「藤四郎、御二人の御最期を見届けてまゐりました。これなる御首級を御覽に入れよこの御言葉でござりました。」

今の今まで夫や無事か、俣達は悲つらないかと心に念じてゐた繪島の前は、そこに並べられた血みどろの二つの首級を一目見るなり、驚おどろ顛してしまつた。狂氣の如く眼を据えて、

「おうツ！ そなたは太郎兵衛。むごたらしい此の姿は、まあ何事ぢや!？」

「おいひさま、太郎の首級を先きに取上げて袴と抱きかゝへ、血に汚れたのも厭はず、彼女は頬と頬とを摺り付けたまゝ、わあッと泣き入った。」

「これ、太郎よ、胤連よ。どうして死んでくれた。何で、この母をあとに残した。つい五日前のこと、そちと次郎は初陣の喜び。父上と三人一所に戰鬥出をする時、母上、天晴れ功名して、勝つて歸りまするほどに、待つてゐて下されと勇ましく出てゆきやつた若武者の背姿が、まだ眼に見える。これ胤連、も一度この母に口をきいてたも。これいの、これ！ 弟の次郎はどうしやつた？ 義兼の様子を聞かしてたも。」

まつたく氣の狂つた様子に、頼信入道も傍に見かねて、

「少しく心をお鎮め下されませ。その物音を外より敵に氣取られてはなりません。……次郎兵衛殿には、高井殿とお二人にて懸隔てられ、見失はれましたさうでござります。」

「何とおいやる。そんなら次郎は高井殿と落ちたとな？」

「それが、胤連殿から母御前へのお傳言でござります。」

「おう、そんなら、次郎はまだ生きてござらうも知れぬ。はゝゝゝ。」

繪島の前は、氣味の悪い顔で、ヒステリーのやうに笑つた。

「はい、左様でござりますゆゑ、判官殿、太郎殿は、このやうな淺間しい御姿にお變りなされましても、そのやうに一圖にお力を落されますな。」

入道は、爲方なく、さういつて、慰めた。

繪島の前は、今度は夫胤義の首級を取り上げて、凝乎と見詰めてゐたが、

「平九郎殿、お前さまは常日頃、あの鎌倉の北條權太夫めを討ち取つて、そちの怨みを晴らしてやると、口癖においひなされてゐたに、情ない返り討ちにならしやることは、さぞ御無念でござりませう。お前様のお心の中を思ふて悲しうござります。」

といつて、血だらけの判官の首を兩袖に押し抱へて、傍の見る眼も耻ぢず疊に突伏して泣き入つた。

頼信入道は、何と云つて、慰めていゝやら言葉もなかつた。暫時の間泣くだけ泣き、悲しむだけ悲しむのを待つてゐるよりほか、せんすべもなかつた。

しかし、戸外は天野左衛門の手の者が夜道に塞がり、松明の照明に晝を欺くばかりである。

「これ／＼そのやうに聲をお立てなされましては、今にも敵が亂れ入つて、大事の御首級を奪ひ取られます。もつと靜かに／＼。」

入道は、尙ほ暫く様子を見てゐるが、

「判官殿の仰せに、太秦の者どもに一見させた上は、御兄駿河守殿の許へまゐらせよとの御遺言でござります。さ、どうぞ入道におあづけ下されまし。」

両手を差伸べて催促をした。

「が、繪島の前は、まるで聴き分けのない小娘のやうに、たゞ／＼頭振りかぶを振つて、獻すするばかりで、二つの首級を一緒に胸のところに確と抱き締めて、決し

て離さうとせぬ。

入道は、すっかり持て剩してゐるが、と云つて、何時まで、そのまゝに待つても居られぬので、

「さゝ、早う／＼お渡しなされて。」

終には繪島の前の手から首級をもぎ取るやうにして、急いで其處を立ち退き兄の三浦義村の陣屋へ持つていつた。

義村も流石に目をしばたゝいて弟の武運の拙きを憐れに思つたが、首級は直ちに六波羅の泰時の本陣に送り届けた。

十一

京都方の公卿、僧侶、武士の運命はいづれもこんなものであつた。大抵は生捕られるか、討死するかであつた。生捕られた者は、後で斬られた。

愛宕や高雄の山の奥に遁げ込んだ者も多かつた。

總大將の泰時の司令は、遁げる者は追ふな、なるべく寛大にせよといふことで

あつたが、勝に乗じた鎌倉勢は一つでも首を多く取つて、手柄にしようとした。  
秋田城じやうのすけ介義景は、梅うめの尾の山に京方が多勢隠れて居るときいて、押寄せて来て、限なく探索した。

その時梅の尾高山寺の住職高辨こうべん僧正、後に明惠上人めいゑといはれた僧は、文覺上人のお弟子であつた。文覺は、直ちきの頼朝に謀反を勧めたほどの豪傑僧で、鎌倉とは因縁が深い。文覺は、頼朝將軍の前でも、ずつと通つて、自分で、かうと信じたことは、遠慮なくいつた。その愛弟子の明惠上人であるから、すつかり欲を離れて、生命も惜しくない。況んや關東の武士が、どんなに暴れやうと、びくともせぬ。

土足のまゝ、どしどし上つて來た秋田城介の手の者共をじつと見て、そこに坐つたまゝ、

「これ〜、お前さん達、此處は三寶寄進の靈地ぢやぞよ。亂暴召さるな。」

「何をいやあがる、この老ぼれ坊主め！ 京方みやかたの落人を隠して居る筈だ。悉く引

出して城介の手に渡せ。渡さぬなら、その坊主頸もなくなるぞ。」

武士どもは詰め寄つた。

上人は、少しも騒ぐ色なく、

「ほ〜、これは近頃無體なることを承はる。いかにもお身達のいはるゝとほり、寺中ぢちゆうには、このほどよりの京洛みやこの戦を避けて、遁げまるつた者多勢ござれど、それはお身達關東の衆があまりに亂暴をせらるゝによつて、その難を避けた洛中の衆俗ぢや。決して双向ひなどする者でない。手荒なことをさつしやるな。」

「やい、抜け〜と何をいひ居る。坊主から先づ引立てい！」

城介の一言に、忽ち明惠上人に繩を打ち、

「いふことがあるなら、鎌倉の大將軍泰時殿の前にて沙汰せられいッ」

城介は、明惠上人を捕繩の姿で追ひ立て、六波羅の陣處へ連れて來た。  
その時泰時は、戦の善後處置に、叔父の時房、三浦義村など、頻りに評議をしてゐる所であつた。六波羅の陣營には堂上うちへも堂下したも軍勢で充滿してゐた。そこ

へ明恵上人は引かれて来た。

秋田城介は、手柄顔に、泰時の前に進んで、

「梅尾の住持僧高辨かうべんと申す者を捕へてまゐりました。あの山には京方の落人を數あま多た隠して居るとのこと。御糺問下されい。」

泰時は、それを聽いて吃驚した。

「なに、高山寺の高辨僧正にお繩を打つてまゐつたど？」

常々學問と宗教を尊重してゐた泰時は、梅尾の高辨僧正の事は鎌倉にゐても、よく知つてゐて、その高德を慕ふてゐた。

泰時は、それと見ると、すぐに坐を起つて、土間に下りて来て、跪き、

「これは、以ての外なる御狼藉。……事を辨へぬ田舎武士のことゝは申しながら、お詫びの申様もございませぬ。」

さういつて、自分で、上人の身から繩を解き、席を譲つて上座に直した。

秋田城介は、呆れた顔をして、それを見てゐた。

明恵上人は、坐に直り、騒ぐ氣色もなく、泰時に向ひ、

「梅尾の山に落人多く忍び入り、それを隠して居るとの御沙汰であるが、かの山はもとより三寶寄進の靈場、殺生禁斷の地であれば、たとへば鷹に追はるゝ小禽、獵人を逃るゝ獸、皆この高山寺の山に遁げ隠れて、か弱き命を繋ぎ申すぢや。されば敵を通るゝ軍兵ども、辛くも命ばかりを助かりて、木の根、岩の間に隠れて居るをば、わが身、御咎めにあづかりて、生命の難に逢はんずればとて、何とて情なく追ひ出して、敵の捕虜とりことなるを見棄てゝ居られませうぞ。

わが本師能仁のちんは、古いにしへ、鳩に替りて全身を鷹の餌食となされ、又、飢ゑたる虎におのれの身を興へたまひしとぞ承はる。高辨はいまだ、それほどの大慈悲には心及び申さねど、それほどの事致さでは叶はぬ。隠されるものならば、袖の中にも袈裟の下にも隠してつかはせたいと存じて居ります。今後とても助けることではござらう。しかし、それが御政道の爲に難儀とあらば、即時に高辨が頭を刎ねられい。」

明恵上人は、言葉は飽くまで静かであるが、超然として、かういひ放つた。  
それを傾聴してゐた泰時は、次第に頭を下げて、感涙を流し、

「有難き教にあづかりました。此度は泰時、思ひの外なる用事にて上洛いたし、  
本意ならぬことどもに日常追はれて居ります。されば生死の大事、國家の治亂  
の事共について教を承はりたいと、鎌倉に在つても、常に念願いたして居りまし  
た。今、不圖はからずもお目にかゝりましたは、これぞ三寶の然るべき御計らひとぞんじ  
まする。」

かういつて悦んだ。泰時は、その後つゞいて六波羅探題として京都に逗とどまつて居  
る四年の間、日夕明恵上人に參仰して治國の要道を修得したのであつた。

柳 營 夜 話

源頼朝が、平氏の爲に伊豆に流され、西海岸に近い北條と東海岸の伊東との間を彷徨してゐた際、初め伊東祐親の女八重姫に通じ、千鶴丸といふ子までもうけたが、祖父祐親入道の爲に、その子は、松河といふ河の淵に沈められて死に、頼朝は悲憤の涙を呑み込み、周囲の者に慰められて、凝と忍耐し、更に後北條時政の女政子に通じたことは、何人も知つてゐる有名な話であるが。――

この頼朝――佐殿の情事について、常に影の形に伴ふごとく、親しい関係といふか、取持ち役を承つてゐたのが、安達藤九郎盛長であつた。

頼朝には、良い家來が澤山あつたが、中にも、この安達藤九郎は最も氣の置けない良い家來であつたらしい。北條とか三浦とか、梶原とか佐々木とか悉く鎌倉創業の重臣であつたが、私は、つねづね頼朝と藤九郎との主従の關係を想像してみる毎に、政權の爭奪とか軍陣の功名とかいふ殺風景な心づかひの世界から暫く離れて、佐殿と藤九郎とのみの世界に一寸の間入つてくると、そこには何ともい

へない、一道の春風が漂ふてゐるやうな心地がするのである。この安達藤九郎盛長は大日本史の記す所によれば、口辯あり、頼朝が、治承四年蛭ヶ島に兵を擧げんとする時、盛長をして往いて東國の將子に遊説せしめたるに、至る所將士悉く感動して應諾したとあるから、將士を口説くに足る口辯に長じてゐたのみならず、頼朝の爲に女を取持つ氣轉も利いてゐたこと疑ひない。

こゝでは、藤九郎について語るのが本旨ではないが、私は、屢々鎌倉の歴史を讀むごとに、その人物風格に興味を持つのである。この人は後剃髮して、法名を蓮西といつた。其先は中納言藤原山蔭の後裔で、祖父國重は下野であつたといふから、永く東國に住してゐた一族であつたに違ひなく、頼朝が伊豆に流され蛭ヶ島に謫居するやうになつてから、常に側近に給侍してゐた。鎌倉に功臣は數多かつたが、藤九郎盛長は、それ等雲の如く林の如き無數の功臣の中でも創業の中の創業、草分けの中の草分けの家來であつた。

露伴氏の「頼朝」にも書いてあるがこの盛長の妻の母といふのが、比企尼で、

尼は、武蔵國比企郡少領比企掃頭允の妻であつた。元、頼朝に仕へて乳を與へた者であつた。尼は、以前自分の乳を與へた頼朝が、漸く十三で流人となり伊豆國に流されて來たと聞いて、傷はしきことに思ひ、陰になり陽になり、二十年の長い間頼朝の面倒を見て來たのである。

この尼に三人の娘があり、長女が藤九郎の妻、二女は河越太郎重頼の妻、三女は伊東祐親の二男伊藤九郎祐清の妻であつた。

比企尼が、乳母であつた緣故によつて流人の頼朝に手厚い後援をしたことは分つてゐるが、安達盛長が、常に影の形に伴ふごとく、流人たりし二十年の間頼朝に給侍するに至つたゆゑはよく分らぬが、それは比企尼の女を妻に貰つた緣に始まつたものではなく、その前から蛭ヶ島小島の館に往來給侍してゐたものであつたらう。いづれにしても、藤九郎と頼朝との主従の關係くらゐ、鎌倉の創業時代の歴史を讀んでゐて人の心を和ましむるものはない。その頃の豪族將士などの向背といふものは、昔の主従とか家人とかいふ關係も重かつたであらうが、その



實、今日でいふところの經濟史的な觀方から向背を決した所が多かつたにちがひない。これ決して無理からぬことである。しかしながら、藤九郎や比企尼が、謫流のそもくから、一圖に、佐殿に心を盡した奥底には、物質的には何の求むるところがあつたとも覺えぬ。

露伴氏の「頼朝」に、瀧口三郎經俊の母は、比企尼と同じく、これも佐殿幼少の頃、ともに乳をすゝめた間であつたがその乳母の子たる瀧口三郎の許へ、藤九郎盛長が往訪して、今度以仁王の令旨を奉じて平家討伐の旗を擧げたい御主旨であるによつて、そこ許に於ても、何分の御援助を乞ふと勸説した。

三郎經俊は笑ひながら、人も窮迫する時は途方もないことを考へ出すものである。今の佐殿の分際で、平家を滅ぼさうなどは、富士の山と高さを競ひ、猫の額の物を、鼠が取らうとするのと同じことだといつて、相談に乗らなかつたばかりか、石橋山の合戦の時には頼朝に向つて箭を浴せた。同じく乳母の子でも比企尼の女婿とは打つて變つた仕打ちであつた。

この藤九郎は、世に知られてゐるだけでも、一度ならず二度までも頼朝の爲に文使ひをしたり、取持ち役をしてゐる。一度は前にいつた伊東祐親の娘八重姫との仲、それを取持つたか、どうだか、とにかく比企尼の長女の婿が藤九郎で、三女の婿が、祐親の二男祐清。即ち八重姫の兄であつてみれば、藤九郎の妻と祐清の妻は姉と妹と、その義妹である八重姫が、父祐親の監視の名の下に、伊東の館の北の小御所に住んでゐる佐殿と忍ぶ仲になるまでには、是等の婦人達が、進んで仲介しないまでも、自からなる橋わたしとなつたことは想像に難くない。更に、その戀が悲しい破局を來し、仲に産まれたる千鶴丸は無慘に生命を斷たれたるのみならず、頼朝自身まで祐親の爲めに、あはや一命を失はれんとする危機に當つて、藤九郎は、生死をともにして、頼朝をして危く虎口を脱せしめた。

その後又元の北條に戻り、蛭ヶ小島にゐる間に今度は、盛長を使者にして北條時政の長女政子に戀を通じたことは、改めていふまでもないことである。

しかし、今、ここで私の興味を持つてゐるのは、それ等のことではない。北條や伊東の間を往來して、流人の境涯に立つた時代の頼朝の情事は、それだけいつて置けば澤山である。

蛟龍一たび雲雨を得れば池中のものではない。鎌倉の覇業成つて百事意の欲するまゝになつた今、頼朝は、つらく考へてみるに、自分が十三の時、父義朝、おどましくも平治の亂に破れ、己れは一旦は捕へられて、すでに生命を斷たれんとするや、やうやく清盛の繼母池の禪尼の庇護の下に救命せられて、東國に流されて今日となつたが、父も兄も、都の人である。十三の時まで都に居つて、おぼろげながら、まだ記憶に残つてゐるが、京には、男女の別なく都雅な人間が多い。わけても平家の一族には、さういふ人間が多かつたやうだ。あれから、もう二三十年になる。その間には、平家の全盛いふまでもなく、一門の驕奢華美を極めた生活は、平安朝の藤原氏を凌ぐ有様であるといふ。己れも今は鎌倉の主となつて、平家も今度壇の浦の海戦に悉く滅亡してしまひ、四海平定、誰れ恐るゝと

ころもない。ただ義経めが、とかく兄たる己れに楯つのが忌々しい。しかし、これとて、どうしても、己れの命に順従しないとあれば、最後の一斷あるのみだ。深く憂ふるに足らぬ。

三

藤九郎は、ある晩、頼朝の一人居る座敷へ入つて來た。

頼朝は燈を掲げて、伊豆時代から几帳面な習慣になつてゐる書法の稽古をしてゐた。

藤九郎は、蛭ヶ小島や伊東以來からの打解けた物腰で、ずつと頼朝の膝元近く進み寄り、一段聲を低くして、

「かねての御希望の者が、下つてまゐりました。かならず御意に召すだらうと存じます。」

藤九郎は、靜かな調子でかういつた。

頼朝は、これも顔色一つ動かさず、しかし親しい調子で、半身をこちらに向

け、盛長の顔をまじまじ見ながら、

「何處に置いて居る？」

「伏見廣綱に譯を話し、彼の宅に預けて居ります。ともかく御覽になりますか？」

頼朝は、うなづいて、

「さうか。由比ヶ濱でも歩くことにして、明日でもいつてみよう。」

藤九郎の方から京都のある方向に手を廻はし、京の美姫を一人、極内に物色さしてゐたのであつた。それが、今度下つて来たといふのである。

頼朝にしても、京育ちの女が一人ほしいと思ふのに無理もない。政子は相思の仲であつたといふが、飢ゑたる者に不味い物なしの譬。もとより彼女の女丈夫らしい偉器、才幹、意思、縹緲もまんざらでなく、それに、父時政の後援が、擧兵以來ひきつゞいて鎌倉創業に多大の功績があつたことを思ふと、政子は政子で決して仇おろそかにはならなかつたが、色慾の好みからいふと、どうも政子のやうな女丈夫型の女では物足りない。北條の娘であるから、相當な教養もあり、本來

發明な生得であるから、凡てに愚かではなかつたが、ともすると、あまりに氣の剛いのが、夫婦の間の情味を殺風景なものにした。

（おれも、今の身分だ。京の女を一人買つても、鎌倉の盛衰には、かゝはりなからう。）

考へてみると、自分は十三の時から、ずっと東國に居るので、かれこれ二三十年の間、生れ故郷である京都を見ない。それに反して義経でも範頼でも義仲の討伐、引續いて平家討伐のために、常に都近くに居りがちであつた。ここに義経などは比企の尼には孫娘にあたる河越重頼の娘を妻に嫁はしてあるにもかゝらず、戦陣の間京洛かみがたに行つてゐる間に、随分と好きなことをしてゐる風評である。静といふ白拍子を可愛がつてゐると梶原などは専らそのことをいつてゐた。

で、藤九郎に、自分の意中を、打明けると、藤九郎は大きく肯いて、

「御尤もでございます。」

さういつて、早速手配をしてゐたのであつた。その美姫が今度ひそかに鎌倉に

下つて來た。

頼朝は、早速翌日、お忍びで、由比ヶ濱に出遊する風を装ひ、藤九郎一人を隨へて、笠井ヶ谷の伏見廣綱の家に歩を運んでいつた。

女は二十ばかり。やつぱり京の白拍子であつた。京都での呼び名であつた醍醐をそのまゝに用ひてゐた。頼朝は好い楽しみが出来た。それは、平家が壇の浦で全滅した時の捷報を手にした時の喜びとか、三年前に政子が頼家を生んだ時の喜びとは又異つた、生き效のある悦びであつた。

四

しかし、ものは隠すより露はるゝはないといふ譬のとほりいつしかそれが、妙な所に知れてしまつた。それは誰れかといふと、人もあらうに、政子の里方北條時政の繼室牧の方である。牧の方といへば、政子に優ることも劣らない油断のならぬ女性である。こゝにいふまでもなく、後に實朝を失ふて、自分の娘婿の源朝雅を立て、三代の將軍にしようと思つたほどの女である。牧の方は、それを聞込む

と、これは、いゝことを聞いたものだと、早速機會を見て、政子に告げ口をした。

「御臺所には、ゆめく御油断なされますな。」

政子は、里方の繼母が、譯ありさうな様子の顔色を眺めながら、

「何事でございますか？」

「この頃武衛の様子に何か異つたことはございませぬか。」

「はい、格別？」

「はて、何ぼ賢うても知らぬが佛とやら。武衛には、この節足しげくお忍び姿にて、館をお留守になされることに心づきはなされぬか。」

牧の方は、そゝのかすやうに、かういつて、政子の顔をじつと見た。

「一向そのやうな様子も見受けませぬ。」

牧の方は、つと唾を呑込み、

「それでこそ、御臺所は、武衛にとりて良い女房にておはします。」

皮肉な口調でいつて又、じろくくと政子の顔を見てゐた。

政子は何の事やら、一向合點のゆかぬ面持ちで、

「母上としたことが、はて、何を仰せらるゝやら。」

と笑つてゐると、牧の方は、

「武衛に御油断なされますな。此の頃京洛から、ひそかに白拍子を召下され、三日にあげず、女の許に忍ばせらるゝことを御存じではございませぬか。」

牧の方は逐一醍醐のことを政子に告げた。

どうして政子がそのまゝにして置かう。牧の方と相談の上牧の方の弟牧宗親に萬事をいひ含め、醍醐の隠れてゐる伏見廣綱の邸に押寄せ、有無をいはさず家を打壊はしてしまつた。壁姫醍醐は、びつくり仰天して廣綱の家人に扶けられ、取るものもとりあえず大多和義久の宅に危難を遁れた。

しかし政子は、そんなことは頼朝に向つては、おくびにも出さなかつた。

牧の方は、その次政子に會つた時、

「首尾よう女を追ひ拂つたさうでございます。武衛は何か仰せられましたか？」  
「牧殿には大層御手敷を掛けました。いえ、武衛には、そんなことは知らぬ顔をして居ります。」

「それく。それがよろしうございます。御臺所はあくまで知らぬ顔でゐらせられませい。ほんによい心地でございます。しかし醍醐とやらいふ白拍子はまだ鎌倉に隠れて居るらしうございますから、この上とも油断も隙もなりませぬぞ。」

政子は肯いて、

「それはもう。……どうして男といふ者は、あゝも好き者が多いのでございませう。」

「みんな、女は京の者に限るやうにいふて居ります。それが憎らしいではござりませぬか、ほゝゝゝ。」

「ほゝゝゝ、阿呆らしいではございませぬか。」

牧の方と政子は小氣味げに、そんなことをいつて笑つた。

その日は柳營でも、種々評議の事があつた。かねて京都の堀河の夜襲で討ち洩らした義經の行方が、はつきりしなかつたのだが、北陸道の方から情報が入つて来て、どうやら辨慶等少數の家來を隨へ山伏の姿に身を窶して奥州に下り、藤原秀衡に頼つていつたといふことが、ほど明瞭になつたので、それ等の善後處置。それから、神佛を信することの篤い頼朝は、多年の心願成就して、今度父祖の仇敵平家を討ち滅ぼし、漸く四海平定に歸したのも、これ、ひとへに日ごろ信する神佛の加護に因るもの、それにつけても、南都の東大寺は先年平重衡の爲に兵火に罹つて炎上して以來、それきりになつてゐるので、佛恩報謝のために、先づ東大寺の再建を思ひ立つた。それ等のことを相談するので頼朝も殆ど一日幕營の表御座所に居つた。

藤九郎盛長は、ひそかに注進する者があつて、伏見廣綱の騒動を知つてゐたが、その日の公務が終るのを待ち、却つて奥御座所などに入つてゆくと、政子の

眼が光つてゐるのが危険なので、大江や三善をはじめ、まだ多勢の將士どもが評定所を下らずにゐる間に、頼朝の傍に近づいていつて、一件をそつと耳打ちした。

頼朝は、それを聞いて、ただ、

「ふむ、さうか。」

といつたきりであつた。

頼朝は、それから柳營の奥に入つて來た。柳營といつても鎌倉が創立してから、わづか五六年にしかならないので、頼朝や政子の生活は、まだ簡素なものであつた。侍女なども、ぼつぼつふえて來たが、奥では二人顔を合はすことが多かつた。

頼朝は怒つた顔もせず、平常つねのとほりで、じつと政子の顔を見た。政子の方でも、館の外では、どんなことがあつたかといふやうな顔をしてゐた。

でも、頼朝の方から口を開いた。

「九郎が、たうとう又、陸奥へ落ちたさうだ。」

「さうでございますか。國々の關を嚴しく固めさせてあつたと申すではございませぬか。」

「さうだが、判官に最負する奴共も、なか／＼多いからな。」

「ほんとうでございます。……それと申せば、九郎殿には白拍子静とやら申すお妾があつたさうでございますが……。」

政子は、それを口にしながら、頼朝の方を、凄い眼尻で、ちらりと眺めた。

頼朝は、その眼の光を十分に感じた。だが、そんな風は、少しも顔色に表はさなかつた。

「うん、そんなことも梶原などが話して居つたな。」

軽く應へた。そして次をいつた。

「九郎が秀衡の許に下つたとすれば、又、陸奥に手入れさせねばならぬ。」

「まだ／＼枕を高くしては寝やすまれません。」

六

その頃頼朝は、心願寺長勝壽院を建立してゐたが、それがほゞ落成しかけてゐたので、その模様を見るためといつて、館を立ち出で、藤九郎から聞かされた大多和義久の邸に、忍んでいつた。

白拍子翩翩は、身を慄はして隠れてゐた。

「義久、厄介をかけたな。」

「どう仕りまして。醍醐どのがお氣の毒でございます。」

「宗親に、急いでまゐれといへ。」

「はいッ。」

義久は早速家來を、牧宗親の處に走らせた。

宗親は、前にもいつたとほり時政の繼室牧の方の弟である。宗親は頼朝からのお召だといふので、恐る／＼やつて來た。

頼朝は、はつたと宗親を睨みつけた。

「不届者め！ 近うまゐれッ。」

宗親が爲方なく進み寄るのを待ち構へて、いきなり腰刀を抜き放つて、左の手に宗親の襟頸を取つて振り伏せ、膝の下に組み敷き、どつかと身體の重みを載せ掛け、

「やい、この不埒至極のたはけ奴！ よくもこの頼朝を侮蔑いたし居つたな。」

さういひながら、宗親の頸筋に、冷りと、刀の平打ちを喰はした。

「助けて置けない奴だが、北條殿への手前もあれば生命だけはそのままにしてつかはす。」

さういつて、髻たぶさを攪み、づぶりと截り落した。

×

×

×

頼朝が死んで、頼家が將軍職を繼いだ。盛長の子景盛は父の子として、鎌倉の重臣の一人であつた。これが又、京都から美姫を買つて楽しんでゐた。ところが景盛が幕命もだし難く、駿河の一揆討伐に行つてゐる間に、頼家は景盛の女を盗んだ。景盛は歸つて來て、それと知り、大に憤つて、既に鎌倉に騒動が持ち上ら

うとした。母政子が、ひどく心配して、頼家が、その行狀を改悛しないならば先づ、お前の箭で、この母を射殺して置いて、仕たい三昧のこゝろをしてくれと切諫した。それで頼家も景盛の妾だけは諦めた。それは頼朝が死んでから半歳立つた立たぬ間の出來ごとであつた。



頼朝と女性

源頼朝といふ人間は傑ら物とは思ふが、自分は餘り好きな人ではない。けれども彼が女性に關係のあつた一面を想像すると、私は、なかく、此の英雄の情史について興味を感じ、且つ深い同情さへも禁じ得ないのである。

人として情事を解し風流を知らざる者を、玉の盃底なきが如しと、古人もいふてゐるが、彼れ頼朝が流竄の身から起つて天下の政權を掌握した英雄豪傑といふだけで、一點情事の逸話を遺さぬ人間であつたならば、いかに一層無趣味な、冷薄な、愛嬌のない人物として吾人に不愉快な印象を留めたことであつたらう。

ところが、英雄色を好むと古い諺にもいふとほり、頼朝は實に英雄らしく色を好んだ。彼は軍事と政治とにかけては威壓が効き、抜け目なかつたにも係はらず、情事に關しては、恰も明治初年の元勳政治家が花柳界の狭な女性に弱い尻を叩へられて、頭の上らなかつたごとく自分の家來共の手前にいろんな、愛嬌に富む破綻を曝露してゐる。

特別に深い研究をしない吾々にでも、頼朝の情事として普ねく知られてゐるのは伊豆の流人であつた頃伊東祐親の女に通じてその戀が終を完うしなかつたこと、その次が北條時政の女政子と通じて伉儷全きを得たこと。鎌倉の覇業漸く成つた頃ある美姬を蓄へてゐて、それが政子の知る所となり、一と騒ぎ持ち上つたこと。これだけは日本外史にも書かれてゐることで、少年日本外史を讀んだほどの人は皆知つてゐることである。

頼朝は沈勇にして喜怒哀樂を容易に顔に表はさなかつた人であるといふが、是等三人の女性に關係した方面から見た頼朝は、彼の性格を想像するに最も好い鍵鑰である。

## 二

頼朝も多くの平凡人と同じやうに幾度か戀をした。そして度々破綻の苦を嘗めてゐるが、彼はその苦を、毎時も凝乎と強い意志の力で嚙み締め踏み堪えてゐる。私が頼朝の戀に特に興味を持つのはその點である。これから私は少しの間、

彼の三人の女性に關した點について頼朝の戀と、彼の戀の艱難に際して發露した彼の性格とを思つてみよう。

古今東西の文學に書き表はされた英雄偉人の戀愛に關する記録は珍しくないが、今日でも私の心を最も強く打つものはシェークスピアの四大悲劇の一つであるオセロの悲戀である。これは實録ではない沙翁の創作であるが、これを讀んでも如何に、あの平和温厚なる容貌の持主であるウイリヤム・シェークスピアが宇宙大の博大且つ深刻なる心境の經驗者であつたかと思はれて、今更この世界の文豪の繪像の前に拜跪させられるのである。

それで、オセロの悲戀は頼朝の情事とは何等の交渉がないやうであるが、私が今特に頼朝の戀について思つて見ようとする要點とは多少對照の意味の關係がないでもない。オセロは遂に戀に負けた。頼朝は最後に戀に勝つた。オセロは戦争には強い武夫であつたが、一婦人に對する戀には弱かつた。オセロほどの勇者でありながら戀には脆く、半ば自分の描いた悪魔の爲に到頭身を破滅してしまつ

た。その悲しい深刻な矛盾を取扱ったのが沙翁の大手腕である。

オセロの戀は悲痛なるものであつたに違ひないが、しかし頼朝の戀の悲しみもオセロの悲しみに比べて決して深刻でなかつたとは云へない。否、ある場合に於ては頼朝の悲戀の方が遙に痛恨なものであつたらう。少くとも外形だけを見たところでは、さうあるのが當然である。それは頼朝が最初の戀であつたところの伊東祐親の女との悲しい經緯に於てさうであつた。

ある意味に於て常に現代に最も多く興味を持ち、且つ現代の謳歌者である私は頼朝の如き、七百年も遠い過去の世の英傑について、さまで興味を持つてゐる次第でもない。それは、彼の生活した時世、彼の境遇、彼の事業等が今日の吾々の生活と殆ど全く没交渉であるから、幾ら彼の人物や痛快なる偉業に感服したところで、今日の生活に、引いて參考とすべき必要がないからである。豊臣秀吉は小田原に北條氏を征伐した時足序あしついでに鎌倉八幡宮に詣で、頼朝の木像の前に立つて、卑賤より起つて天下の權を掌握した者は卿と吾とのみである。併しながら卿は元

より將家の嫡流であるが、吾は本來の卑賤である、磊落なる秀吉は笑談したさうである。その後徳川家康が豊臣氏に次いで天下の政權を掌中に收めた時には、秀吉とは違つた意味で、頼朝の治績にひどく敬服し、侍臣をして鎌倉時代の文書を研究せしめ、政治の參考に供したいふことである。(徳富蘇峯氏の大日本國民史にも書いてある。)

即ち秀吉や家康などの、封建政治、覇府政治の行はれた時代ならば、立志傳的にも、又、政治上にも頼朝の遂行した事蹟は大いに參考になつたのであるが、吾々の現代の生活は、源頼朝の時代を擔ふべく餘りに時代精神が異り過ぎてゐるのである。それゆゑ私は格別源頼朝に就て研究してゐる譯ではない。否少年時代から讀み古してゐる一部の日本外史と源平盛衰記と、吾妻鏡の一部分との他には彼に關する何等の知識もない。そしてその知識のないことを悔いも恥ぢもせぬ。何となれば、もし私が政治家の傳記を學びたいと思へば、七百年前の頼朝の傳記を知る前に世界の現代政治に關係のある英國のアスキスカロイド・ジョーデカ、

米國のウイルソンの傳記でも讀んだ方が、どんなに私を賢くするか知れないからである。

けれども境遇とか時代とかを遙に超越して、人間不朽の本性に根ざしてゐる戀愛といふ問題になつて來ると、七百年の昔も今も變りはないのである。故にかういふことが言ひ得られる。頼朝の兵馬の事蹟など、今日の吾々とは全く風馬牛であるにも係らず、此の英傑の人間らしい戀の経緯ばかりは、永へに吾々の興味の中に新しく生きてゐるのだ。

三

嘗て、源平盛衰記を讀み、頼朝が、伊東入道祐親の女に通じ、千鶴丸といへる三歳になる男兒さへ出來てゐる想思の仲を父入道の爲に割かれ、剩つさへ、いたいけなる、頼朝鐘愛のその男兒は祐親入道の命により沈みを附けて淵に投ぜられ、女は奪はれて他人に嫁せられ、尙ほその上に頼朝は自分の一命までも祐親の爲に失はれんとしたといふ悲痛なる、一條の場面に至つて、私は、此の冷靜に

して理智的なる英雄兒の不幸なる運命に同情せざるを得なかつた。

事新しくいふでもないが、「源平盛衰記」に書いてある、その慘事の概略を取り摘んでいふところである。

頼朝が伊豆國に流罪せられてゐる時分、その國の豪族伊東祐親に頼つて居つた。祐親には四人の娘があり、その二人は既に他に嫁し、三人目の娘と兵衛佐と人を忍ぶ仲となつた。すると娘はいつしか兵衛佐の胤を宿し、生まれたのは玉のやうな男の子であつた。兵衛佐は殊に悦んで寵愛してゐた。字を千鶴丸と呼んでゐた。それがやうく三歳になつた春の頃、乳母に懷かれ、數多の幼いお供などを具して前栽の花を折つて遊んでゐると、その頃、祖父に當たる祐親入道は恰も京都の大番が果て、伊豆國に歸つてゐたが、一日ふとその幼い子供を見付けて、「その子供はどうした子だ。それはたれぞ。」と訊ねた。傍に附いてゐた乳母は、即座に答ふる術を知らないで、自分はその場を外づしてそうつと向ふに逃げてしまつた。祐親は家に入つて、妻女にそれを訊ねた。妻は遂に隠さんよしもなく

「あれぞ、入道殿が京洛に上りておはす留守の間に三女が、さるやむごとなき殿との仲に設けたる幼き者にておはす。」と、實を明かした。

祐親入道怒つて、「誰れぞそのやむごとなき殿とは。」と責め問うて、祐親はます／＼立腹し、「今平氏全盛の折柄、商人修業者など名もなき者を男にしたといふならば、却つてそのまゝにさし置いてもよいが、源氏の流人を此の祐親が婿にとつたと知れては、平家のお咎めあらん折はいかゞ申すべき。」といつて雑色三人、郎黨二人に嚴命して、やう／＼三歳の春を迎へたばかりの可愛ざかの千鶴丸を呼び出して、石を縛し伊豆の松川の奥の白瀧といふ淵の底に沈めよといひ附けた。三つになる千鶴丸は幼な心にも、おぼろげにそれを覺つて、泣き悶えて逃げようとするのを、取り抑へて下人の手に渡した。眉目風姿紛らふべくもなく兵衛佐に似てゐるのを見ると、流石に雑色も惻れに覺えて何とかして殺したくなく思つたが、祐親の命に従はなければ、汝等は他心あるかと、自分達の頸を斬られるのが恐ろしさに、泣く／＼幼兒を抱き取つて松川の淵に連れ行き、沈みを附けて

水底深く投げ込んでしまつた。そしてその母親たる娘を同じ國の住人江間小次郎なる者に嫁せしめた。兵衛佐の憤りと悲しみと思ひ知るべしである。愛兒は慘殺され、愛人は奪はれて他の男に與へられた、凡てが殘忍酷薄を敢えて爲て意に介することをしない野蠻な上代のことであるが、頼朝はつく／＼と流人の身の甲斐なきを悲しみ歎いたことであらう。「盛衰記」には、「兵衛ノ佐此事どもを聞き給ひ瞋る心も猛く、歎く心も深うして……」と書いてある。實際、容易に喜怒を色に表はさないといはれた鐵の如き意思の頼朝もその時ばかりは、胸を打碎かれたと同じやうに心の弱きを覺えたことであらう。彼は激怒悲憤の情遣る瀬なく、祐親入道を討たんと思ふ心、千度百度逸つた。けれど、そのたび毎に凝乎と煮え立つ胸を撫で、無念の頭振り<sup>かぶ</sup>をふり、「いや／＼自分は大事を思ひ立つ身である。その事を成さずして、今一婦人一幼兒の故を以て私の仇を報ぜんとして、身を亡ぼし命を失ふ事愚かの至りである。大なる志有る者は、少しの怨みを堪へねばならぬ。」と、自から思ひ宥めて、猛る心を制し、無念の齒を噛んで時節の到るを待つてゐた。

祐親入道はそればかりではない、平家の嫌疑の身にかゝるを憚つて、序に兵衛佐をも果たさうと企んでゐた。すると祐親の次男の伊東十郎祐兼が竊に其事を頼朝に告げ、

「父入道老狂の餘り、便なき事をのみ振舞ひ候ひし上、猶も悪行を企てんと仕る。心の及ぶ處制止仕れども、若し思ひの外の事もこそ出で侍れ。立ち忍ばせたまへ。」と、注意した。兵衛ノ佐はそれを聞いて、驚き且つ喜び、

「嬉しくも申したり、是れ年來の苦心なり。入道に思ひ懸けられては、いづくにか遁るべき。身に誤なければ、自害をすべきにも非ず、只命に任せてこそはあらめ。」と答へて、頼朝が流罪の間影の形に伴ふ如く常に彼の身邊を離れなかつた從臣の野三刑部盛綱、藤九郎盛長に意を含めて、

「頼朝一人遁出でんと思ふなり。是れにて祐親法師に故なく命を失はれん事いひ甲斐なし。汝等かくてあらば、頼朝居らざること人知るべからず。」とて、大鹿毛の馬に乗り、鬼武といふ舍人ばかりを具して、夜半に伊東の館を遁れ出た。

そして道すがら、

「南無歸命頂禮八幡大菩薩、義家朝臣が由緒を忽ちに捨て給はずば、征夷將軍に至つて朝家を守り、神祇を崇め奉るべし。それ猶叶ふべからずば、伊豆一國が主として、祐親法師を召捕つて、この怨を報い侍るべし。いづれも宿運拙うして神恩に預るべからずば、本地は彌陀如來に御座します。速に命を召して、後世を救ひ給へ。」

と、心に祈誓を籠めた。これは源平盛衰記の著者が語るところであるが、その時の頼朝の心中は正にこんなものであつたらう。

これを読んで私は密かに思つてゐた。榮枯浮沈の極端から極端に劇しかった頼朝の一生涯の中で、恐らくこの祐親の女との悲痛なる戀愛ほど彼にとつて感情上の不幸惨苦は無かつたのであらう。この事件は單なる婦人と愛兒に對する女性的な悲哀であるにしても、涙あるのが本來英雄の眞面目である。この悲痛なる事件はきつと頼朝の一生涯に大轉機となつてゐるに違ひない。すると、ついこの

程、偶然人から借りて幸田露伴氏の「頼朝」といふ小冊子を讀んでみると、頼朝に關しては随分詳しく研究して居られるらしい同氏は、頼朝が以仁王の令旨を奉じて伊豆に兵を擧げるに至つた、最も有力なる彼の内部的動機を伊東祐親の冷薄慘忍なる措置に憤激したことにあると斷定してゐる。私はそれを讀んで、ひどく共鳴を感じたのであつた。

頼朝にしてみれば、つくづく自分ほど不幸なる者は又と世にない時まで悲しみ慨いたであらう。父の義朝は累代の家人なる尾張の長田忠致父子の爲に殺されてゐる。今又自分は、愛する女との間に擧げた一子千鶴丸は慘殺され、愛人との仲はその人祐親の爲に割かれて、温情も容赦もなく他の男に與へられた。その上自分も、祐親の二子祐兼の告ぐる所なかつたならば二十年前の父義朝と同じ運命に終つたかも知れなかつた。

#### 四

頼朝の如き男性的の人間には、源氏の覆運を挽回し、天下に跳梁跋扈する所の

平家を討伐して無念の死を遂げた父義朝の遺靈を慰むることが最も大事であつたに違ひない。そして無論後年志を得て鎌倉に幕府を開き、日本六十餘州の總追捕使となつて天下の兵馬の權を掌中に收めた成功の悦びは、僅かに祐親の娘との戀の満足や、愛兒千鶴丸の膝下に嬉戲するを見て楽しむ喜びよりは遙に偉大なる満足であつたことは疑ひを容れないのであるが、祐親の館に於ける悲痛なる感情の不幸は、或は平家を壇の浦に全滅した勝報の喜びを以てしても、尙償ふことが出来なかつたかも知れない。何となれば頼朝は喜怒を色に表はさない人間であるといはれてゐるにも係はらず、少くとも妻の政子よりは人間の情味が豊かであつた。(そのことは後にいふ。)それほど感情の悲痛をば、凝乎と、陰忍したところに頼朝の英雄的な性格が遺憾なく表はれてゐるのである。前にも書いたとほり、源平盛衰記の筆者が、兵衛ノ佐此事どもを聞き給ひ、瞋る心も猛く、歎く心も深くして、祐親法師を討たんと思ふ心、千度び百度び進みけれども、身に大望を抱けることを思ふて、小さき私の怨を忘れたといつてゐる、そのとほりであつたら



う。その憤りと悲しみには英雄も凡夫も區別はないのである。たゞその堪え難い悲痛を凝乎と自分で思ひ宥めて、目前の仇を報ぜんが爲に愚かなる輕舉に出でて身を滅ぼすこともせず、他日一層大いなる手段によつて痛快に仇を報ずることを得た所に英雄と凡夫との區別があるのである。

##### 五

北條時政の長女政子と通じたのは、祐親の女との悲戀の苦味をしたた健か嘗めさせられて後幾許にもならぬ間のことであつた。が頼朝は實際その政子にどれほど戀してゐたものか解らない。勿論頼朝は妻政子の男まさりの氣性才幹には大いに信賴してゐたには違ひない。そして、それよりもまだ多く政子の父時政や弟義時などに信賴してゐたことは、今更事新しくいふ必要もない明白なる事柄であつた。政子の男性的な氣稟については、これも世に傳へてあまりに明白なることであるが、それについても、唯簡單な一事であるが、頼朝と政子との平素の氣性の明らかに想像されて面白いことは、頼朝が富士野に狩した時のことであつた。日本外

史の筆は簡潔に頼朝と政子との性情を書き分けてゐる。これは吾妻鏡に記されてゐることである。

頼朝嘗獵富士野。頼家甫十二。射中走鹿。頼朝大喜。使人報之政子。政子曰。彼將家曹子。獲一禽何煩專使。頼朝愧之。

これを見ると、頼朝●如き偉スら物でも妻の政子には頭の上らなかつたことがあつた。そして他の事とは違ひ、頼朝は父の情として、可愛い頼家が始めて十二歳の年少で走る鹿を射中したことを、ひどく喜んだものと思はれる。喜びの餘り、特使を、富士の裾野から鎌倉の政子の處へ使はして、その事を知らして遣つた。容易に喜怒を色に表さぬ頼朝にしても、流石に、そこは父親の人情である。その悦びには上下貴賤の區別はない。頼朝の喜んださまが想像出来るのである。すると、女は別けてものごと、母親の政子は一層それを聞いて喜ぶであらうと思ひの外、わざ／＼獵場から特使が馳せ報じたにも係はらず、世の普通ならば、「おや／＼さうかへ。まあそれは、大變な手柄だつたねえ。」といつて喜びさうなところ

を、彼女は使ひの者に格別、遠方をわざ／＼御苦勞であつたねえともいはすに、  
つんとして、

「何だね、それくらいに事に、仰山らしく、わざ／＼使ひで知らして。彼は將軍  
家の總領息子だ。獸類を一つ獲つたくらゐ、何でもありやしない。」といつて、特  
使を返した。使者が獵場に歸つていつて具さに其事を告げると、頼朝は政子のい  
つたことに對して一寸耻しく思つた。政子といふ婦人は随分の確り者であつた  
ことは此の一つだけでも想像出来る。頼朝の方が遙かに普通の人情を有つてゐ  
た。

歴史上の婦人で政子ぐらい傑出した女もないが、又彼女くらの癡猛、酷薄、普  
通の人情を以て律することの出来ぬ女もない。彼女は今日いふ所の變態心理の持  
主であつた。或は極度のヒステリーと、そのヒステリーを實行する強い意思との  
不思議な調和の出来た女性であつたか。とにかく彼女は二人しかない頼朝と實朝  
との兄弟の子を殺すことを敢てして悲しむ色もなかつた。彼女には自分の嫁した

家とその血統の存續よりも自分の實家の方が遙かに大切であつた。この事は世間  
住々ある習ひであるが、それにしても自分の父や弟が、自分の産んだ子を殺すの  
を平氣で見ることが出来たのは、普通の人間の血の通つてゐる女性とも思は  
れない。残忍を敢てして少しも悔み悲しむことをしなかつた、歴史上最も殺伐慘  
酷なる鎌倉時代の氣風であつたから、多く怪しむを要しないことかも知れぬが、  
自分の實の子が殺されるのを見てゐては、どんな偉い人間でも――まして女性で  
あつてみれば、決して黙つて居られない筈であるが、政子は平氣であつたらしい。  
一步譲つて、それならば、あの際頼朝も實朝も無き者にしてしまはなければ、ど  
うあつても故右府の大業を永く維持することが出来なかつたので、大義親を滅す  
る思ひで、覇業の確保を期す爲に不肖の兒等を除くことの萬止むべからざるを認  
め、時政義時等の所爲を默認したのであらうか。幾度考へてみても、政子といふ  
女性くらの性格の不可解な女性は他に類がない。

それならば、夫の頼朝に對して情愛が乏しいかといふに、なか／＼さうでな

い。甚だしい妬悍な婦人であつたこともいろいろの舊記に顯はれてゐるところである。

六

政子は妬悍の女性であつたから、處もあらうに鎌倉殿の館の中でも、どうかする時々は、頼朝の胸倉を取つて、「あなたはね、あなたはねえ。」と、小突きまはすくらゐのことは、おつ始めたかも知れない。そして、そんな時には、きつと安達藤九郎盛長などが、兩方の中に分け入つて、「奥様まあ、お心を落着けて。」と、取留めたことであつたらう。と、こんなことも想像される。政子の妬悍の猛烈であつたことは、たゞ單に口に出したり、素振りや顔色に見せて、頼朝にこつびどく當つたゞけに止まらないであらう。きつと、館の中で、政子の方から手出しをして、將軍家ともある人の面目にも關はるやうなことを仕出かしたに相違あるまい。その都度藤九郎盛長などは近侍の婢どもから呼ばれて、

「藤九郎さま、盛長殿。安達殿は何處にござります。はやうはやう。御前さまの

お傍へ。御臺様が又いつもの御氣色でござります。」といふ叫聲を聞き付けて、盛長は長い廊下を急いで、今、政子が、嫉妬の相形凄じく右大臣頼朝の胸倉を取つて暴れ狂ふてゐる處へ驅付けて來る有様も想像出來る。さうも思はれるが、又考へてみるところによると、政子は、前にもいつたさほり頼朝以上に喜怒を色に表はさなかつた、氣性の烈しい女性であつたから、假ひ頼朝が他の女と關係するやうなことがあつても、嫉妬の結果手出しをして端たない下等社會の男女のやうな取亂した行爲はなかつたとも思はれないが、たゞ單に顔色を變へたり少許口に出して嫉妬したくらの、生優しいことでは、頼朝が、常に政子に對して遠慮してゐたといふことが不可解になつて來る。鎌倉幕府の創立には幾ら政子の内助の功が多かつたとしても、頼朝は決して其等の人物の傀儡である人間でもなかつたのだから、いはゞ自分の器量で拵へた身上である。他の女が二人や三人あつたさて、それくらゐのことで何も政子の手前を氣兼ねすることはないのである。又政子が少し喧しいことをいつたからとて、一ど、ほりの優婉な調子で嫉妬

するくらゐなら、彼女の妬悍の烈しかったことが、いろ／＼の記録に書かれた今日まで傳はつてゐる筈もないのである。故にきつと、政子の嫉妬といふものは、右大臣とか征夷大將軍とかいふ高貴の位にある者に似げもない下々の者同然の端たない亂行であつたに相違ない。頼朝は他の事とちがひ、流石にそればかりには辟易して毎時政子に負けて、なるべく無事に／＼と堪忍袋の緒を締めてゐたものであつたらう。

七

ところが、此處に一つ頼朝の秘密の妾と政子の嫉妬とのいきさつについて吾妻鏡に記録されてゐる表沙汰の出來事がある。吾妻鏡に依つて書かれたらしい山陽の日本外史の方が文章が活躍してゐるから次に引いてみる。

頼朝有嬖姫。託之伏見廣綱家。時政妻牧氏知之告政子。政子性妬悍。即使牧宗親毀廣綱宅驅逐其姫。姫走依大多和義久者。頼朝聞之託事往義久宅。召宗親罵之。親截其髻。時政聞而恥之。不告而歸其色。

この事は政子が嫡子頼家を生んでから、まだやつと百日ほど経つた時分のことであつた。政子はその時二十六であつた。その嬖姫は名を龜前かめの前といつた。伏見廣綱といふは幕府の右筆で、頼朝の爲に公事の文書ばかりでなく、内證の手紙なども代筆した人間であつたらう。時政の妻牧氏といふのは後に有名な陰險な當時の鎌倉婦人の一人である所の所謂牧の方で、時政の後妻であつたから、政子には繼母であつた。この牧の方は又何うした考へであつたか、なにも、そんな事は、出産後漸く百日も経過しない、まだ十分産褥を離れない政子には、知つても黙つてそつとして置けば可いのに、そこが牧の方らしい所である。政子の耳に入れたから堪らない。政子は忽ち嫉妬の炎を燃して早速牧の方の甥である牧宗親を召んで、龜前の預けられてゐる伏見廣綱の家に押掛けて行つて、其邸宅を打壊はし嬖姫を追拂はしめた。姫は廣綱に扶けられて難を大多和義久の家に避けた。

こゝに頼朝にも政子にも嫉妬の經緯に通常人と異つて、互に腹底の深いところがある。政子は繼母からその事を聞かされても決して、すぐ筒抜けに頼朝に向つ

ては、それを嘔氣にも出さない。頼朝が初から自分に内證でそんな不埒な事をしてゐるのだから、知つてもそうつと黙つて、頼朝の裏を搔いてやるつもりで、自分の方でも内證で夫の嬖姫を追拂はしめた。政子が腹の底に踏み應へのある、確り者であつたことは、此の一事だけでも明白である。そして、何喰はぬ知らん顔をして阿呆面の頼朝の顔を、腹立たしさと、お可笑しさを嚙みしめて、じつと見てゐたことであつたらう。頼朝も又そのとほりである。もともと政子に隠してゐることであるから、こちらは一層のこと、そんなことを口に出しもせぬ。腹の中では随分非道いことをし居る。政子の亂暴にも困つたものだと思ひながら、明らさまに「お前そんなことをしてはいけないぢやないか。ともいはない。もし頼朝がそんなことを一と口でも口に出さうものなら、政子の方では必ず十口も言つて逆捻ぢを喰はしたであらう。それで頼朝は中一日を置いて、他事に託して館を出で大多和義久の宅に赴いて委しい事情を糺し、牧宗親を呼び寄せて、頭から怒り付け、立腹のあまり自から腰の一刀を抜いて宗親の髻を斷ち截つた。宗親こそ

好い面の皮である。頼朝と政子との兩方に板挟みになつて、一方を立てれば一方が立たないことになる。それで頼朝は宗親に、そんなことをして當り付ても政子には何ともいひ得ないのである。尤も宗親自身の手落ちでもあるまいが、娘の牧の方が少しく不謹慎であつた落度を自然に父親が責任の一半を背負つた結果にもなつたのである。何となれば牧の方がそんなことを、べら／＼と政子に饒舌りさへしなければいゝのに、牧の方のいつたことは蓋も實もない淺<sup>あさはか</sup>取果な端たないことである。

是等の事柄は、格別新しい發見でもなく、普通の書に記されて人口に膾炙してゐる事柄であるが、頼朝が一流人より屈起して平氏を討伐して父祖の仇を報じ、次いで天下の亂を平定して、政權を掌握したといふ英雄偉人としての公けの事績に並行して、それを裏付けしてゐる彼の私生活の秘事は、表面の事績に一層の生命を吹込んでゐるのである。頼朝が祐親の館に於ける悲戀の苦味を嘗めて、それをぢつと堪え忍んだこと、政子の嫉妬の鋭鋒を腹の底に深く踏み堪へてゐたこと

ろ、さういふところを見るにつけても、倍々頼朝といふ人が、一流人の身から屈起して源氏の覆運を挽回し撥亂反正の覇業を大成した人物であつたかゞよく肯かれるのである。

## 自註

「三國干涉」は今から四十六年前の事である。自分が二十才の春の事であつた。本文の申に書いてあるとほり日本國民の一人として私は日清戦争の結果蕞爾たる島帝國が一躍亞細亞大陸に領土を所有したことをどんなに悦んだことであつたらう。ところが新聞でその記事を読んだそのすぐ翌日、號外は露・獨・佛三國の干涉の爲め餘儀なく我が國は折角戦勝の代償として割讓させた遼東半島を清國へ還附しなければならぬことになつたと報じた。

その時私は岡山市に住んでゐた。私はその號外を見ると、忽ち全身の血が悪くなつたやうに身體が痺びれてしまつたかと思つた。その失望落膽の感情は約五十年後の今日にあつて尙歷々と思ひ起すことが出来る。

父母が死んだ時よりもその失望は尙甚だしかった。恰もその翌年一月、二十九才を算へたばかりの次兄を急性肺炎で喪つた。その時の私の悲しみは、自分でも驚くばかりであつ

た。

私はそのために哀傷の餘り自分の身體を悪くして氣管支カタルになつた。遼東半島還附の失望落膽がその兄の死が私に與へた精神的打撃と同じ程のものであつたことを忘れ得ない。我が朝野の間でも、それが非常な問題になつた。輿論は轟々として全國に響き渡つた。議會では、政府反對黨の改進黨が、外交の失敗を彈劾した。その急先鋒が尾崎行雄氏であつたことを記憶してゐる。その他犬養毅・島田三郎などが交々起つて政府の失策を糾弾した。ところが改進黨と常に並んで政府反對黨であつた自由黨も、その冬の議會でさつと反對の聲を揚げるであらうと思つてゐたところ自由黨は何時の間にか一八〇度の大轉換をして議會では却つて反對黨の彈劾演説に對して伊藤内閣陸奥外交の萬止むべからざる所以を辨護した。國民は、この自由黨の豹變した態度に恰も期待を裏切られたかの感を抱いた。然しそれは自由黨の態度が穩健であつたのだ。そのことは篇末に載せてある故岡崎邦輔氏の當時の回憶談にも、明らかである。

然し、一度び三國干渉に依つて遼東半島還附のことあるや國民の悲憤慷慨やる方なく、

熱涙を飲んだ國民の自然の聲として發したのた臥薪嘗膽といふモットーであつた。この指導精神に依つて時の政治家は國民をリードしたのであつた。今日は一億一心と言つてゐるが、今から四五十年前の日本の人口は僅かに三、四千萬に過ぎなかつたであらう。誠に心細い次第であつた。私は此の時の恨みを遂に忘れることが出来なかつた。然し十年、臥薪嘗膽の報いは三十七八年の日露戦争に依つて此の遺恨を晴らすことを得たのであつた。私はこの日清戦争から日露戦争に至る十年間位る日本國民の發展途上にあつて緊張した時代は無かつたと思ふ。或は私自身が明治年代と共に成長したのだから、殊にそう思ふのかも知れぬが、その十年間の日本國民の歴史小説を書いてみたいのが當時から私の宿望であつた。が、その志はついに達せられなかつた。志が遂げられないので私は下根の性自暴自棄するに至つた。

大石良雄は祇園の茶屋酒に酔つて自己を踏晦し、且つ鬱屈を慰めたが遂に初一念を貫いた。日本國民も同様十年臥薪嘗膽の結果初一念を貫いたのである。然るに私は祇園の茶屋酒に酔つて、初一念とは似ても似つかぬ艶文作家としての名を得た。事志と違ふとはこの

ことか、題して三國干渉といふ以上、全国的に當時の歴史小説を書くには清國全權大使李鴻章の下關に於ける遭難事件をも必ず書かなければならぬのだが此の稿を初め或る雑誌に掲載した時に雑誌の都合上紙数を制限せられたので止むを得ずその部分を割愛せざるを得なかつた。此度單行本として出版するに當り、本來ならば全然稿を改めて新に書き下ろすべきであつたが盲目の故にそれも果たすことが出来なかつたのは残念であつた。

参考書「伊藤公秘書類纂」巽來次郎著「日清戦争外交史」陸奥宗光著「蹇々録」。

「英雄涙有り」は眞書太閤記に依つて羽柴秀吉の中國陣を書いたものである。私は瀬川甫庵の眞書太閤記を愛讀してゐる。これは決して大衆文學ではない。正史とは多少相違してゐるところがあるにしても實に優れたる歴史小説である。こんな面白い太閤記があるのに後人の大閤記などあらずもがな。これを全部ドイツ文に翻譯してヒットラーに讀ませたいものである。

「太閤歿後の風雲」はその題名の通り太閤死歿直後の諸將領間の黨争を寫實的に書いたものである。「その前夜」はその續きとも言ふべきものである。この二つの短篇で、前田利家と家康との關係も面白いが、寧ろ細川忠興、藤堂高虎、石田三成等の動向が面白いと思つてゐる。

「北條泰時と明恵上人」は鎌倉時代隨一の政治家であつた北條泰時が政治の要諦を明恵上人に聞いたことに興味を抱いたことから、この短篇小説を書くことを思ひつたのである。

我が國邦の歴史を溯のぼりてみるに奈良朝の聖德太子を除いては、政治を哲學的思索的に重視したのは北條泰時であつた。彼は頼朝の如く又織田信長、豊臣秀吉などと同じく随分現實家でもあつたが、又理想家でもあつた。そして自から無學なることを知りて謙虚であつた。彼が承久の役に上洛した機會に梅尾の高僧明恵上人に參した後、京都守護職として重ねて京洛に在留する間常に明恵上人に就て政治哲學を問ふたことは、私の最も興味を感じ





昭和十六年八月十五日 印  
昭和十六年八月二十日 發  
行 刷

三國于涉

定價二圓三十錢

著者 近松秋江

發行者 櫻井均

印刷者 須藤酉壽

發行所 櫻井書店

東京市小石川區大塚町三三番地  
櫻井書店  
電話大塚(86)二二三八番  
普通東京一六九〇九五番  
會員番號一一〇三五番

社會式株給配販出本日 九ノ二町路淡區田神市京東 元給記

じてゐることである。  
「柳營夜話」「頼朝と女性」は吾妻鏡によつて頼朝と政子と京都から迎へた白拍子との三角關係を極めて寫實的に取扱つてみたものである。

近松秋江

徳永 直著 柳瀬正夢装

短篇集 風

B列6號函入豪華美装  
二七一頁九ボ組  
定價二圓送料十四錢

(収録作品) 風、見舞、海の上、罪ある子供、自然について、男の中で  
出征する人、ジャガ芋の記、青い風、こんやく賣、蜘蛛、宿の一夜  
徳永の自我はつくり直された。いや、つくり直されたのではなくて、本来の  
ものが光に浴した。光は浴し——この言葉ほどわれわれを電撃させることはな  
い。浴き光の中で、この時代の怒濤の中で、徳永の魂はどこに坐つてゐるか  
。人類の懐郷を、民族の詩を、そして庶民の夢を、徳永は求めることもない  
のであらうか——？ 否である。今こそ望むクレドの地は、あたゝかき父  
母の懐、祖國の生活であつた。見よや緑濃き東海の民族が、いかに希望に満ち、  
家庭を樂しみ、そして刻苦勉勵してゐるかを。演説はいらぬ、教養はいらぬ。  
軀をぶつつけた文學から、われわれの響くべき演説の聲は溢れ、習うべき教義  
のマーチは示されてゐる。そしてそれは足踏みすることもなく明日の地平へと  
進む喜びに満ちてゐる。明るい思想——明るい人生——明るい徳永の、この明  
さは、今日の時代のバトンを、必ず次の世に渡すとの情熱に燃えて、自信に燃  
えて、苦行するその人知れぬ努力から生れたのである。大都會の屋根の下に、  
曠野の旅舎に、風さやぐ田園に、波輝く海上にと、本輯の風景は思ふだにひろ  
く、とたのしい。そしてある時は良い父親であり、又は夢強い少年であり、良  
心の使徒である裸の直が、羅如として目に見える。泌々とあたゝかく強い祖國  
に感謝し、磅礴たる現代の「風」をここに世に贈る。

室生犀星著 著者自装

中篇小说 蝶・故山

B列六號(舊四六判)  
五號組・函入豪華表  
紙網唐紙使用・價二  
圓五十錢・送料十四錢

室生犀星氏が、いつまでも詩心を失はず、詩の榮光の中に散文の世界を築いて  
ゐることは、日本文學にとつての大きな喜びである。原始人は、神の力を借り  
なければ、農耕の業は出来ないものだと思つた、とヴェントは言つたが、犀  
星氏は、この素朴な見解に似て、實は嚴たる科學の定則を直感した耕すもの  
の運命を、最も素直に、文學の上で活かしてゐる作家である。著者にとつて、詩  
の尊さは、神の如きものである。その神が、著者に無門の希望をもたらしたも  
のとして、記念さるべき近作二篇「蝶」「故山」を收め、一類とし、當に良心的  
出版を志す我が櫻井書店から、新鮮な初夏の風に乗せて諸賢へお贈りする。  
「蝶」には、胡蝶のやうにあでやかな少女達の生と死、夢と憧れの中に、青春  
の哀愁と歡喜が描かれてゐて、なにげなく身邊を寫しながら、それが應擧の藝  
術を想はせる逸品である。「故山」は、著者の故郷金澤の、時局的風手を傳へつ  
つともすれば搖曳する過去の古い藝術家型へ、痛烈な反省と諷刺を試みた犀  
星氏稀にみる自虐的作品である。この二作の底に、熱く流れてゐる、生死老幼  
の境もなく人みな喜ばざるべからざる明るい思想の摺得は、犀星氏の未來への  
一つのエポックとして、後世に遺るべき記念塔の響を、惜みなく、この一巻が  
受取るに違ひない。以上に二つの短篇、氏独自の新作詩篇を加へ、好季颯爽と  
して市へ出づるの良書、躊躇なく御一讀を願ふ。



田中英光著 中川一政装

われは海の子

B列6號(舊四六判) 九ホ組二七〇頁・函入豪華美装・定價一圓八十錢・送料五錢

池谷賞「オリムホスの果實」に遍く青春の息吹の清純な美しさを傳へた著者が、苦折半歳、瞠目の進境を以て成る書き下ろし長篇。宗教が少年の肉體と精神の上に、さながらカプリヤ紀の恐龍の如く、大きく翅影を投ずる時に、聰明多感のわれらの中岡少年の懊惱も、正に創世紀に踏み出さんとする人類の原始的形態と意欲に相通する。荒々しい熱風帯を泳ぐのである。従来、少年を取材の對象とし、又は特異兒童の成長や環境や、悲哀を描いた文學は決して枚舉に遑少しとしないが、「われは海の子」に試みられた程、多彩にして灼爛、深刻に掘り下げて尙、餘韻爛々、悲しくも美しいリズムの味覺は、例へば、コクトオの文章にいふ、さくさくと磯を噛む波の、眞珠の貝に戯れる典麗な感覺の響に満たされる逸品は少ない。一度び、氏の奔放の筆致赴く處、忽ち轉じて、鎌倉の濱に騒ぎ立つ一瞬の怒濤のやうに、狂亂と雜音の掬となる、とすつと静謐の彼方には、颯て、大自然の從容とした靜寂の叙景が、人々の胸中を一過した嵐を抱くやうに、徐ろに讀者を惹はしてゆく。或は浪蒼く山嶽なる鎌倉の天然の中に、扱ては富豪の別荘に集ひくる思春期の少年少女群の悲喜行狀の裡に、中岡少年の軀も、鎌倉の烈日に照らされるトマトのやうに赤く熟してゆくのである。彼等の覗く背後には、大人の愛欲の世界が、微笑しくも展開されてゐるのだ。本書は少年を描くたゞの小説ではない。人間の誰にも潜む最も根原的な物を最も原型的な一線に於て別決した、身慄ひを禁じ得ない情熱の書である。

徳永直著 柳瀬正夢装

はたらく一家

四六判函入美装・三二〇頁 定價一圓九十錢・送料十四錢

内容目次——はたらく一家、彼岸、父親の覺え書、陽子・道代・町子、最初の記憶、梶川つるの死、木槿のある村、淺草の客、八年制。

あくまで自分は働く人々を書いてゆく、と著者は昂然と宣言する。働く人々の中に息吹く、思想と生活力の逞しさ、自意識の過剰も、蒼白き惱みも茲にはない。たゞ劇しく生きぬかんとする、「生きとし生ける人達」の力強い生活意識が、時局の光に照された、雄叫びとなつて展開される。其處に著者は何をさし、何を語らんとするか。

鶴田知也著 福田新生装

家庭の幸福

四六判函入金模様表紙三三〇頁 定價二圓・送料十四錢

新しい時代に、青年と婚期の娘を持つ家庭の親達は、どう處すべきか。その態度を今こそ正しく掴まねばならぬ。又子たる青年男女は、如何に家庭を通して現代に生くべきか。讀者はその思想と性格の方向を神山父子と芳枝の生き方に、身近な息吹と共に、受取るであらう。生活とは、現代の思潮と幸福の關聯性を誤たす把握し、追求することである。すれば、世の父と子の新しく正しき生活の課題を本書は心ゆくまで描いて餘さない。併せて世評高かりし近作短篇五篇を収む。

(四六版三百四十頁・函入金模様豪華装幀・定價二圓・送料十四錢)

佐藤春夫著 棟方志功装  
長篇小説 わが妹の記

四六判函入豪華三七〇頁  
定價二圓・送料十四錢

佐藤春夫氏の底に久しく秘められた長篇風俗小説。才能あつて德行なき孤立無援のインテリが、浮生の浪の中で行方を見失つた妹を捜し求める曲折のうちに、著者が年來敬慕せる師友を登場せしめその全貌を彷彿たらしむ。歳暮の煩雜に悩み病院に逃げこむ傘雨宗匠、元旦の年始客を避けて墓参する荷風散人、骨董屋然たる「校正の神様」神島島介翁、漂渺の筆致よく這般の人物を描破し著者の近業中屈指の傑作たるを失はぬ。  
(四六版三百七十餘頁・函入豪華厚表紙・定價二圓・送料十四錢)

宇野浩二著 鍋井克之装  
母と兄と子

四六判函入豪華美裝  
定價二圓・送料十四錢

内容目次——心つくし、足りない人、夏の夜がたり  
子がくるまで、子が来てから。

肉親の愛情と桎梏と憂愁に飽くまで徹しつゝも、颯々たる筆致と透視の玲瓏境に氣高き藝術の燈火を輝す巨匠宇野氏が、己の家庭を描いて生み成せる自傳的作品集。登場の人物は之悉く氏の身邊に日常坐臥する血縁の人達。以て著者が如何に我が子の如くわが母の如く、この名作を愛撫措く當はぬかを察して餘りあるものがあらう。宇野文學中粒選りの、冠絶の手法の頂點を劃すのみならず、人間宇野を識るにも無二の名著であることは論を俟たぬところである。

三好十郎著 戯曲集

浮(ぶい)標

(四六判豪華特製布表紙函入・三百四十  
八頁・定價二圓六十錢・送料十四錢)

(付) 寒驛、彦六なぐらる

ドラマ・ツルギーにかけては、深刻にして明朗、悠々として繊細、人心の機微と時代の地平線を縦横に織り交せて、舞臺のイリエーションは諸賢の机上に揺曳するの法だ、観る爲のみならず地方の人士へ贈つては讀む爲にもと心が碎かれ、その最後の舞臺を持つてあらう。劇とははじめて成り得た。劇とは諸賢へと呼びかけ得るであらう、それをこゝへ證明したのである。苦闘の精神は輝く。紙不足か再版不能。賣切迫る。至急御申込ありたし。

徳田秋聲著 棟方志功装

長篇小説 土に癒ゆる

(B列) 九〇組二七〇頁  
定價一圓八十錢送料十四錢

かりそめの旅繪師を父に持つ田園の美女涼江が、出生と同時に負はねばならぬ宿命を背負ひ、現世に揉まれ、映書界を泳ぐ文化的プロリカ紳士、扱ては若き脚本家倉持、篤農青年林郎へと、愛欲無限の靈肉の變轉極りなき巡禮は、果して彼女一人の氣あるや? 涼江の體臭迄匂ふかとみる名描寫の中に、徳田の鏡は何を見、その利刃は何を刺さんとす! 老文豪の述作中に於ても、特異の「タストロフイ小説」!

181218

櫻井書店版

## 年を歴た鰐の話

山本夏彦譯

付(のこぎり鮫とトシカチざめ)

(レオポール・シヨヴオ繪並に文)  
A 列5號・版畫五十四葉・定價二圓三十錢

三個の短篇と五十數葉の版畫から成るこの一卷は不思議なアルバムである。作者は主人公に奇妙な動物どもを借り、彼らを放埒に活動させ、人間生活に深い暗示を與へる。

老いたる鰐はリウマチにかかり、悪事と知りつつ自分の曾孫の一匹を食つた。眷屬に指彈され、ナイル河の古里を追はれ、波のまにまに浮遊するうち、可憐な蛸を戀人に得た。蛸は鰐を哀れんで彼を養つてやつた。徐々に健康を恢復するや鰐は恩愛の蛸の足を一本づつ食つた。自己辯護を繰返しながら、數日後には頭まで食ひつくしてしまつた。そしてにがい後悔の涙を流した。鰐は孤獨な生活に堪へられなくなつて斷食自殺を企てたが、俄かに局面は轉換して遂に彼は無智な土人共に崇め祭られて生神様になる。

事毎に自問自答し、内省癖と自己辯護癖のあるこの鰐は、近代のインテリの或る相に酷似してゐる。作者は人間性の暗黒面を寫すに當つて、自然派の諸作家の如く、醜惡な人物を登場させることを極力避け、動物に假託してかへつて人生を活寫することに成功してゐる。再讀に堪へない最近の群書中にあつて永遠の生命ある稀有の藝術品、ラ・フオンテームの壘を摩す諷刺と諧謔に満ちた動物小説である。

